

II 教育研究等の質の向上の状況

- (1) 教育に関する目標
 - ① 教育の成果に関する目標

- 中期目標
- [教育プログラム]
 - ① 現代社会で活動するための教養教育と総合的な専門教育を展開して、豊かな人間性と全人的素養を培い、高い教養と専門能力を備えた学生を育てる。
 - ② 学士課程教育カリキュラムを、卒業後の社会での活動や専門性に適合するよう整備充実する。
 - ③ 科学技術の進歩並びに社会の要請に対応できる課題探求能力を備えた高度専門職業人及び研究者を育成する大学院教育を行う。
 - [教育システム]
 - ④ 教育システムを整備し教育成果の向上を図る。
 - [教育改善施策]
 - ⑤ 教育成果の点検・評価を充実させ、教育の質の向上を図る。

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【57】 ○教養教育 [教育プログラム] ① 4年一貫カリキュラムをより実質化するために、各学部の専門教育と連携した教養科目の編成と授業内容の設定を行う。</p>	<p>【57-1】 ○教養教育 [教育プログラム] ○ 専門教育への接続教育として分野別基礎科目の開講を維持し、内容を充実する。</p> <hr/> <p>【57-2】 ○ 下位学生むけの数学・物理の分野別基礎科目において、自習学習用のドリル(e-ラーニング教材)を作成し、学習効果の向上を目指す。また、上位クラス向けの補助教材も作成する。未履修者向けの基礎実験科目を引き続き開講する。</p>	<p>【57-1】 ・ 専門教育への接続教育として平成18年度から導入を始めた分野別基礎科目は、平成21年度には、89科目(人文系16科目、社会系12科目、自然系61科目)(昨年度と同数)を開講し、安定した開講体制を確立した。</p> <p>【57-2】 ・ 「確かな学力の向上を目指す理系基礎教育」(特色GP:平成19年度から3年間の採択)の3年目として引き続き、数学・物理学の基礎能力を修得するための下位クラス(特別クラス)科目として「微分積分入門」「微分積分基礎」、及び「力学初歩」と「力学基礎」、さらに「化学実験基礎」と「物理実験基礎」を開講した。 物理の分野別基礎科目における下位クラス学生対象に、自習学習用のドリル(e-ラーニング教材)を改訂した。物理の上位クラスを統一化し、教科書とe-ラーニング教材を新たに作成した。数学上位クラス学生対象に、補助教材(毎週テスト問題)を改訂した。高等学校課程において物理・化学を履修しなかった学生を対象に、基礎実験(物理学実験基礎・化学実験基礎)を平成20年度に引き続き開講した(物理学実験基礎履修者数:人文学部1名、工学部21名、農学部5名の計27名、化学実験基礎履修者:人文学部1名、工学部23名、農学部15名の計39名)。</p>
<p>【58】 ② 効果的な4年一貫教育の実現のために、教養科目を区分ごとにカリキュラム編成のためのガイドラインの設定等によってその趣旨を明確にし、履修基準を見直す。積み上げ的な学習が求められる科目(群)は、体系的なカリキュラムを組み、授業科目を精選する。</p>	<p>【58】 ○ 学部への接続教育について平成18年度に見直された分野別科目等の履修基準が首尾よく実施されるよう必要なチェックを引き続き行う。平成18年度分の改革内容が引き続いて実施されるように「ガイドライン」と「実施計画案」を検討し、それに沿ってシラバスチェックを継続して行う。</p>	<p>【58】 ・ 学部への接続教育について平成18年度に見直された分野別科目等の履修基準が首尾よく実施されるよう必要なチェックを行った。平成18年度分の改革内容が引き続いて実施されるように「ガイドライン」に沿ったシラバスチェックマニュアルに基づいて、各分野別科目の専門部会においてシラバスチェックを実施した。修正を要する担当教員には修正を要請した。</p>

<p>【59】 ③ 教養科目の年次履修を適切に配分し、各学部の専門カリキュラムと整合的に配置する。</p>	<p>【59】 ○ 教養科目の専門カリキュラムへの整合的な組み込みに関して「教養教育の在り方特別委員会」で具体的に審議するために、課題を整理し審議の方向性を提示する。</p>	<p>【59】 ・教養科目の専門カリキュラムへの整合的な組み込みに関して「教養教育の在り方特別委員会」を開催（4回）し、授業の精選や内容の見直しの基礎となる教養教育に係るディプロマポリシー及び科目群との関連を示すカリキュラムマップについて審議した。整理された課題と審議の方向性を第2期中期計画の計画施策に取り込んだ。</p>
<p>【60】 [教育システム] ④ 各科目に学修達成度を設定し、科目内での成績評価の一貫性をもたせ、各授業科目において成績評価の基準化と適正な点検評価を行う。</p>	<p>【60】 [教育システム] ○ 同一テキスト・同一テストが可能な科目で設定した学修達成度に合わせて科目内での成績評価の一貫性をもたせ、その進捗状況を点検する。</p>	<p>【60】 ・総合英語及び健康・スポーツ科目、分野別基礎科目（微分積分Ⅰ、Ⅱ、物理学など）、未修外国語（中国語、スペイン語など）では同一テキスト・テストを用いて一貫した成績評価を行った。</p>
<p>【61】 ⑤ 科目の特性に応じたクラスサイズの設定や学生の習熟度を配慮したクラス編成と授業内容にする。</p>	<p>【61-1】 ○ 平成20年度に引き続き、主に工学部学生を対象に数学で接続教育をおこない、同時に工学部・農学部生を対象に物理の接続教育を継続する。両科目については、教材の改良をめざす。</p> <p>-----</p> <p>【61-2】 ○ 学術日本語の技能別クラス（口頭発表、講義の聞き取り、学術書の読解、レポート作成）及び学術日本語基礎の教育成果の促進を図る。</p>	<p>【61-1】 ・工学部学生及び農学部学生を対象として、入学時にプレースメントテストを行い、基礎学力不足と判断された学生を対象に数学では「微分積分入門」と「微分積分基礎」を、物理では「力学初歩」と「力学基礎」の特別クラスを編成し、週2回の授業を開いた。これらの授業科目では、対象学生に合わせて開発したeラーニング教材を利用した自習学習を義務付け、学習の向上を図った。数学の教材では、設問および回答の選択肢を見直した。その他、教科書、eラーニング教材ともに授業と教材の連続性を強化し、理解度を向上させるためのドリル問題の設定などを行った。</p> <p>【61-2】 ・平成20年度に引き続き、入学時に全留学生を対象に日本語習熟度テストを実施し、一定基準に満たない学生に対して学術日本語基礎の履修を義務付けた。これにより日本語の支援を必要とする留学生に対し、より細かな対応をすることができた。学術日本語の技能別（口頭発表、聴解、読解、レポート作成）授業を少人数クラスで実施し、学習者に対するきめ細かい指導と対応を行った。</p>
<p>【62】 ⑥ 学生の自律的学習を支援するシステムを整備充実する。</p>	<p>【62】 ○ 一般教員がEラーニングシステム(学習管理システム)を用いた教材開発を行う際に、十分な技術的支援を実施できる運用体制の充実を目指す。</p>	<p>【62】 ・一般教員がeラーニングシステム（学習管理システム）を用いた教材開発が容易にできるようにするために運用方法の改善を行った。</p>
<p>【63】 [教育改善施策] ⑦ カリキュラムがガイドラインに沿って編成されていることを点検評価する。</p>	<p>【63】 [教育改善施策] ○ 平成21年度の実施計画がガイドラインに沿って編成されていることを点検評価し、それを平成22年度の実施計画に反映させる。</p>	<p>【63】 ・教養科目のガイドラインと平成18年度に確定した履修基準に沿って平成22年度教養教育の基本計画を策定し、それに基づいて平成22年度教養科目の実施計画を策定した。</p>

<p>【64】 ⑧ 個々の授業について点検評価し、その結果をフィードバックして教育改善を図るシステムを構築する。</p>	<p>【64】 ○ 点検評価のフィードバックのシステムの機能強化をより推進する。そのため平成20年度からの新方式について点検評価する。</p>	<p>【64】 ・平成20年度に見直した授業アンケートの項目のうち、各科目群ごとの個別項目について、各科目群の専門部会ごとに設問設定の有効性などを検証し、一定程度確立していることを確認した。 授業改善のためのフィードバックとしては、教員個人は、授業アンケートの実施結果に基づき各教員が自己点検評価を実施し、両方の結果がセンターのWebサイトに公開され、フィードバックするシステムで運用している。さらに、各専門部会では授業アンケートの分析結果を基にFDを開催し、大学教育センター年報に掲載することとしている。</p>
<p>【65】 ⑨ 教員の教育力向上のために、FD活動を活発にする。</p>	<p>【65】 ○ 各専門部会でのFDを継続し、教育の質の向上や授業の改善に結び付ける。大学教育センター主催のFDではFD担当者の研修会として開催し、学部FDの支援をおこなう。</p>	<p>【65】 ・授業アンケートの分析結果に基づく各専門部会のFDは従来通り実施した。全学を対象としたFDは、FD研究会として11月に実施の「GPA制度と教育の質の向上について」で53名の参加者があった。各学部のFD担当者の研修会として12月に実施した「基礎学力向上のためのシンポジウム」は、学外から大学教員と高等学校教員を講師に招き、学内から59名の参加者があった。内容は、FD概念の拡大を浸透させることを強調したもので、参加者に好評であった。</p>
<p>【66】 ○ 学士課程 [教育プログラム] ① 大学での基礎教育を、高校までの教育との接続を配慮したものにする。</p>	<p>【66】 ○ 学士課程 [教育プログラム] ○ 教養教育における主題別科目や共通基礎科目で高校教育との接続性に配慮した授業内容の科目を引き続き開講する。</p>	<p>【66】 ・初年次導入科目として少人数クラスからなる主題別ゼミナール（主題別科目：2単位）を全学部必修で開講した。高校から大学への円滑な学習上の接続を行うために、基礎学力が不足している学生を対象に共通基礎科目の総合英語（習熟度別クラスで全学部で必修）や主題別科目の理系基礎科目（習熟度別クラスで数学・物理：工学部では必修）を開講した。共通基礎科目である情報関連科目においても人文学部で習熟度別クラスを開講した。総合英語は全学導入5年目を迎え、4年生を対象に教育成果に関するアンケート調査を実施した。その結果、英語に対する学習成果のみならず、学部横断クラス編成や会話を取り入れたカリキュラム内容を反映して、授業をとおして多くの友人ができ、大学生活にスムーズに慣れることができた、という声が多かった。このことは、この科目が初年次教育の一端も担っていることを示している。 ・人文学部、教育学部、工学部、農学部の接続教育の取組状況については、年度計画【83】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【67】 ② 専門分野の基礎知識・技術を修得できるよう教授し、該当する専門分野で順次JABEEの認定を得る。</p>	<p>【67】 ○ J A B E E を満たすための条件整備をさらに進める。</p>	<p>【67】 ・工学部では、全学科のJABEE認証を目指し、成績管理方法マニュアルを整備し、成績証拠書類の収集について運用を行っている。教育改善委員会が各学科にJABEE対応状況を報告させ、それらを点検した。大学教育センターとの連携で、JABEEの認定を得るための証拠書類の収集体制は確立した。</p>
<p>【68】 ③ 小中高養教員への指向と適性を高める教育を行う。</p>	<p>【68】 ○ コミュニケーション能力を高め、教員採用試験の準備をするために「小論文面接」対応の授業を設定する。</p>	<p>【68】 ・教育学部では、教員採用試験の準備として3つの取組に分けて実施した。1つ目は教員採用試験（筆記試験や小論文、面接、集団討議など）を意識した授業（指導法や演習などの授業）。2つ目は教員採用試験対策自体を授業の主目的として実施している授業（保健体育教師論、教職のためのパブリックスピーキング）。3つ目として授業時間外における面接・小論文の指導。また、教員採用試験対策に対応</p>

<p>【69】 ④ 人文・社会・自然科学を理解する基礎学力を修得させ、社会で専門性を発揮できる人材を育成する。</p>	<p>【69-1】 ○ 基礎演習のガイドラインを点検し、必要に応じて改善項目等を教員に周知する。</p> <p>-----</p> <p>【69-2】 ○ 理学科カリキュラムの自己点検評価に基づいて、カリキュラムの改善・充実を図り、理学科の教育を充実・発展させる。</p>	<p>する授業のFD研修会を行い、平成22年度の授業へ反映させる準備を整えた。</p> <p>【69-1】 ・人文学部では、基礎演習のガイドラインをコース別FD研究会において点検した上で、両学科のFD研究会においてもチェックを行った結果、現行どおりのガイドラインを維持することとした。各種ガイドライン等を収めた冊子体のFD研究会用資料集を全構成員に配布し、周知徹底と点検作業を行うことができた。</p> <p>【69-2】 ・2年次以上の学生に学習到達度自己評価を実施し、卒業年次の学生には卒業要件到達度調査を行った。入学年度ごとの卒業要件、履修科目・方法についてのわかりやすい資料を作成した。これらを活用して、きめの細かい履修指導を図るとともに、履修要項の改訂作業を進めた。コース毎にカリキュラムが点検され、コース内での各種プログラムにおける履修プランも系統図にして学生に提示している。 ・地域における特色ある先端科学研究機関や企業スタッフを連携教員として多く採用し、他所に例のないほど特色ある「連携科目」4科目（学際理学演習、半導体実験の基礎、加速器科学の基礎Ⅱ、宇宙環境利用科学概論）を開講した。また、平成20年度から開始した「総合原子科学プログラム」（総合原子科学に関する基礎研究から応用・実用研究まで取り組むことのできる人材育成を目指して、日本原子力研究開発機構との連携に基づくもの）では8科目（総合原子科学入門、放射線とRIの基礎、放射線生物学、放射線応用科学、放射線環境科学、核エネルギー基礎科学、原子科学基礎実験、原子核理学概論）を開講した。</p>
<p>【70】 ⑤ 生命科学や環境科学についての基礎知識・技術を修得させ、卒業後の専門性が発揮できる教育を行う。</p>	<p>【70】 ○ 生命科学や環境科学についての基礎知識・技術を修得させ、卒業後の専門性が発揮できる教育を行う。</p>	<p>【70】 ○農学部における状況 ・制定したカリキュラムポリシーやディプロマポリシーとの関係でカリキュラムの内容を確認するとともに、卒業時及び卒後3年次のカリキュラム・アンケート結果を参考に、科目内容や開講年次などを検討・改善して各カリキュラムを運営した。 ・文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム[テーマA]に採択され、「食の安全」に関する教育内容を教養科目から専門科目まで体系化することで強化し、食の安全ファシリテーターが養成できる特色あるカリキュラムを大学教育センターと協力して導入した。 ・現代GP「自然共生型地域づくりの教育プログラム」の成果を反映した中核的科目の定着化を進め、フィールドサイエンス教育研究センターで開講する17科目の提供体制を整備するとともに、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム[テーマA]の採択を受けて、計画通りフィールドサイエンス教育の充実を図った。</p>
<p>【71】 [教育システム] ⑥ 各学部はカリキュラムの点検評価をし、その結果に基づき教育成果を評価するとともに、教育システムの改善を行う。</p>	<p>【71-1】 [教育システム] ○ 卒業時に学生が身につけるべき学力や能力の明文規定に従い、引き続き、学年ごとの単位取得状況、卒業状況、卒業研究の水準などから判断して意図した教育の成果や効果があがっているかを点検評価する。</p>	<p>すべての学部で授業アンケートと教員による授業改善評価が行われ、取りまとめられた。</p> <p>【71-1】【71-2】【71-3】 ・人文学部では、単位取得状況、卒業判定資料等の教務資料をもとにカリキュラム・FD委員会において点検評価を行った。新カリキュラム完成年度末における両学科の卒業状況は、人文コミュニケーション学科83%、社会科学科84%となっており、昨年の旧カリキュラムにおける数字と比較して若干の増減はあるものの、ほぼ同様の水準にある。卒業研究の水準（成績評価）についても、合格者のなかにA+及び</p>

【71-2】

○ 卒業生、主要関連企業へのアンケート調査等を実施し、教育改善に役立てる。

【71-3】

○ シラバスで明示したカリキュラム構造図、カリキュラムコースツリーに基づいて実施した授業の点検評価を行う。また教務委員会による個々の授業のシラバスチェックをさらに充実させ継続する。

Aが占める割合は、コースによってバラツキはあるものの、人文コミュニケーション学科81%、社会科学科78%となっており、高い水準にあると判断することができる。

・「平成21年度卒業生就職・進路状況」を参照するかぎりでは、教員・公務員・法人関係に就職した卒業生は、人文コミュニケーション学科18名、社会科学科20名。進学者数は、人文コミュニケーション学科16名、社会科学科5名。その他の就職先は民間企業である。「人文学部2008年度卒業生就職状況」を参照し、過去のデータと比較してみても、例えば、教員・公務員・法人関係への就職者数はおおむね良好であったと判断することができる。また、進学者数については、人文コミュニケーション学科が入学定員の1割弱を占めており、教育の成果が一定程度現われていると判断することができる。

・教育学部では、免許法に基づいた年次での学習順序を示すカリキュラム構造図と内容的な系統性を示したコースツリーを選修ごとに見直し、それぞれの授業の点検評価を行った。

新規科目や前年度より大幅な変更のあったシラバスを中心に、各選修・教室選出の教務委員がシラバスチェックを行って授業を点検した。また、総合演習に関しては、授業終了後に、教務委員会で担当者の自己点検評価書をもとに、その目的に沿った授業となっているか点検評価を行った。

次年度新設の「教職実践演習」については、シラバス及び履修のためのカルテを作成し、それらカリキュラム構造図とコースツリーに位置づけた。

・理学部では、入学年度ごとの卒業要件、履修科目・方法についてのわかりやすい資料を作成した。これらを活用して、きめの細かい履修指導を図るとともに、履修要項の改訂作業を進めた。コース毎にカリキュラムが点検され、コース内での各種プログラムにおける履修プランも系統図にして学生に提示した。2年次以上の学生に学習到達度自己評価を実施し、卒業年次の学生には卒業要件到達度調査を行い、カリキュラムの改善・充実に反映させている。地球環境科学コースでは、2月に卒業論文ポスター発表会を卒業生や父兄にも公開して開催した。卒業論文発表後、卒業論文発表を聴講した卒業生や父兄にアンケートを実施したことにより、従来とは異なった観点からの意見を聞くことができ、極めて有効であった。

・工学部では、シラバス評価システム（ホームページ、各学科のFDにおける評価）の稼働状況及び実効性を確認した。この点については、ホームページへの記載の有無をWeb上で確認するとともに、前・後期の期末に各学科で実施している教育点検会議でも議論が進められている。さらに、学生アンケート結果を基に、工学部全教員がWeb上で入力する授業の点検評価を行っており、その質問項目にもシラバスの記入やシラバスに従った授業実施の有無について点検する項目が設定されている。教員個人の前年度の記入状況は同じページで確認できるようになっており、次年度シラバスの作成と授業実施の参考となるようになっている。

・農学部では、平成20年度に実施した卒業生を対象にしたアンケート結果から施設・設備あるいは授業科目への要望を各学科のカリキュラム点検評価の資料として活用した。平成21年度も卒業生を対象にしたアンケートを実施した。アンケート内容は就職先、茨城大学での教育、カリキュラム等についてであった。対象人数は151名で23名から回答を得た。卒業生の就職先企業へのアンケートでは、昨年度のアンケート結果を踏まえた上で、就職先企業86社に送付し、11社から回答を得た。

・教育システムの改善の実施状況は、年度計画【70】の「計画の進捗状況」を参照。

<p>【72】 [教育改善施策] ⑦ 教育に関する評価結果を担当教員にフィードバックし、FDを実施して教育改善を図る。</p>	<p>【72-1】 ○ 教育に関する評価結果を担当教員にフィードバックし、FDを実施して教育改善を図る。</p> <p>-----</p> <p>【72-2】 ○ 教育の質の向上のための公開授業の実施方法について検討し、21年度からの実施を図る。</p> <p>-----</p> <p>【72-3】 ○ 授業アンケート・授業参観を実施し、その結果を反映させた形でFDを執り行い、教育改善を図る。</p>	<p>【72-1】【72-2】【72-3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人文学部では、前学期の授業アンケートと点検改善票等を踏まえ、コース別FD研究会を実施し、その上で、学科別FD研究会を実施した。また、授業公開制度に基づき、後期の一部授業で初めて授業公開（教員相互による授業参観）を実施した。これらを踏まえて学部FD研究会を実施し、教員の教育能力向上を図った。 ・教育学部では、前期116件、後期109件の専門科目について授業アンケートを実施し、各教員による自己点検評価を行った。これらに対する自己評価は3月にまとめ、各教員に分析結果をフィードバックした。 ・理学部では、教員の教育貢献度評価（全学の教育改善評価に対応するもの）を実施した。各教員は自らの授業の自己評価を行い、その評価結果を持ち寄りコースごとにFDとして、コース内での各教員の教育内容の連関などがスムーズに動いているかなどを確認し、参考になる好事例、悪事例を共有した。具体的なデータを基にした真剣な討論により、教員一人一人が自らの教育姿勢について虚心坦懐に反省することができた。 ・工学部では、各学科で教育点検会議が実施された。授業の実施状況や教員毎の取組上の工夫、成績判定根拠となるレポート・定期試験に関して議論された。その結果を教育点検会議報告書に纏めた。学部教育改善委員会は、報告書をもとに、学科毎の点検プロセスを確認し、その結果を学科にフィードバックすることにより、教育内容の改善を図った。 ・農学部では、授業アンケート結果をもとに各教員が授業評価報告書を作成、提出し、授業での問題点・改善策について検討した。以下の課題についてFD研修会を実施した。 <ol style="list-style-type: none"> ①「バイオセーフティ・バイオセキュリティの考え方と実践」（参加者数37名） ②「メンタルヘルスケアについて」（参加者数33名） ③「社会企業活動にみられる最近の学生気質 講義事例からの考察-学生のための表現力向上について-」（参加者数25名） さらに、「学生の勉学意欲の向上を目指して」、「初年次からの食のリスク管理教育プログラム」及び、「茨城大学農学部1年次生に対しての全員面談実施報告会」についてFD研修会を実施した。
<p>【73】 ○大学院課程 [教育プログラム] ① 修士課程では、高度な専門的知識をもった人材を育成することを目的とした教育プログラムを構築する。</p>	<p>【73】 ○大学院課程 [教育プログラム] ○ 修士課程では、高度な専門的知識をもった人材を育成することを目的とした教育プログラムを構築する。</p>	<p>[教育プログラム] 【73】～【77-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各研究科に共通する教育として「大学院共通科目」を導入し、17科目を開講した。修士（博士前期）課程の教育目標として、「人類の直面する諸問題の解決と一層の社会の発展に寄与する知識基盤社会の構築を担う高度専門職業人を育成するとともに、社会の多様な要請に応じて、研究者及び知識基盤社会を支える高度で知的な素養のある人材の育成を行う」ことを掲げた。それを実現するため、大学院教育を限られた専門分野にとどめず、地球時代・国際化時代に必要とされる広い俯瞰的な視野と深い専門性、英語を含めたコミュニケーション力、新しいものを生み出す創造性と想像力を育成する組織化された教育への転換を図り、「大学院共通科目」を設定した。大学院共通科目プログラムは、人間教育、語学教育、環境教育、実務実学教育の分野で実施した。
<p>【74】 ② 工学系の大学院教育において、技術管理など実務に役立つ教育を行い、起業家精神の育成に努める。</p>	<p>【74】 ○ 工学系の大学院教育において、技術管理など実務に役立つ教育を行い、起業家精神の育成に努める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院教育に「社会の要請に応える新たな教育プログラムを積極的に構築する」計画を掲げ、3年間の準備を経て平成21年度から、4研究科全てに横断型のサステ
<p>【75】</p>	<p>【75】</p>	<p>・大学院教育に「社会の要請に応える新たな教育プログラムを積極的に構築する」計画を掲げ、3年間の準備を経て平成21年度から、4研究科全てに横断型のサステ</p>

<p>③ 博士後期課程では、先端的な研究の指導を行うとともに、自立した研究者や高度な専門技術者を養成する。</p>	<p>○ 博士後期課程では、先端的な研究の指導を行うとともに、自立した研究者や高度な専門技術者を養成する。</p>	<p>イナビリティ学教育プログラムを設置した。この教育プログラムは、地球規模の諸問題の解決のために俯瞰的知識と問題解決の意欲、スキルをもった人材育成を目指すもので、茨城大学で初めて、講義・演習を全ての研究科をまたいで開講した。その結果、他研究科・異分野の学生が交流する機会を与えるなど魅力が高く、初年度にもかかわらず東京大学を幹事とするサステイナビリティ学連携研究機構(IR3S)と共通科目の「サステイナビリティ学最前線」は、36名の学生が履修し、履修学生と同窓会も生まれた。本プログラムは、東京大学IR3Sの教育プログラム(全て英語による講義)と連動しており、国内5大学の学生の間で討論する機会も生み出した。本教育プログラムの成果は、環境人材コンソーシアムの会議で注目され、環境人材育成の先進的プログラムと認識されている。</p>
<p>[76] [教育システム] ④ 修士課程の教育成果を点検評価し、履修効果の向上を図る。</p>	<p>[76-1] [教育システム] ○ 修士課程の教育成果を点検評価し、履修効果の向上を図る。</p> <hr/> <p>[76-2] ○ アンケートで指摘されたポイントの授業への反映についての評価方法を検討し、大学院教育の改善に生かす。</p>	<p>・人文科学研究科では、平成21年度から改組を行い、新しいアドミッションポリシーを踏まえた上で、専攻ごとのアドミッションポリシーを定めた。教育プログラムについては、専門科目で高度の専門的知識及び能力を修得するだけでなく、幅広い学識と専門分野に関連する基礎的素養を養うため、大学院共通科目、研究科共通科目などが新設された。特に、専門基盤科目の「人文社会科学基礎論Ⅰ・Ⅱ」については、他研究科にも大学院共通科目として提供するため、遠隔授業を行った。初めての試みであったが、相応の成果を収めることができたと思われる。</p> <p>改組後の新しい教育プログラムとして、副専攻に「コミュニティ・マネージャー(地域人材)養成プログラム」が導入された。これは「コミュニティデザイン開発」をコア科目とし、「自治体改革支援」「社会起業家育成支援」「多世代交流コーディネーター育成支援」「コミュニティ・ケア・ワーカー育成支援」及び全学協力的教育プログラム「人文社会系サステイナビリティ学」から編成されており、各サブ・プログラムは「コミュニティ・インターンシップ(地域連携調査法・地域連携調査実習)Ⅰ・Ⅱ」とセットで展開される。コミュニティ・インターンシップは、教育プログラムを履修する学生が、地域連携の協定先である行政機関や民間企業、市民団体、あるいは学術交流協定を結んでいる海外の大学等で行う調査実習(フィールドワーク)である。この実社会でのインターンシップの経験を通して、学生は地域・社会における様々な分野の問題に主体的に取り組み、具体的解決策を模索することにより、地域の政治行政、産業経済、教育、福祉、多文化共生などの諸分野で企画立案などを行う能力を身に付け、コミュニティ・マネージャー(地域人材)に求められる実践的応用的な能力を習得することができる。</p> <p>・教育学研究科では、平成20年度大学院教育改革支援プログラム(大学院GP)に採択された「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」を、平成20年度の試行を踏まえ、平成21年度は正規のカリキュラムとして開始した。本教育プログラムは、高度な専門職業人＝教員の養成を目的として、教科の指導力や実践力のみならず、学校という組織の中で円滑な人間関係を創り出し、有効な教育活動を実行するために必要な能力を身につけていくことが企図されている。</p> <p>前学期は「地域教育資源フィールドスタディ」として、茨城県の畜産業である「養豚」に焦点を当てて学習(学外研修と講義)した。後学期は前学期で学んだことを踏まえて「授業展開ケーススタディ」を実施し、小中学生向けの授業案づくりとその実践として教育学部附属中学校及び附属小学校において授業実践を行った。また、シンポジウムを開催し「地域教育資源を学校教育に活かす」方法について、関係者と本学大学院生による活発な意見交換が行われた。これら多様な授業形式(講義・演習・実地研修・講演・シンポジウム)を取り入れ、新しくかつ充実した教育内容を展開して、「地域理解」を深めながら、大学院生の「教科指導力」及び「コミュニケーション力」を育成することができた。</p> <p>このプログラムにおいては、独自の点検評価・改善体制を築いた。授業アンケートを実施し、それを基にFDを開催し、後期の授業終了後に受講生も参加する検討</p>

会を開き、反省項目や要望を授業改善に取り入れる体制をとった。

・理工学研究科理学系では、教員の教育貢献度評価（全学の教育改善評価に対応するもの）を実施した。各教員は自らの授業の自己評価を行い、その評価結果を持ち寄り専攻（系）ごとにFDとして、専攻（系）内での各教員の教育内容の連関などがスムーズに動いているかなどを確認し、参考になる好事例、悪事例を共有した。具体的なデータを基にした、真剣な討論により、教員一人一人が自らの教育姿勢について虚心坦懐に反省することができた。内部質保証制度の基本は完成しつつある。

・理工学研究科工学系では、原子力工学教育プログラムの2年目を実施し、初めての修了者が出た。（平成21年度修了者3名）。このプログラムは、原子力工学に関する知識を体系的に学習するための教育プログラムで、学部段階で、機械工学、電気工学、材料工学の基礎を学んだ大学院前期課程の学生を対象とし、原子力工学関連の講義、実験・実習の学習を通して、原子力工学分野の技術者、あるいは各自の専門分野に加えて原子力工学分野の基礎知識を備えた技術者を育成することを目標にしている。

・システムLSI/IT特別コース6科目の総受講者数は90名、このうち合格者数は77名である。昨年度はそれぞれ68名、53名であり、大幅に増加した。この理由は、6科目中4科目が4大学院連携先進創生情報学教育プログラム科目に、1科目が本学大学院共通科目として活用されたためと考えられる。一方、公開講座に参加している社会人は、受講者が14名で、合格者が14名であった。システムLSI/IT特別コースは、平成19年度から茨城大学大学院「システムLSI/IT特別コース」公開講座として、社会人・学生に開講し、科目ごとに社会人には修了証、学生には単位が授与されている。

・実務的な講義（ベンチャービジネス入門、実学的産業特論など）が開講され、学習への目的意識の向上や起業家精神の育成が順調に行われた。

・理工学研究科博士後期課程担当教員109名を対象に共同研究調査を行い、延べ56公的機関、79大学、112企業と共同研究が進められ、29名の博士後期課程学生の関与、133名の博士前期課程学生の関与があることが分かった。

・農学研究科では、平成19年度に採択された大学院教育改革プログラム（大学院GP）「地域サステナビリティの実践農学教育」を継続実施した（修了者数8名）。このプログラムは、21世紀に求められる環境と調和した人類の持続的発展のために、農学を基盤とした食料・生命・環境に関する幅広い基礎知識と専攻分野における高度な専門知識・技術及び研究開発能力を備え、地域・国際社会で自立的に問題解決が出来る力を持った人材の養成を目的としている。

【77】

⑤ 社会の要請に積極的に対応し、独立専攻や専門職大学院等における教育の整備を検討する。

【77-1】

○ 教職大学院の趣旨を生かした大学院改革構想に合わせて、授業内容・方法の改善を行う。

【77-2】

○ 理工学研究科博士後期課程の改組の方向性、目標などを明確にし、専攻の構成などを具体化する。

【教育システム】

【76-1】～【77-2】

・人文科学研究科では、今年度も前年度に引き続き、前期及び後期の授業アンケート・学習環境アンケートを実施した。授業アンケートは、今年度が新課程発足の第1年目であることから、新課程の1年生向けと旧課程の2年生向けとに分け別々の質問項目で実施し、集計結果を委員会内で検討、さらに大学院FD研究会で報告、教員にフィードバックを図った。また、大学院のHPにも掲載し、学生に対するフィードバックも行った。

・理工学研究科理学系は、改組初年度の開講科目状況を調査した。系ごとの講義・演習科目の配分、1単位講義数、必修科目数などの考え方の違いが浮かび上がり、次年度以降の検討課題を整理した。

- ・理工学研究科工学系では、全専攻において特別演習や特別実験のシラバスに成績評価の基準などを明記した。これにより、毎学期末に実施されている各専攻の点検評価会議において、特別演習や特別実験などの実施状況を点検確認し、さらにその内容を記載した報告書を教育改善委員会においてチェックする体制が整った。
- ・理工学研究科工学系では、各専攻で行われているFD研修の報告書を教育改善委員会においてアンケート項目に関する意見の聴取・学生の意見の調査等が行われているかを点検した。学生の意見などが教育改善に反映する機会が増えた。
- ・理工学研究科工学系では、博士後期課程の改組の枠組みが定まり、学生定員の変更も含め理学部と協議を行った。その結果、博士後期課程の改組の枠組みとして1専攻とし、専攻内にいくつかのコースを設けるコース制をとることとした。博士後期課程の組織構成は高度職業人、研究者養成、文理融合の3つの分野の教育・研究を目指すこととした。

【78】

[教育改善施策]

⑥ 教育に関する評価結果を担当教員にフィードバックし、FDを実施して教育改善を図る。

【78】

[教育改善施策]

○ 教育に関する評価結果を担当教員にフィードバックし、FDを実施して教育改善を図る。

【78】

- ・人文科学研究科では、大学院FD研究会を実施した。今年度は最初に研究科全体でのFDを行い、次に各専攻に分かれてFDを行うという2部構成で実施した。内容的には、特に新課程で新たに開講された科目（プログラムを含む）の実施報告、各種アンケート結果の報告、修士論文審査、研究指導計画届の検討などに重点を置いた。

- ・教育学研究科では、平成20年度に行った点検評価に基づいて、統合的な点検評価及び改善システムとして、継続的に①教育学研究科の共通科目3科目（学校教育基礎論、学校教育総合研究、大学院GP）については個別にアンケートを行うこと、②授業全体及び研究指導についてのアンケートを実施すること、③アンケートに基づいたFDを実施すること、④21年度特有の点検評価として教職免許取得プログラムの検討の4点を策定した。そのシステムに基づいてアンケート及びFDを実施した。具体的には、1) 「学校教育基礎論」、「学校教育総合研究」、大学院GPについての学生アンケート、2) 他の科目及び研究指導についての学生アンケート、3) 成績評価基準・方法の適用状況の点検評価・改善に関するアンケートを行いFDも2度実施した。その結果、多くの学生は授業及び研究指導に満足していることが明らかになった。また、④に関しては、今年度は教職免許取得プログラム（免許を所持していない大学院生が在学している間に教職免許をとるシステム）に関する調査を行った。さらに、教育の実質化のために、指導教員変更の申合せ（指導教員との関係がうまくいかないときなどに教員の変更を可能にする取り決め）、及び成績の疑義に関する申立ての申合せ（成績に疑義のあるときにそれを訴える手続き）を策定した。

- ・理工学研究科理学系では、前期については38科目でアンケートを実施し、単位取得者に対して62%の回収率を得た。アンケートの質問項目は、昨年度同様10項目に対して5択の回答を求めた。また、専攻改組で大幅に増えた1単位講義に関する意見も求めたが、学生からは特に意見はなかった。後期アンケート結果と併せFDを行うとともに、報告書を作成し、学科事務室にて閲覧できるようにした。

- ・理工学研究科工学系では、各専攻の修士論文に関する研究の実施が主な内容となっている授業科目（特別実験、特別研究等）について、前期FD研修会等でその内容と実施状況（研究室でのセミナー、実験・研究進捗状況報告会、論文紹介等）を報告し相互確認を行った。専攻でのFDを通して計画通り実施した。定められた教育点検報告書フォーマットに基づき、各専攻から報告書が提出され、それらを教育改善委員会でチェックし、問題点などを各専攻にフィードバックしている。しかしながら、各教員の裁量に任せられている特別研究、特別演習、特別実験等の報告に関しては不十分であったため、それらの大学院研究教育に関する報告の充実を図るべく、

その基盤となる特別研究、特別演習、特別実験等のシラバス・実施方法・成績評価の具体化について教育改善委員会で協議し、文案を作成し、各専攻に実施要求を行った。

II 教育研究等の質の向上の状況

- (1) 教育に関する目標
- ② 教育内容等に関する目標

<p>中期目標</p> <p>○学士課程 [入学者受入方針]</p> <p>① 本学の教育目標に沿って、各学部の入学者受入方針を明確化し、公開する。 ② 多様な入試方法を策定し、入学者選抜方法の改善を図る。 ③ 留学生・編入学生・社会人学生等を積極的に受入れ、充実した教育を行う。</p> <p>[教育課程]</p> <p>④ 各教育組織で理念と目的に沿った体系的な教育課程を構築する。 ⑤ 入学後も幅広い進路変更を可能とする。</p> <p>[教育方法]</p> <p>⑥ 効果的教育方法の普及を図る。</p> <p>[成績評価]</p> <p>⑦ 厳正な成績評価を行って教育の質の向上を図る。</p> <p>○大学院課程 [入学者受入方針]</p> <p>① 修士課程においては高度で専門的な職業人を養成することに重点をおき、博士後期課程においては高度で専門的な職業人養成と同時に研究者養成を目的として、各研究科で入学者受入方針を明確にする。</p> <p>[教育課程]</p> <p>② 修士課程においては、高度な専門技術者や有資格者、研究者を育成するという設置の目的と就学と就職のニーズに応じて、適切な教育の内容とレベルを設定する。 ③ 社会の要請に応える新たな教育プログラムを積極的に構築するとともに、幅広い教育プログラムを提供する。</p> <p>[教育方法]</p> <p>④ 修士課程教育では、学士課程教育との有機的な接続に配慮した教育プログラムを提供する。 ⑤ 社会人・外国人学生の履修に配慮した、教育システムを整備する。</p> <p>[成績評価]</p> <p>⑥ 適正な成績評価基準と方法を策定し、大学院教育の質を確保する。</p>
--

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【79】 ○学士課程 [入学者受入方針]</p> <p>① 入学者受入方針をホームページ等に公開し、入試情報の発信を積極的に行って、受験者の確保を図る。</p>	<p>【79】 ○学士課程 [入学者受入方針]</p> <p>○ 入学者受入方針をホームページ等に公開し、入試情報の発信を積極的に行って、受験者の確保を図る。</p>	<p>【79】 全ての学部で入学者受入方針を公開した。また、入試情報を発信した。</p> <p>・人文学部では、全面的にリニューアルも行い、入学者受入方針をホームページ等に公開し、入試情報の発信を積極的に行って、受験者の確保を図った。外注した教員紹介ページの入力支援システムを実施運用し、システムの安定化を図った。学部教員に対して入力方法を説明するとともに、必要な教員に対しては入力支援を提供した。学科所属教員の教員ページの充実を図り、未記入者への記入を促し、掲載内容の充実を図った。</p> <p>・教育学部では、学部HPへのアクセス数が昨年度実績をいずれも10%以上上回り、十分な成果をあげた。オープンキャンパスでの広報活動についても、昨年度と同様な活動を行うことができた。</p> <p>・理学部では、アドミッション・ポリシーをホームページ、パンフレット等に公表した。教員一人一人の教育活動、研究活動が外から明確にわかるようにホームページの更なる充実を行った。</p> <p>・工学部では、ユーザビリティ向上の観点で学部及び大学院のページ構成を一部変更した。アクセスログを収集し、解析を行った。比較的アクセスが多く、受験生確保の点で重要と思われる各学科の紹介ページを充実した。具体的には、開講科目一覧を新規に追加すると共に、従来、ばらばらだった進学・就職情報や取得可能</p>

		<p>な資格、教員一覧、学習・教育目標等を学科単位で1ページに集約した。</p> <p>・農学部では、昨年度に引き続き、農学部ホームページ上でアドミッションポリシー、入学者選抜方法を速やかに公表した。とりわけ新型インフルエンザに対する対応について速やかに周知した。オープンキャンパスは7月に実施し、高校生358名(昨年度364名)が参加し、昨年度同様に活況だった。昨年度まで行っていた高校訪問は、効果を評価した結果、本年度は実施しなかった。</p>
<p>【80】 ② 高等学校での教育プログラムを考慮し、多様な入学者を受入れるため、高等学校との連携を強め、入試方法の多様化を図る。</p>	<p>【80】 ○ 高等学校での教育プログラムを考慮し、多様な入学者を受入れるため、高等学校との連携を強める。</p>	<p>【80】 ・教育学部では、志願者が多い県内の高校を訪問し、各校進路指導担当者から、教育学部入学試験に関する聞き取り調査を実施し、調査内容の分析を行った。より広く意見の聴取を行うとともに、受験者開拓の視点を踏まえて高等学校訪問の対象を拡大し、これまでで最も多い17校を訪問した。高等学校訪問によって聴取した意見からは、教員志望の生徒たちにとって茨城大学教育学部の良さが認識されていることと、受験科目の減少が学校側・受験者にとって歓迎される傾向にあることがわかった。ただし、高等学校のカリキュラムとの関連にも配慮して欲しいとの意見もあった。現行の入試方法が高等学校側のニーズにも概ね合致していること、後期入試の廃止やAO入試の導入などの変更については、あまり望まれていないことなどがわかった。</p> <p>○理学部の状況 ・高校教員との間では、理学部独自で茨城県高等学校教育研究会理化部夏季研修会を8月に開催した。併せて懇談会を実施し、高校の教育現場からの要望や現状について共通認識を図ることができた(参加者数50名)。 ・科学技術振興機構(JST)の地域科学技術理解増進活動推進事業 地域活動支援を受け、高校生を対象に、地質観察体験講座「茨城の大地の成り立ちを考える：阿字ヶ浦・平磯～大洗海岸」を10月に実施した(参加者数77名)。 ・スーパーサイエンスセミナー並びにスーパーサイエンス体験プログラムを12月に開催した。内容は、X線を用いて物質のマイクロ構造解析、最先端の無機化学体験、生物太陽電池、エステル系の香学、培養細胞観察と遺伝子DNA抽出で、29名の高校生が参加した。 ・茨城県高等学校文化連盟「天文・科学部研究発表会」を12月に理学部・インタビュースタジオで開催(参加者数102名)した。優秀発表賞の選定に理学部教員も参加し、高校生の口頭・ポスター発表の中から6件を選定した。 ・水戸第二高校とのスーパーサイエンス・ハイスクール(SSH) 関連の連携は今年度も順調に実施した。</p> <p>・工学部では、高校生が履修可と記載されている4科目において、日立第一高等学校から16名の生徒が毎週来校して希望する科目を本学の学生と一緒に講義を受け、最後には試験も受けた。受講した生徒の感想も良好なものが多い。ただし、時間割の関係で科目が限定され、予備知識が必要な科目では難しかったようであった。</p> <p>・農学部では、引き続き高校生を対象に公開講座、出前授業等を実施した他、専門科目についても公開授業を実施した。農学部教員が関与したものの内訳は公開授業1本(参加者4名)、出前授業47本(参加者743名)だった。</p>
<p>【81】 ③ 入試成績、入学後の成績等を追跡調査し、入学者選抜のための基礎資料を作成し、選抜方法の改善にフィードバックする。</p>	<p>【81】 ○ 入試成績、入学後の成績等を追跡調査し、入学者選抜のための基礎資料を作成し、選抜方法の改善にフィードバックする。</p>	<p>【81】 ・人文学部では、入学センターと共同で入学後の追跡調査を行い、詳細なデータを収集した。前期、後期、推薦の入学者別の学内成績と入学時の英語クラス分けテストの分布などの分析が行われた。推薦入試入学者の英語クラス分けテストの得点は全学平均で10%低いなどの結果がでた。社会科学科の後期入試と前期入試では前期入試の方が入学後の成績が良いとの結果がでた。社会科学科では3月に例年通り推薦入試入学者の追跡調査を実施した。また、過去のデータの集計を行い12月、1月の学科会議で報告した。人文コミュニケーション学科は推薦入試の初めての卒業生が出る年度を翌年に控えているため、分析結果を学科構成員で共通化する方策を検討</p>

討した。人文コミュニケーション学科において、推薦入試による入学者は、3年次とまで(07L~09L)である。過去2年間における1年次の取得単位状況を調べるとともに、平成19年度主題別ゼミナール担当者を対象にしたヒアリングを実施した。その結果によれば、怠学傾向のある者は見当たらず、成績は平均的な層に集中している、といった傾向がみられた。すべての入学者選抜を適切な体制により公正に実施するため、各試験の実施マニュアルを改訂した。推薦入試の実施体制について点検を行い、面接の採点法について、面接室間の統一をさらに図るための改善を加えた。また、今年度の実施を踏まえ、推薦入試関連の業務スケジュールと業務内容をまとめた資料(マニュアル)を整備した。同時に新型インフルエンザ対応の諸措置も全試験に講じ、マニュアルに追加した。

・教育学部では、平成21年度4年生の入試成績と入学後の学業成績、そして進路状況についてデータ整理を終了した。平成21年度調査及びこれまでの経年的調査結果から見てきたことは以下のとおりである。①教員採用者は講師採用者に比べ学業成績は高い傾向が安定して認められた。これは数年の調査結果と一致していた。したがって、在学中の学びが就職結果と結び付いていることが推察された。②入試形態の違いによる学業成績との関連については、年度により傾向が異なっていた。近年、学校教育教員養成課程については推薦入学者の学業成績が低下傾向であったが、21年度4年生では推薦入学者の学業成績が向上しており、学内での取り組みに一定の効果が表れているのかもしれない。一方で、養護教諭養成課程は推薦入学者の学業成績が安定して高いことが窺えた。また、情報文化課程及び人間環境教育課程(新課程)については、明確な関係性が見られなかった。③入試成績と大学での学業成績の相関は高くはなく、関係性が見いだせなかった。このことから、大学での4年間の取り組みが重要であることが示唆された。

・工学部では、7月に高校・高専との入試懇談会を実施し、アンケートをとり、その結果を基礎資料とした。9月に行われた4大学入試懇談会に参加し、意見交換・情報収集を行った。高校訪問や進学・入試説明会に協力し、情報収集を行った。入試方法に関して、平成24年度後期日程からの第2、第3志望制導入に対して実施方法案をまとめ入学センターに提案した。入学後の追跡調査に関しては入学センターで取りまとめた調査結果を入手し検討した。

・農学部では、平成24年度から前期個別試験について学部共通の理科(生物、化学、物理より1科目選択、配点300点)の学科試験を導入することを決定した。このことにより、受験生は従来の面接等と比較して入試対策が立てやすくなり、センター試験の結果を逆転できる希望が持てるので、受験生の増加が期待できる。

・入学センターでは、昨年度、入試広報講師1名を採用したこと、企画開発部門に学長指名の兼務教員を1名増員したことから、年間を通じた高校訪問や各種進学説明会等への対応が可能となった。さらに、推薦入試受験者・入学者に関する統計分析が可能となり、9月開催の入学戦略研究会及び高校教員向け入試説明会等で報告した。同月「入試広報FD」を入学センター兼務教員及びその他の教員を対象として開催した。これは兼務教員等が進学説明会等へ参加する際に自学部のみならず他学部を含め大学全体の広報が行えるよう企画開発部門のFDとして行ったものである。入学者選抜方法の検討・改善については、新入生に対してアンケートを行い、その内容について解析した。入試広報講師には20年度下半期から21年度にかけて茨城県内の88高校、県外の24高校を訪問し、受験動向や学校現場及び受験生のニーズ、本学への要望等を収集できたことは本学の入学者選抜方法の検討・改善や入試広報の実効性を高めるうえで大変有益なものとなった。

【82】

④ 留学生選考方法の改善等を検討するとともに、留学に係わる本学の情報を海外に積極的に発信して、留学生の受入れ数の拡充を図る。

【82】

○ 留学生選考方法の改善等を検討するとともに、留学に係わる本学の情報を海外に積極的に発信し、留学支援を充実して、留学生受入の拡充策を推進する。

【82】

・留学生センターでは、①留学交流委員会において「留学フェア」・「外国人留学生のための進学説明会」等の実施状況報告や、各学部の国際交流委員との懇談会等で各学部に向けて留学生受入拡充のための情報提供を行った。②留学生センターのウェブサイトを随時更新し、留学生センターの活動を報告した。また、閲覧者がより円滑に情報収集ができるよう、ウェブサイトのデザインを全面的に刷新した。③外国人向けの写真入り広報冊子(「茨城大学案内」、12ページ)を作成した。日英

		<p>2ヶ国語版を2,000部、日韓2ヶ国語版を2,000部、日中2ヶ国語版を1,000部作成し、これまでに後述の日本留学フェアなどでの利用、交流協定校に送付するなどして計1,600部程度を配布した。④東京及び大阪で開催された「外国人学生のための進学説明会」に参加し、留学希望者に対する情報提供を行った（東京会場：6月、大阪会場：7月）。⑤韓国プサン及びソウル市で開催された「日本留学フェア」に参加し、留学希望者に対する情報提供を行った。（プサン会場：9月12日、ソウル会場：9月13日）</p> <p>・人文学部では、私費外国人留学生の追跡調査を行った。</p>
<p>【83】 【教育課程】 ⑤ 初年次学生に導入・接続授業を実施する。</p>	<p>【83】 【教育課程】 ○ 接続教育を考慮して、専門基礎教育を充実させる方策を実施する。</p>	<p>【83】 ・人文学部では、主題別ゼミナールの統一シラバスを作成し、高校教育との連続性に配慮し授業内容を点検するため学生アンケートを実施し、その結果をとりまとめた。平成19年度に整備された分野別基礎科目に関するガイドラインの再検討を行った。格段の変更事項は見られなかったが、今後ともよりよいものにする努力を続けることにした。教養教育における分野別基礎科目及び主題別ゼミナールと高校教育との接続性を高めるために、学科人文科目担当学会を定期的に開催し問題の共有を図った。次年度担当教員も含めたFDを開催し、いくつかの問題点を教員同士で共有し、それが次年度担当教員に着実に引き継がれた。毎年、着実に内容の統一性が図られてきており、着実に前進してきている。</p> <p>・教育学部では、「総合演習」に関しては、4年一貫のコミュニケーション能力育成のためのカリキュラムに位置づいているかということを中心に自己評価シートによって、アンケートをとり集計した。</p> <p>・工学部では、教養科目である「微分積分I」と「力と運動」について入学時にプレテストを実施し、その結果により0型クラスと統一クラスとして習熟度別クラス分けのもとで授業が行われた。また、統一クラスでは成績下位クラスを1クラスずつ設け、その中に再履修者を含めている。「微分積分I」については、前期不合格者に対して夏期集中講義による補習が行われるなど、基礎学力の向上に向けた取り組みが行われた。0型クラスの成績平均を見ると「力と運動」では顕著な成果が、「微分積分I」では統一クラスの平均と遜えない（-3点）成果が現れている。その点では、成績下位クラス（0型クラス）の学生に対しての取り組みには効果があったように思われる。ただし、統一クラスにおける成績下位クラスの成績が双方の授業とも思わしくないようである。</p> <p>・農学部では、平成21年度農学部改革WGにより「学力低下に対応した初年次教育の強化」と「入学後の専門分野選択制」を念頭に置いたカリキュラム改革の最終答申案を作成した。本カリキュラム改革は、第2期中期計画で実施する農学部改革の中核を担う課題であり、第2期期間中に達成するための工程表案を作成した。「学力低下に対応した初年次教育の強化」と「入学後の専門分野選択制」を念頭に置き、食料を包括する生命と環境に視点を置いたコアカリキュラムを内包する階層制カリキュラムから構成される農学部教育体制案をまとめることができた。この答申案の作成により、第2期中期計画における農学部改革を期間内に達成するための足掛かりができた。</p> <p>・文部科学省の平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム[テーマA]に採択され、「食の安全」に関する教育内容を教養科目～専門科目まで体系化することで強化し、食の安全ファシリテーターが養成できる特色あるカリキュラムを大学教育センターと協力して導入した。</p>
<p>【84】 ⑥ 各教育組織で教育の理念と目的を明確にし、それに沿った4年一貫教育課程を整備する。</p>	<p>【84-1】 ○ 学部、学科の教育目的に照らして、新カリキュラムが適切に機能しているかを点検・評価する。</p>	<p>【84-1】【84-2】【84-3】 ・人文学部では、前学期の授業アンケート結果と点検改善票等を踏まえたコース別FD研究会（12月から1月にかけて実施）、学科別FD研究会（両学科ともに1月に実施）及び両学科のカリキュラム調整会議・カリキュラム検討会議において点検を行った。また、学科改組の完成年度であることに鑑み、それらと並行的かつ有機・連動</p>

的な形で両学科において授業科目群の点検評価と一部見直しを行い、3月の教育会議で人文学部規則別表の一部改正を行った。後学期の授業アンケートも例年どおりに実施し、集計結果を各教員にフィードバックした上で点検改善票の回収を行った。アンケート結果の分析・点検評価は、次年度に取りまとめられ、「平成21年度カリキュラム・FD委員会報告書」として学部教育会議に報告する予定である。なお、今年度は両学科で前学期点検改善票記載事項の集計・分析を行い、両学科FD研究会及び2月に開催された学部FD研究会において報告した(前学期における専任教員の点検改善票回収率は、人文コミュニケーション学科96.34%、社会科学科90.74%、学部全体94.12%)。後学期の点検改善票についても3月に集計・分析を行い、その結果を4月から発足する新委員会に引き継いだ。

【84-2】
○ 昨年度の試みを継続すると同時に、教育学部のカリキュラムが、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに照らして実効あるものとなっているかを点検評価する。

・教育学部では、免許法に基づいた年次での学習順序を示すカリキュラム構造図と内容的な系統性を示したコースマップを昨年と同様、教務委員を通し、カリキュラム構造図と見直し、または作成するところを1月おいて、それぞれ授業の点検評価を兼ねて行った。授業内容に関しては、12月から1月にかけて、新規科目や前年度より大幅な変更があったシラバスを中心に各選修・教室選出の教務委員に依頼し、前後半の授業終了後に、教務委員会担当者との点検評価書(教務委員会独自)を行い、その後に沿った授業となつてはどうか点検評価を行った。次年度から新設される「職業実践演習」については教務委員会内からシラバスを作成し、それをカリキュラム構造図と位置づけた。これらをもとにカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーと適合していることを確認した。

【84-3】
○ 教育の理念と目的を各学科のディプロマポリシーとして公開し、これに沿った4年一貫教育体制をカリキュラムポリシーとして公開する。さらに、ポリシーに沿ったカリキュラムの充実を図る。

・工学部では、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシー及び各学科のディプロマポリシーとカリキュラムポリシーをホームページに公開した。各学科では、それに沿うよう必要があらう学科は、学科課程表の改定やカリキュラムの一部改定などを実施してきた。特に、学生分科機能工学科では、平成21年度入学者からの改定課程表を地立地区にて開始されるマテリアル工学科では、平成22年度入学者用学科課程表を改定した。機械工学科よりシラバスの充実を図った。平成22年度からは専門科目の講義が日次で実施済みであり、ポリシーに沿うよう改善がなされた。また、総合科目「環境・政策系科目「環境工学」を日立地区で開講できるとともに、専門科目から教養科目へ開講を変更し、4年一貫カリキュラムがさらに充実された。機械工学科では、カリキュラムポリシーで定めた基礎理論から計算機工学の強化を図る「シミュレーション」を3年及び4年次を対象に集中講義で実施して成果を得た。この結果を踏まえ、22年度よりこの科目を4年次前期に開講する。平成21年度からは、養科目の人文分野を1科目日立地区で開講できた。さらに、平成22年度には、それを2科目開講できるようにし、4年一貫教育の充実を図った。

【85】
⑦ 学生の志向性を考慮して、転学部転学科制度を有効に活用する。

【85】
○ (16年度に達成済みのため、17年度以降の年度計画なし)

【85】
各学部で転学部・転学科制度に基づき実施した。転学部は2名、転学科は3名であった。

【86】
⑧ 現状の教育課程を再編し、該当する各専門分野で、順次、JABEEの認定を得る。

【86-1】
○ 工学部全学科においては、JABEE対応教育プログラムに耐えうる教育プログラムに整備し、平成22年度以降の受審を目指して実績を積み上げる。必要があれば工学部としての対応も検討する。

【86-1】 【86-2】
・工学部では、全学科がJABEEの認証を目指し、教育体制の整備・資料収集にあたっている。大学教育センターとの連携も強まり、証拠書類の収集体制は確立した。教養科目の数学・物理について、学科の枠を越えた統合クラスでの授業を行い、その教育効果の検証が始まった。工学部としては、予算の制約を受けつつも環境整備の努力を続けている。機械工学科、都市システム工学科の2学科は、既にJABEE認証を得ている。平成22年度に電気・電子工学科が受審の予定である。平成23年度には、全学科のJABEE対応内部点検が予定されていると同時に機械工学科、都市システム

	<p>-----</p> <p>【86-2】 ○ ポートフォリオによる学生指導を平成22年度から全学科で実施するための準備を行う。</p>	<p>工学科の2学科で2度目のJABEE認証の受審が予定されている。残る5学科である生体分子機能工学科、マテリアル工学科、メディア通信工学科、情報工学科、知能システム工学科においても平成25年度以降にJABEE認証の受審準備が進められている。</p> <p>・工学部の機械工学科、電気電子工学科、都市システム工学科の3学科は、すでにポートフォリオを用いて、学生指導を実施している。残る5学科では、機械工学科と都市システム工学科の実施フォーマットを参考に検討を行った。生体分子機能工学科、マテリアル工学科、メディア通信工学科、情報工学科、知能システム工学科の5学科では、次年度からそれを利用して学生指導を実施することになった。</p>
<p>【87】 ⑨ 学外における教育機会の活用を推進するとともに、インターンシップなど社会体験型教育の機会を拡充する。</p>	<p>-----</p> <p>【87-1】 ○ 学外の教育機会を積極的に活用し、教育の充実を図る。</p> <p>-----</p> <p>【87-2】 ○ 企業工場・研究所の見学、インターンシップ実習、キャリア講義「理学部教育と就職」などにより学生の就職意識の啓発に努める。</p>	<p>【87-1】 ・教育学部では、インターンシップで4名の学生が参加したほか、学生のボランティア派遣の学部ガイドラインを整備し、安全な参加が可能となるような環境を整えた。学生ボランティアを考えるシンポジウムを開催し、意義と課題の確認を行った。プロジェクト授業を中心に、積極的に学外での授業を展開した。学生が制作した映像作品を、学内に加えて、「100万人のキャンドルナイト in 日立 2009」、県立図書館やU-tubeで積極的に発表した。映像作品「凍みやこんこん ～守り続けたい茨城の味 凍みこんにゃく～」は平成21年度茨城県芸術祭映像コンクールに入選した。そのほか、障害者の展示活動支援や茨城県立近代美術館の映画上映の告知ポスターの制作、ちびっ子広場での紙芝居協力など多様な学外での活動を実施した。それらの成果は2月に「情報文化祭り」として一般公開した (http://jyohobunka.ed.u.ibaraki.ac.jp/ および http://www.project-hp.net/等を参照)。これらのことは、新聞報道も複数され、授業の成果を外部に発信することができた。</p> <p>・農学部では、近接する茨城県立医療大学と連携する教育研究活動（園芸療法）に学生を積極的に参画させた（5名の学生が4回/月、10ヶ月間参加）。また、阿見町及び地域の住民・農家とともに実施する連携事業に学生を参加させる耕作放棄地再生や学校給食の地産地消の取り組みを行い、延べ28名の学生を参加させることができた。このような活動により、学外との交流・連携による教育活動を継続的・着実に推進した。さらに、採択された大学教育推進プログラム「食の安全」に関する教育を体系的に行うために、教養科目と連携するプログラムを大学教育センターと協力して整備した。</p> <p>【87-2】 ・各学部のインターンシップ体制は確立されており、継続的に取り組んだ。全学部のインターンシップ受講者は、102名（人文学部52名、教育学部4名、理学部6名、工学部27名、農学部13名）であった。</p> <p>・理学部では、8月に11名の参加者による日本原子力研究開発機構の見学を行った。理学部のインターンシップ実習への参加者は6名で、希望者が若干減少した。学生就職支援センターで取りまとめていた県庁関係のインターンシップ実習は、21年度から理学部でガイダンスを行い、理学部として単位を付与できるよう改善した。県庁関係の希望者も初年度にしては4名と多く、今後の希望者の増加が期待できる。研究機関や企業と連携した「連携科目」（平成19年度から）や日本原子力研究開発機構と連携した「総合原子科学プログラム」（平成20年度から）を今年度も開講した。これらの科目には、連携先での実習などが含まれる。キャリア講義「理学部教育と就職Ⅰ」を理学部の1、2年生を主対象に開講した（受講者21名）。この授業は、各界において活躍している社会人を講師とし、社会が必要とする人材について、理学部出身学生の観点を加味して講義を行っている。</p> <p>・工学部では、原子力工学教育プログラムとして、その理解と基礎知識の習得を目的とした授業（原子力工学概論：現地見学等を含む。）を平成20年度に新設し、平成21年度も開講した（平成21年度履修者数24名）。全学科でインターンシップを単位化することについて、各学科で検討を行い、平</p>

成22年度から知能システム工学科と情報工学科が新たにインターンシップの単位化をすることになった。これにより、全学科がインターンシップの単位化で統一される。インターンシップの活性化に向けて着実に前進した。

【88】
〔教育方法〕
⑩ 個々の授業の内容と方法の見直しを行い、効果的教育方法の普及を図る。

【88-1】
〔教育方法〕
○ FDを通じて、効果的教育方法の教員への普及を図る。

【88-1】
・人文学部では、前学期、後学期の各学期末に、カリキュラム・FD委員会が個別授業アンケートを実施した。その集計結果に基づき、各教員に点検改善票への記載を求め、それらに基づき各コースごとにFD研究会を開催した。専任教員によるアンケート対象授業科目（学部共通科目を除く）の点検改善票の提出率は、136科目中128科目で94.12%であった。点検改善票集計結果によると、「講義内容のレベル」をはじめ、「板書」その他の点で改善が試みられていることが確認された。コース別FD研究会は12月から1月にかけて実施した。その上で、学科別FD研究会を両学科とも1月に実施した。2月には学部FD研究会を実施し、さらなる効果的教育方法の普及を図った。

・教育学部では、学生の主体的学習態度を高める授業が、どのように行われているか具体例の調査を12月に行った。それらの中の優れた事例について、各教室で共有するために、授業のあり方に関するFD研修会を平成22年3月に開催した。それらの授業の実例集を作成し、次年度以降へ反映する準備を整えた。

・農学部では、農学部中期計画委員会の中のFD委員会を中心に今年度のFDを実施した。「社会企業活動にみられる最近の学生気質 講義事例からの考察-学生のための表現力向上について-」（参加者数25名）、という課題で10月に実施した。これらは、教員の教育研究活動に効果をあげている。さらに、2月に「学生の勉学意欲の向上を目指して」及び「初年次からの食のリスク管理教育プログラム」、3月に「茨城大学農学部1年次生に対するの全員面談実施報告会」という課題でFD研修会を実施した。これらFD研修会の開催により、教員が農学部における教育の課題、また、学生に対する対応方法などについて、講師・教員間での意見・情報等の交換があり、課題が共有できた。教育の質を高める意識の深化が図られた。

【88-2】
○ 工学系数学試験（2年次前期に実施）の結果と、数学基礎テスト（1年次前期に2度実施）の結果の関係を分析し、数学基礎教育の効果を検証する。

【88-2】
・工学部では、8月に実施した第2回工学系数学統一試験（2年次受験）に関し、前年度との比較及び同じ学生が20年度に受験した数学基礎テストとの比較分析を行った。
(1) 工学系試験の20年度と21年度の比較：20年度と21年度を比較すると、71点以上の割合は、20年度は4.6%であったのに対し、21年度は10.5%と倍増している。また、50点未満（50点の区分以下）の割合は、20年度59%に対し、21年度は51%に減少している。一方、30点未満では20年度17.3%に対し、21年度16.4%とほとんど変わらない結果となっている。20年度と21年度の分布をマクロに比較すると、21年度は全体として上位者が増え、下位者は変わらず中位者が減少となり、平均値は同じという結果である。
(2) 「基礎数学テスト」と「工学系数学統一試験」の比較：
「基礎数学テスト」は、平均値は72点と工学系数学試験より高い点数となっている。今回の分析から推察できる事項をまとめると、
① 数学基礎テストに関しては、テスト内容を講義科目として実力養成を行う。その結果、4月時点のプレテストと受講後（8月実施）の成績は平均点で10点以上（下位グループでは30点、中位グループ20点、上位グループ5点）に向上している（20年度基礎数学テストによる）。
② 一方、工学系数学統一試験は、20年度と21年度の試験結果を比較すると、上位者割合の増加、下位者割合は変化なしとなっている。
③ 推測の域を出ないが、1年次における基礎数学講義の効果と見る事もできる。

【89】
⑪ オフィスアワー制度を改善・充実し、

【89】
○ オフィスアワー制度、担任制度、専

【89】
・全学部でオフィスアワー制度を実施し、改善・充実を図っている。

きめ細かな学習指導を行う。

攻会支援などの状況を総合的に検討し、今後学生支援の実効をあげるための課題を抽出する。

・人文学部では、各学年の学生担任及び学生アドバイザーを設定し、手厚い個別相談体制をとっている。その認知度を高め、希望する学生が気軽に利用できるように、4月のガイダンスで制度について詳しく周知し、教員のオフィスアワーやメールアドレスをシラバスに一覧表を掲載するなど工夫を講じている。主題別ゼミナールアンケート及び基礎演習アンケートによって、認知度や利用状況、改善を要する点などについて調査した。その結果、学生担任制度、学生アドバイザーともに、認知度は非常に高かった。ガイダンスでの学生と教員双方への周知徹底を図った成果であると考えられる。個別相談は半数以上の学生がしなかったという結果になったが、その主な理由は「必要性がないから」というものであった。4年生以上の学生への説明会を実施した。新カリキュラムの学生と同様に履修相談を実施し、大方の学生の疑問が解決している。

・教育学部では、担任制度は順調に動いている。専攻会支援も行われている。さらに学生支援の実効をあげるためには、学生のニーズの把握をさらに進めることが必要と判断し、学生面接のための統一形式のカードを作成し、継続的な面接を行うシステムを整備した。それらによって教員の学生支援についての意識も向上している。オフィスアワーについては、授業やゼミ活動により日頃から教員とコミュニケーションがとれている学生にとってよりも、その教員の教室以外の学生にとって必要なものであり、存在意義はある。今後、学生のニーズの把握をさらに進めるために、学習面だけでなく生活面にも留意すること、保護者との連携方法等が課題となった。

・理学部では、コース毎に学生担任（＝コース長）を配置し、各年次の学生を小グループに分けてグループ毎に指導教員（＝担当教員）を配置している。

・農学部では、学科長を中心とした学生支援体制、オフィスアワー、何でも相談室、学生投書箱等により、学生の学習相談、進路相談、生活相談、健康相談などの相談と助言体制が適切に運営された。今年度は更なる支援体制を強化するために、学部長直属の教学支援検討WGが新しい学生支援制度（学生担任制度及びクラス委員制度）を平成22年度から実施する答申を作成した。1年次生に対する支援として、何でも相談室とは別に今年度から共通教育棟の農学部教員控室等を利用して元農学部教員が相談に当たる全員面談を実施した。学生の目線での新入生に対する支援を目指す大学院生による農学セミナーを前期に3回、後期に3回実施した。また、昨年同様に5月にバスをチャーターして1年次生を阿見キャンパスに呼び懇談会等を行った。10月の鋤耕祭にも1年次生を阿見キャンパスに呼んで履修ガイダンスや研究室見学会を行った。常時開設の何でも相談室は学生の間で評判がよく、相談件数以上の成果をあげている。オフィスアワー等の支援体制も、電子メール利用の連絡・相談等を含めて良好に機能している。

【90】
⑫ 適正なクラスサイズを設定して履修状況を把握し、自律的学習を促すとともに、時間外指導や補習授業を行って学生の理解度を高める。また、留学生、編入生に対する補助教育体制を検討する。

【90-1】
○ 学生の履修状況を把握し、自律的学習を促す。

【90-1】
・人文学部では、基礎演習担当者会議を開催し、学生の履修状況と自律的学習について意見交換を行った。意見交換を通じて各教員が多様な方策を講じていることがわかり、特に事前事後の学習を促すことにつながっている。成績評価にも事前事後の学習の成果が反映されている。

・教育学部では、教育学部推奨図書を活用して学生の自主的・自律的学習を促すための授業づくりのモデルとして具体的な取組事例を収集し、WEB上に公開する準備を整えることができた。また、推奨図書等の整備計画案を作成し、本年度は小中学校の教科書指導書、教育学部教員の著書を収集・整備することができた。教育実習期間を活用して、教材教具のアイデアや指導案等を作成するなど、自律的な学習のための環境整備が進んだ。

・農学部では、身体活動及び課外活動に不可欠であった体育館及び課外活動施設が新設された。講義室関連では、全ての講義室及び研修室に液晶プロジェクター（15機追加）、スクリーン（14枚追加）及び暗幕の設置が完了した。情報機器では、貸

出し用パソコンの更新(3台)、図書館e-ラーニング用パソコンの本格的な稼動が開始された(12台)。これらにより、e-ラーニングや映像教材を効果的に活用した講義を行うための環境が整った。さらに、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム[テーマA]に採択され、「食の安全」に関する教育内容を教養科目～専門科目まで体系化することで強化し、食の安全ファシリテーターが養成できる特色あるカリキュラムの推進のために農産物加工室が新設され、農産物加工設備一式(ジャム加工機器及びパン加工機器他)が導入された。これによりこれまで不可能であった農産物加工実習を行うことが可能となった。以上のように阿見キャンパスの学習環境が大幅に向上した。

【90-2】

○ 人文学部では留学生、編入学生への補助教育をする。工学部では各学科において留学生、編入学生への相談体制を整える。

【90-2】

・人文学部では、昨年度に引き続き、留学生懇談会とチューター懇談会をそれぞれ2回(6月と1月)ずつ開催し、留学生の活動実態や抱えている問題と要望や意見等を聴取した。国際交流委員長のアリソンと教務委員会の討議では、留学生なる留入学生には補助教育が不要であるとの意見で一致した。また、文化背景が異なる留学生を一律的に補助教育を行うことはおおよそすぎるとの意見が出され、やり方については今後の検討課題とすることになった。留学生と編入学生の現状を踏まえて計画を再検討することとした。

・工学部では、留学生については各授業担当者がTAなどを利用して個別に対応した。また、常時、クラス担任が相談に応じてきた。編入学生に対しては、4月のガイダンス時に教務委員長が教育システムなどについて十分に説明した。担任や教務委員を中心に履修指導を細かく行い、履修計画などの補助を行った。

【91】

⑬ 学生が自ら参加して実践し理解する能動的かつ双方向的な授業の拡充を図る。

【91】

○ 学生の主体的学習態度を高める授業の普及・拡大を図る。

【91】

・人文学部では、双方向を基本とする基礎演習について授業アンケートを実施した。また、専門演習等を含め、コース別FD研究会において情報交換を行い、メーリングリストを活用した事例やグループ作業などの有効性についての議論の結果が学科FD研究会で紹介された。

・教育学部では、学生の主体的学習態度を高める授業が、どのように行われているか具体例の調査を12月に行った。それらの中の優れた事例について、各教室で共有するために、授業のあり方に関するFD研修会を平成22年3月に開催した。それらの授業の実例集を作成し、次年度以降へ反映する準備を整えた。

【92】

⑭ 実験・実習・演習の充実を図る。

【92-1】

○ 実験実習教材の充実を図る。

【92-1】 【92-2】 【92-3】

・人文学部では、コース別FD研究会において実験、実習、演習のガイドラインを点検した上で、各学科のFD研究会においてもチェックを行った結果、現行どおりのガイドラインを維持することとした。20年度同様、各種ガイドライン等を収めた冊子体のFD研究会用資料集を全構成員に配布し、周知徹底と点検作業を行うことができた。情報処理教室の機材及びソフトの更新ができ、授業の充実が図られた。耐用年数の超過したコンピューターが配備されているC606教室のコンピューターが更新され、従来より能力を高め学生の自習に資することができるようになった。また、新カリキュラムの中のメディア文化コースの映像制作関連の授業のため、映像撮影用のカメラ、編集機、マイク、三脚などを整備することができ、授業で運用している。

・教育学部では、科学研究費補助金・基盤研究(C)一般「モバイル端末とホームページを活用した『野外観察データ共有システム』の開発」を平成21年度に獲得した。平成21年度には、人文学部、理学部、五浦美術文化研究所と連携して、理科系だけではなく人文系の地域資源をも総括して学習に活かすための「五浦総博物館計画」へと展開し、学生による教材研究も行われ大きな成果をあげた。これは第2期に計画されている茨城県北ジオパークのためのコンテンツとしても大きく活用される基盤を作った。

・理学部では、特別経費（840万円）により理学実験機器を高度化すると共に一部を更新した。このことにより、新入生が理科の実験・実習にいそしみ、学年進行するにつれて主体的及び能動的に取り組む実験・実習環境を整備した。

【92-2】

○ 理学部における教育内容・教育環境について、学生の生の声を聴取するために学生モニター会を開催する。

・工学部：電気電子工学科では、21年度学生実験予算額を34万円計上し、デジタルマルチメータ2台（160,650円）とパーソナルコンピューター（70,124円）、AD変換ボード（50,190円）などを購入し学生実験設備の充実を図った。さらに、教育改善経費（設備枠）に申請して、約200万円の予算を獲得し、学生実験用多機能計測システムの導入により、電気電子工学実験Ⅲの学生実験設備の更新を図った。情報工学科では、教育改善経費（設備枠）を申請して得た予算に加えて学科内の予算も計上して、論理回路実習装置を購入し、学生実験の設備更新を行った。機械工学科では、「産業人材育成事業予算」を獲得して、座学と実学とが緊密に連携した実験、実習となるカリキュラムへの検討を行った。今年度は、まず手始めに実験テキストの改訂を行った。製図では、ソリッド・ワークス（3次元CAD）システムを導入して授業「機械工学設計Ⅰ、Ⅱ」に活用した。「機械工学実習Ⅰ」では、「映像制作ツール」を新たに導入（ものづくり教育研究支援ラボに設置）して、実習内容を具体的に映像化することで作業での勘どころや安全上の留意点などを学生に説明し理解させることに活用した。生体分子機能工学科では、文部科学省、学内予算で学生実験室のエアコン設置、X線回折装置、DNAセンサー、FT-IRを獲得した。これらの装置を用いて、実験内容をより専門的な実験内容に切り替えた。

【92-3】

○ 平成20年度に実施した化学基礎実験・物理基礎実験授業を引き続き開講し、同時に実験科目の検証作業をおこなう。

・農学部では、全ての講義室及び研修室に液晶プロジェクター（15機追加）、スクリーン（14枚追加）及び暗幕の設置が完了した。情報機器では、貸出し用パソコンの更新（3台）、図書館e-ラーニング用パソコンの本格的な稼動が開始された（12台）。これらにより、e-ラーニングや映像教材を効果的に活用した講義を行うための環境が整った。さらに、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム[テーマA]に採択され、「食の安全」に関する教育内容を教養科目へ専門科目まで体系化することで強化し、食の安全ファシリテーターが養成できる特色あるカリキュラムGPの推進のために農産物加工室が新設され、農産物加工設備一式（ジャム加工機器及びパン加工機器他）が導入された。これによりこれまで不可能であった農産物加工実習を行うことが可能となった。

・教養科目の分野別基礎科目として、平成19年度から化学実験基礎及び物理学実験基礎を開講している（物理学実験基礎履修者数：人文学部1名、工学部21名、農学部5名の計27名、化学実験基礎履修者数：人文学部1名、工学部23名、農学部15名の計39名）。化学実験基礎についていえば、履修して化学・化学実験に関する基礎知識や技術は高まり、受講は有意義であったという意見が多数であった。一方で、ほとんどの学生は、実験のレベルが難しかったとの回答であった。

【93】

⑮ インターンシップを整備充実し、就職意識の啓発を図る。

【93】

○ インターンシップの実施体制を確立する。各学科から出たインターンシップの報告書を点検し、インターンシップの充実を図る。

【93】

・インターンシップの実績は、年度計画【87】、【144-2】の「計画の進捗状況」を参照。

・人文学部では、8月～9月にインターンシップが行われ、インターンシップ終了後に、全履修者から統一フォーマットに基づいてレポートが提出された。インターンシップ（水戸近郊）は12月9日（水）に、インターンシップ（広域）は12月16日（水）に報告会を行った。
1) インターンシップに関する履修学生の意見は、インターンシップレポートと同時に提出され、インターンシップ報告書に記載予定の「インターンシップアンケート」に詳細に記述されている。以下幾つかを列挙する。「一般社会側からの視点で就職を考えられた」、「自分自身を見つめ直すことができた」、「インターンを通じて他大学の人たちと友達になることができた」などの肯定的な意見がある一方、「体調管理をしっかりと行うべきだった」、「パソコンの使い方を勉強していればよかった」、「もう少し質問すればよかった」、「ビジネスマナーを学んでおけばよかった」といった反省の意見や、「ホテルに滞在したため多くの費用がかかった」、「交通費や宿泊費が一切出ないのは大変」のような切実な発言も見られた。また「去年派遣さ

		<p>れた人に話を聞ける機会があればよかった」、「もう少し目立つ所に告知ポスターを張ってほしい」といった要望も見受けられた。</p> <p>2)派遣先のインターンシップ派遣学生に関するコメントは、インターンシップ終了後派遣先から提出された「インターンシップ評価表」に記載されている。以下いくつか列挙する。概して肯定的評価が多かった。「手の空いた時間帯も自ら資料を読み、担当者に疑問点を尋ねるなど前向きな姿勢が見取れる」、「業務に積極的な姿勢で迅速且つ真摯に取り組んだ」、「最年少にもかかわらずリーダー的存在を果たしていた」、「実習に際して積極的に知識を吸収しようとする姿勢、人の話を聞く姿勢に」など。他方、「積極性にやや欠ける」、「敬語が使えるようにアドバイスした」のような貴重なアドバイスもいただいた。なお今年度は勤務態度が5段階評価で3の学生は見受けられなかった。</p>
<p>【94】 ⑩ 各種資格の取得に対応したカリキュラムを整備し、さらに、資格試験などの単位認定を促進する。</p>	<p>【94】 ○ 各種資格の取得状況を点検し、資格取得カリキュラムの充実を図る。</p>	<p>【94】 ・理学部では、JABEEプログラム所属の学生には、研究ノートにより自己管理させた。また、毎月作業報告書を提出させている。学生は、卒業研究を自らの管理のもとに自主的に進めた。 ・平成21年度のJABEE修了者は、理学部15名、工学部149名であった。</p> <p>資格取得を目指すカリキュラムを継続的に実施し、以下の成果を得た。(これらには実務経験を必要とするものも含まれている。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人文学部：教員免許取得65件、学芸員資格取得者(実習者)23名 ・教育学部：教員免許取得1,039件、社会教育主事(実習修了者)11名、学芸員資格取得者(実習者)10名、公認スポーツ指導者(スポーツリーダー)14名、2級建築士受験資格取得者8名 ・理学部：教員免許取得79件、学芸員資格取得者(実習者)6名、修得技術者(技術士補資格保持者)15名、測量士補28名、危険物取扱者(甲種)受験資格有資格者30名、毒劇物取扱責任者30名 ・工学部：教員免許取得7件、修得技術者(技術士補資格保持者)149名、情報処理技術者資格取得者2名、電気主任技術者(認定)申請者第I種6名、測量士補58名、2級建築士受験資格取得者2名、危険物取扱者(甲種)受験資格有資格者61名 ・農学部：教員免許取得14件、家畜人工授精師14名、食品衛生管理者18名、食品衛生監視員18名、測量士補15名、大型特殊自動車免許13名、2級建築士受験資格取得15名、木造建築士受験資格取得15名、危険物取扱者(甲種)受験資格有資格者15名
<p>【95】 [成績評価] ⑪ 授業の精選を行い、各授業科目の成績評価基準を明確にして、年間申請単位数の上限設定をするとともに、GPAによる成績評価の活用を行い、卒業生の質の確保を図る。</p>	<p>【95-1】 [成績評価] ○ 履修登録上限制度を運用し、点検する。</p> <p>-----</p> <p>【95-2】 ○ 成績評価基準を点検し、平成22年度シラバスに反映させる。</p>	<p>【95-1】 全ての学部で履修登録の上限を設定している。その運用については、以下の各学部のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人文学部：年間履修単位数40単位(学期ごとに20単位)であることを、新入生ガイダンス時に印刷したものを配布すると同時に、口頭で繰り返しアナウンスしている。年間40単位は周知徹底されたと思われるが、守らなかった場合の対策が課題となっている。 ・教育学部：授業シラバスのチェックを通して適正な評価が行われているかどうかを確認した。また、単位数の上限設定(年間58単位)については、入学時の全体オリエンテーションで確認し、さらに各教室に対して実態の調査を行った。その結果は、上限を超えている学生も少数いたが、それぞれに履修上の事情があることがわかった。今後は特に単位の上限設定の指導について検討が必要である。 ・理学部：年間履修単位の上限は50単位(1・2年次対象) ・工学部：年間履修単位の上限は54単位 ・農学部：年間履修単位の上限は58単位(学期ごとに29単位) <p>【95-2】 統一シラバスを用いて、シラバスに成績評価基準を明示している。</p>

○人文学部では、シラバス作成時に教員集団における相互チェックを実施し、シラバス内で成績評価基準を明示することを周知徹底した。前期と後期の成績評価を行う時期において、シラバスに示した基準に従い成績評価を行うよう、学科会議等で教員に対して要請を行った。
 ・学生に対しては、各授業の第1回目にシラバスを用いたガイダンスを行い、成績評価の方法を明確に伝えた。
 ・授業アンケート対象科目の教員から、シラバスどおりの成績評価を「行った」という回答は、前期に関しては人文コミュニケーション学科99%、社会科学科98%であった。
 ・学生からの成績に関する問い合わせ制度を整備した。全国人文系17学部と一部の私立大学における制度の実施状況を調査し、その結果を参考にしつつ、本学部に適した制度の設計を行った。

○理学部では、すべての開講授業科目のシラバスに、科目毎の到達目標と成績評価基準が明示されている。

○工学部では、教育の成果を検証するためのアンケート調査項目に関して、昨年度に引き続き、教育改善委員会で調査項目の確認と文面の更新を行った。また、教育改善委員会において全学科で前後期の期末に実施される教員の授業アンケートの報告書を確認し、その中に必須事項として記載されている学科全員の授業アンケートの実施状況とそのポイントに関する記述の有無を確認するとともに、そのポイントに基づき教員毎の自己点検への反映状況を確認している。その確認に基づき点検結果表を全学科にフィードバックし、さらなる教育改善効果の意図した。教育改善委員会において、平成21年度前期及び後期シラバス評価システム（ホームページ）各学科のFDにおける評価の稼働状況及び実効性を確認した。各学科で実施された教育点検会議においても、アンケート結果をもとにした細かい自己点検を進めていると判断される。

【96】

○大学院課程

〔入学者受入方針〕

① 現行の入学者選抜方法を見直すとともに、各研究科の受入方針に応じた選抜方法を検討する。

【96-1】

○大学院課程

〔入学者受入方針〕

○ 大学院改組にもとづく新たな入学者受入れ方針に沿って、選抜方法の見直しと新たな選抜を実行する。

【96-1】 【96-2】

○人文科学研究科の状況

・改組と新課程の発足に伴い、ホームページの全面的更新とパンフレットを新たに作成した（全12頁）。このパンフレットは2,000部印刷し、県内諸機関、各大学等に郵送した他、本学図書館、茨城県立図書館、茨城県歴史館、生涯学習センター、放送大学、同窓会事務局などに配布、大学院説明会（2回実施）、オープンキャンパス、常陸大宮市との茨城大学地域連携事業シンポジウムなどで積極的に配布し、大学院のPRに活用した。HPの更新とパンフレットの積極的配布により、本研究科の社会への周知を図った。

・新課程の発足に伴い、入学者選抜の方法を再検討し、新たな実施計画を策定した。入学者選抜を平成22年度入試より秋と春の年2回実施することとした。文化科学専攻では、秋入試は専門科目の筆記試験、春入試は小論文とし、試験科目も再検討して変更を加えた。また、入学試験実施要領も全面的に見直した。適正な試験問題の出題については、従来より各専攻ごとに「入試問題チェックシート」を作成し、出題委員、チェック委員、専門委員、評議員という4段階で厳重な点検を行う体制が確立しているが、改組による2専攻体制の発足により、特に文化科学専攻では今年度、新たに「点検チェックシート」を作成した。平成22年度入試出願者は、秋入試25名（文化科学専攻20名、地域政策専攻5名）、春入試27名（文化科学専攻21名、地域政策専攻6名）、計52名にのぼり、平成19年度33名、平成20年度40名、平成21年度29名に比べ大幅に増加した。なお、合格者は、秋入試19名（文化科学専攻17名、地域政策専攻2名）、春入試18名（文化科学専攻13名、地域政策専攻5名）で、入学手続者は30名（文化科学専攻23名、地域政策専攻7名）となった。

・教育学研究科では、改善された日程、体制、方法に従って8月に入試説明会を行った（参加者91名）。この説明会では、教育学研究科の概略のほか、専修ごとの説明や大学院生からの報告、質疑応答など活発に行われた。この説明会は、アンケート結果から見ると概ね好評だった。

【96-2】

○ アドミッション・ポリシーに沿った入学者選抜を継続して実施する。

○ 理工学研究科では、各専攻（専攻長宛）に対してアンケートを実施し、英語の試験問題についてどのように考えているかを調査した。その結果、次のような点が明らかになった。

- ・ 英語問題の外部試験については、「現在の英語統一問題で良い」と「外部試験に賛成する」とが、ほぼ半々の回答である。
 - ・ 外部試験として、TOEICのIPテストを利用することの賛成は無い。以上のことを考慮して、委員会において検討した結果、次のような結論を得た。
 - ・ 現在の英語統一問題は今年で3年目、合計4回しか実施していないことから、平成23年度入試は、現在のまま英語統一試験を実施する。
 - ・ 平成24年度以降の入試については、現時点では外部試験を実施するか否かの判断は保留し、TOEICの公開テストなどの外部試験を完全導入するまたは併用するという方向で、今後それらを採用する上での問題点の検討を慎重に続ける。
- また、各専攻（専攻長宛）に対してアンケートを実施し、数学の試験問題について調査した。その結果、次のような点が明らかになった。
- ・ 現在出題している専攻以外に、新たに出题しようと考えている専攻はない。
 - ・ 出題の統一化には賛成している。各専攻の意向を調査した結果、全体の方向性が確認でき、今後の検討の資料を得ることができた。

・ 農学研究科では、全専攻共通の農学研究科説明会を実施した。ホームページ、ポスター等で周知を図った。

（留学生センター）

・ 理工学研究科（工学系）から22年度博士前期課程の留学生受験者用の日本語の試験問題作成の依頼があった。今年度は2回の入試の日本語試験問題を留学生センター教員が作成し、採点した。

【97】

② 特色ある教育・研究プログラムを提供して、入学者の増加を図る。

【97】

○ 特色ある教育・研究プログラムを提供して、入学者の確保を図る。

【97】

- 特色ある教育・研究プログラムとして以下を提供して、入学者の確保を図った。
- 大学院生の俯瞰的な視野を培う目的で21年度に導入した「大学院共通科目」（全研究科）
 - 持続的な社会を構築する学識を培う目的で各研究科に共通するプログラム「サステイナビリティ学」と専攻コース「サステイナビリティ学」（全研究科、理工学研究科）
 - 大学院教育改革プログラム（GP）
 - 「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」（教育学研究科）
 - 「地域サステイナビリティの実践農学教育」（農学研究科）
 - 教育プログラム「コミュニティ・マネージャー（地域人材）養成プログラム」（人文科学研究科）
 - 教育プログラム「アカデミックサイエンスマスタープログラム（ASM）」、「プロフェッショナルサイエンスマスタープログラム（PSM）」（理工学研究科理学専攻）
 - 4大学院連携ITプログラム「4大学連携創生情報学教育研究プログラム」
 - 原子力教育大学連携ネットワークプログラム「総合原子科学プログラム」（理学部）、「原子力工学教育プログラム」（工学部、理工学研究科）

・ フィールドスタディによる大学院教育の充実として、教育学研究科では、平成20年度に採択された大学院GP「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」を実施した。この教育プログラムは、「産業」の教材化と授業実践を主目的とし、茨城県の産業を豊かな教育資源としてとらえ、産業（養豚）の生産から流通・消費までの全過程とそこに関わる人々の役割を調査し、その結果を踏まえて、教育的課題の発掘と各教科ごとの教材と授業案を作り、小中学校での授業実践へと結びつけるものである。前学期は、「地域教育資源フィールドスタディ」として、講義（県農林水産部畜産課、食肉センター所長、養豚業者等）と学外研修（全農サイロ、中央食肉公社、筑波ハム等）を行った。後学期は、「授業展開ケーススタディ」として、演習、シンポジウム、模擬授業等を行った。2つのプログラムは必修で、教育学研究科の修了履修単位を30単位から34単位に引き上げた。これら多様で充実した教育に

		<p>より、大学院生の地域産業とこれを担う人々への深い洞察力を涵養し、専門的な教育職業人の育成に成果をあげている。</p> <p>・農学研究科では、インドネシアの3大学と共同で熱帯農業を題材とした平成19年度に採択された大学院GP「地域サステイナビリティの実践農学教育」（3年目）の教育プログラムを実施した。インドネシアで行われた「熱帯農業フィールド実習」と「グループ課題演習」（前半）では、現地の学生との混成グループで水・土壌環境の特性等についてフィールド調査を行い、グループ内で議論しレポートを作成した。これらの実習・演習を通じて受講学生の国際性とコミュニケーション力の向上がみられた。12月にはインドネシアから教員と学生が来学し、共同で大学院GPワークショップを開催した。この教育プログラムの平成21年度の修了者は8名（20年度7名）で、その修了者には、プログラム修了証を授与した。地域サステイナビリティに関連する分野の外部講師を交えた対話型講義や海外実習などにより、農業への深い課題認識と多様な実践的観点を養い専門的な農学職業人の育成に成果をあげている。</p>
<p>【98】 [教育課程] ③ 飛び入学や短縮修了の活用などの教育課程の多様化を図る。</p>	<p>【98】 [教育課程] ○ 飛び入学や短縮修了を活用する。</p>	<p>【98】 ・短縮修了制度を活用して、1名を修了させた。</p>
<p>【99】 ④ 科目等履修生・研究生・14条適用大学院生・休職制度大学院生の受入れ増を図るとともに、現職教員の受入体制を充実する。</p>	<p>【99】 ○ 大学院設置基準第14条（教育方法の特例）適用の社会人大学院入試制度を継続して実施し、社会人に学習の機会を提供する。</p>	<p>【99】 大学院設置基準第14条（教育方法の特例）適用の社会人大学院入試制度を継続して実施し、以下の社会人を受け入れた。 ○科目等履修生・研究生・大学院設置基準14条適用大学院生・休職制度大学院生（大学院修学休業制度）・現職教員の受入状況 ・科目等履修生：21年度3名（20年度7名） ・研究生：21年度7名（20年度12名） ・14条適用大学院生：21年度21名（20年度28名、19年度13名、18年度11名、17年度16名、16年度16名） ・休職制度大学院生：21年度1名（20年度1名） ・現職教員：21年度26名（20年度28名、19年度13名、18年度14名、17年度13名、16年度21名） 以上の受入数の中で、平成16年度から平成19年度までを比較すると、14条適用大学院生及び現職教員の大学院生の受入れが増えている。その他は横ばいである。</p> <p>○人文科学研究科では、大学院生の入学者増を図るため、募集要項、大学院ポスター、パンフレットを送付してPRを図った。9月には、研究科長と大学院専門委員会委員長が茨城県庁などを訪問し、大学院のPRを行うと共に、人事課他の職員と情報交換を行った。地方公共団体から職員を受け入れることについては、公務員の人員削減などにより、大変厳しい現状であり、成果をあげるのは困難であった。</p> <p>○教育学研究科では、大学院設置基準14条適用、休職制度を活用した現職教員、社会人大学院生に対する研究指導方法の改善案として、 ①研究指導計画書を年度当初に策定し、それに基づいて指導を行うこと。 ②入学時に指導教員による面接を行い、教育学部出身でない場合には、そのことを意識した指導や現場に生きる指導を行うこと。 ③前期及び後期開始時、年度末に学習相談を行うこと。 ④研究会や学会への参加を奨励すること。を定め実施した。また、14条適用学生に対しては、茨城県教育委員会との打合せ会において、週一日の研究日の確保、及び研究日に関わる非常勤講師時間数の確保に関して要望を提出した。</p>
<p>【100】 ⑤ 学士課程教育との有機的な接続に配</p>	<p>【100-1】 ○ 学士課程との接続性に配慮しつつ、</p>	<p>【100-1】【100-2】【100-3】 ○人文科学研究科の状況</p>

慮しつつ、適切な教育内容やレベルを設定して、課題探求力を備えた学生を育成する。

適切な教育内容やレベルを備えた授業を配置し、その意義と運営上の問題点について点検する。

前期、後期の授業アンケートの実施、及び4月と10月の大学院生との懇談会の実施を通じて、教育内容やレベルについて大学院専門委員会として点検を行った。授業アンケートでは、新課程の1年生向けと旧課程の2年生向けで別々の質問項目とし、特に新課程で新たに開講された授業について、データ収集に意を用いた。これはFDにおいても報告、検討課題とした。また、今年度、学士課程の在籍の学生が修業課程で開講される授業科目の一部履修を可とする早期履修制度を積極的活用を奨励し、前期2名、後期3名の適用者が出た。これら5名は全学員、本学が受けた教育研究指導計画の作成・提出を全正副指導教員に義務付け、提出された教育研究指導計画書を大学院専門委員会にて点検し、教育研究指導の改善方法について検討した。研究指導計画書はほぼ定着し、提出率も100%に近いが、可能性もすべし計画書の記載内容が単なる書類上の記述に留まってしまっているかと思われる。そこで、これまでの実績を踏まえ、一層効果的な教育指導が行えるよう、記載内容、様式、活用方法等を検討し、1年次用と修了年次用との2種類を作成し、1年次用には学年終了時の研究指導教員所見記入欄を設け、1年間を総括して次年度へと繋げられるようにした。これについて、FDの場で発表、検討した。

○教育学研究科の状況

大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」に関する授業アンケート及びFDを実施し、GPの点検評価を行った。さらに、教育学研究科の核となるGPが何を核とした授業なのかを明らかにし、さらには、後期の授業終了後に、受講生である大学院生の意見を聴取しつつ、教員及び大学院生による合同点検評価の会を2月に実施した。それによって、学生自身の課題探求力を育て、同時にプログラムの問題点を洗い出した。また、教育学研究科として大学院GPと関わるサステイナビリティ学教育プログラムに関する授業を位置づけ、平成21年度から本プログラムの科目「地域教育資源フィールドスタディ」、「授業展開ケーススタディ」を（学校臨床心理専攻を除き）必修とし、（学校臨床心理専攻を含め）修了単位数を34単位に引き上げた。

○理工学研究科の状況

・理工学研究科理学系では、各系の21年度カリキュラムは、授業だけではカバーできないところは基本的な演習で補うことが可能な構造になっており、学部との接続性に配慮したものになっていることは各系の委員によって確認された。また、22年度に向けた履修要項の策定の際には、学部との接続性に関連した科目の実施計画について十分な注意が払われた。

・理工学研究科工学系では、研究の実施が主な内容になっている授業科目（特別実験、特別演習）のPCDAサイクルシステムを構築するために、今年度の新入生から指導教員と学生との間で修士論文の指導計画書を作成し、提出することを開始した。この指導計画書の導入によって、各研究室で行われている実験科目に関する指導計画が明確となった（Plan）。大学院生の指導状況（Do）について、各専攻のFD研修会等で確認することとし、前期分においては確認を行った（Check）。各専攻のFDについては工学部教育改善委員会により点検されている。後期分についても同委員会が各専攻でのFD実施状況を確認し、改善案を議論した（Action）。

○農学研究科の状況

・平成20年度に先端農学基礎科目の担当者会議、そして代表者会議が開催され、全学大学院共通科目の実施に伴う先端農学基礎科目の改革について議論した。その結果、21年度から「先端農学基礎科目」を「農学基礎科目」に名称変更し、その内容は全専攻の大学院生に対して、より広い視点からのレビューを提供し、分野の基本的理解を導くものとなった。

・JICA筑波と連携した留学生を対象とした修士課程コース「環境共生農学コース」については、平成20年度10月入学の4名の学生に対して、本年度に英語による授業科目開講を行い、コースを計画通りに運営した。平成21年度の入学者（10月入学）は1名であった。すでに、eラーニングの授業を修了しており、次年度から本学での授業科目履修が始まる予定である。

【100-2】

○ 3専攻による教育プログラムを継続するとともに、研究科共通科目である「先端農学基礎科目」の見直しを行い、全学の大学院共通科目との調整を図りながら、大学院教育を充実させる。

【100-3】

○ JICA筑波と連携して留学生を対象とした修士課程コース「環境共生農学コース」の平成20年度10月入学者を得て、コース・プログラムを継続して実施する。

【101】

【101】

【101】

⑥ 学外研究機関との連携を広く進めて、専門性と総合性を身につけた高度な専門職業人を育成する教育プログラムを充実する。

○ 学外研究機関との連携を広く進めて、専門性と総合性を身につけた高度な専門職業人を育成する教育プログラムを充実する。

○理工学研究科の状況

理工学研究科では、博士前期課程5専攻及び博士後期課程6専攻において、日本原子力研究開発機構、産業技術総合研究所、日立製作所日立研究所、日立化成工業、NTTアクセスサービスシステム研究所の5機関と連携大学院協定を締結している。平成21年度に連携機関において連携教員の研究指導を受けた大学院生の状況は以下のとおりである。

- ・日本原子力研究開発機構：博士前期課程学生3名（理学系1名、工学系2名）、博士後期課程学生6名（理学系）
- ・産業技術総合研究所：博士前期課程学生1名（理学系）、博士後期課程学生1名（理学系）

理学系では、日本原子力研究開発機構との連携科目の講義・演習・実験（陽電子科学特論、放射線化学特論、放射線工学基礎、放射線工学特論、原子力基礎特論、エネルギーサイクルシステム特論等）がカリキュラムに組み込まれ、高度な教育プログラムを実施した。また、原子力教育大学連携ネットワークとして、幹事役の日本原子力研究開発機構、茨城大学、東京工業大学、金沢大学、福井大学、岡山大学、大阪大学の6大学から構成され、主に原子力教育の充実に活動している。本学では、本ネットワークに関連して平成21年度に以下の授業を実施した。遠隔授業：「放射線に係わる科目」（履修者74名、単位修得者70名）、「地層処分に係る科目」（履修者6名、単位修得者5名）。夏期実習：日本原子力研究開発機構において実施（9月に5日間）、本学から博士前期課程学生4名参加（他大学も含め総計21名）。また、原子力教育大学連携ネットワークの実施について協議する連携・推進協議会（年4回）に出席し、本年度の活動状況の把握、次年度以降の活動内容の協議を行った。

工学系では、日本原子力研究開発機構の特別研究生等として9名の学生が共同研究などに従事している。

○農学研究科の状況

農学研究科では、1専攻において、農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所、国立科学博物館植物研究部と連携大学院協定を締結しており、平成21年度は3名の学生が国立科学博物館植物研究部において連携教員の研究指導を受けた。

【102】

⑦ 社会の要請に応える新たな教育プログラムを積極的に構築するとともに、融合領域では複数専攻間の連携による幅広い教育プログラムを提供する。

【102】

○平成21年度から全研究科横断の大学院共通科目を開講し、幅広い教育プログラムを提供する。

【102】

○大学院共通科目の開講

- ・平成21年度から、本学の全研究科（修士課程又は博士前期課程）を対象とする「大学院共通科目」（選択必修2単位以上を履修要件）を開講した。
- ・本学大学院においては、知識基盤社会の構築を担う高度専門職業人養成と知識基盤社会を支える高度で知的な素養のある人材の育成を目指し、それを実現するために、大学院教育を限られた専門分野にとどめず、広い俯瞰的な視野とコミュニケーション力、創造性と想像力を育成する組織化された教育を行うものである。
- ・開講した大学院共通科目は次のとおり（単位修得者数）。

人文社会科学基礎論Ⅰ（17）、人文社会科学基礎論Ⅱ（12）、学術英会話（10）、地球環境システム論Ⅰ（111）、学術情報リテラシー（41）、科学と倫理（104）、人間システム基礎論Ⅰ（55）、学校教育基礎論（18）、国際コミュニケーション特論（120）、海外とのものづくりアライアンス特論（14）、知的所有権特論（12）、産業創生方法論（25）、実学的産業特論（33）、原子科学と倫理（25）、霞ヶ浦環境科学概論（3）、持続社会システム論Ⅰ（66）、持続社会システム特論Ⅰ（2）

○理工学研究科の状況

理工学研究科理学系では、教育プログラム「アカデミックサイエンスマスタープログラム（ASM）」と「プロフェッショナルサイエンスマスタープログラム（PSM）」を設け、両プログラムとも順調に実施した。

「アカデミックサイエンスマスタープログラム（ASM）」は、博士後期課程への進学を目指すなど、将来、自立した研究者としての能力を有し、様々な分野で活躍しうる素養を身につけさせる教育プログラムである。一方、「プロフェッショナルサイエンスマスタープログラム（PSM）」は、修士課程修了後すぐに、高度専門職業人として産業界で活躍する能力を修得させる教育プログラムである。現在は、「化

		<p>学系」と「生物系」が提供する主たる専攻分野のカリキュラムの中にASMプログラムとPSMプログラムの両方が提供され、「数学・情報系」、「物理系」、「地球環境系」が提供するカリキュラムではASMプログラムのみが提供されている。</p> <p>平成21年度における実績は以下のとおり。</p> <p>入学者70人中、ASMプログラム65人、PSMプログラム5人（化学系2人、生物系3人）という内訳であった。</p> <p>PSMプログラムでは「課題特別研究」という、企業や研究所での長期インターンシップを取り入れた科目が必修となっている。平成21年度の長期インターンシップ先は、産業技術総合研究所3名、放射線医学総合研究所1名、社団法人茨城県林業協会1名で、具体的な研究テーマに取り組みながら、高度専門職業人として産業界で活躍できる基礎力を身につけるべく学外研修を行った。</p> <p>・工学系が平成20年度から開始した「4大学院連携先進創生情報学教育研究プログラム」では4名（本学関係）、「原子力工学教育プログラム」では3名が初めて修了した。</p> <p>人材育成支援関連授業として、次の科目を開講した。</p> <p>(1) 実学的産業特論（大学院共通科目）</p> <p>この授業（公開講座）は、企業の幹部による講義などの座学が9回（9コマ）、企業訪問が3回（6コマ）で構成し、毎回レポートの提出と最終日にはアンケートを提出させた。また、この授業は一般の方にも公開して実施した。授業内容は、元気企業の紹介や日立の歴史、中国の状況などの紹介もあり、参加した大学院生の評判も良好であった。受講者は33名（単位修得者33名）、公開講座として受講した一般の方は、延べ87名であった。</p> <p>(2) 実体験型ものづくり特論</p> <p>この授業は、地元企業第一線の専門家が講師となり、学生に「製品の設計・原価・試作などの開発過程」を教育すると共に、学生の柔軟な発想や専門的知識等を活用して地元企業の技術的な課題の解決や製品開発の推進を図るもので、3名の高度技術者を講師とする3つのグループを結成し、1グループ当り3名の大学院生（合計9名）が後期に受講した。</p> <p>○農学研究科では、サステイナビリティ学教育プログラムの授業科目を計画通りに実施した。</p>
<p>【103】</p> <p>⑧ 博士後期課程では専門分野の能力を深化させるために少人数教育を行い、自立した研究者を育成する。</p>	<p>【103】</p> <p>○ 副指導教員の開講科目の履修に加えて、副指導教員による指導を充実する。</p>	<p>【103】</p> <p>○理工学研究科の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理学系では、副指導教員制度は定着しており、指導教員と違った角度から学生指導に当たっている。副指導教員開講科目は、入学時ガイダンスで受講するように勧めている。副指導教員開講科目は、ほとんどの学生が受講しており、また、講義以外の指導により、学生に広い視野を与えている。 ・工学系では、副指導教員による特別演習（2単位、必修）を設け、副指導教員が学生の指導に積極的に関わる基盤を構築すると共に、ガイダンス、大学院学生便覧により周知徹底を図った。必修科目である特別演習の実施により、副指導教員が学生の指導に積極的に関わるができる基盤を構築できた。
<p>【104】</p> <p>[教育方法]</p> <p>⑨ 院生の外国語能力や発表能力の育成に努め、国内外の学会、シンポジウム等に参加させて、研究発表や討論の体験を奨励する。</p>	<p>【104-1】</p> <p>[教育方法]</p> <p>○ 大学院生の学会・シンポジウムでの発表・参加を奨励する。</p>	<p>【104-1】</p> <p>○人文科学研究科の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成21年度の人文科学研究科学生の学会等での発表は5件、論文等の発表は3件である。 <p>○教育学研究科の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成21年度の教育学研究科学生の学会等での発表は18件、論文等の発表は9件、コンクールでの作品入賞3件、個展での作品発表1件である。 <p>○理工学研究科の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理学系では、全系共通科目のインターナショナルサイエンス実習をはじめとして、

各系でプレゼンテーション能力・英語能力を高める演習を実施した。実際に能力がどの程度向上したかの達成度は、大学院2年目で研究を実践していく中で明らかになってくると思われる。平成21年度博士前期及び後期課程の理学系学生の学会等での発表は106件、論文等の発表は26件である。
 ・工学系では、大学院生の学外発表や研究室での英語論文紹介等の実施状況についてFD研修会等で確認することを通して、大学院生の学外発表の奨励・実施を促した。平成21年度博士前期課程工学系学生の学会等での発表は343件、論文発表は17件である。

○農学研究科の状況
 ・平成21年度の農学研究科学生の学会等での発表は75件、論文等の発表は9件である。
 ・インドネシアのボゴール農科大学、ウダヤナ大学、ガジャマダ大学に教員・学生を派遣し、学生間の相互研究発表を行った。また、同3大学から教員・学生を招き、ワークショップを開催して、教育と研究の交流を促進させた。さらに、熱帯農業フィールド実習（1単位）、グループ課題演習（1単位）を同3大学共同で開講した。

【104-2】

○茨城大学国際学生会議を開催し、研究発表や討論の体験を奨励する。

【104-2】

○「学生国際会議」の開催
 本年度で第5回となる「学生国際会議」を11月7日（土）、8日（日）の両日、本学インフォメーションセンターにおいて開催した。スリランカ、インドネシア、バングラディシュなど5か国の出身者も参加して、学生による46件の発表（参加登録者数は65名）があった。また、初日にはWhy should we learn English?というテーマでパネルディスカッションを、2日目には英国アストン大学教授による人工心臓に関する招待講演を実施した。なお、この会議の公用語は英語で行った。この会議の実行委員長、会計責任者をはじめ、スタッフは全て本学の学生である。このような学生主体の国際会議は他に例をみない。会議の運営はスムーズに行われ、質疑応答も活発であった。運営スタッフ及び発表者の外国語能力や発表能力の向上が図れた。参加した学生は、社交も含めた国際交流を体験できた。

【104-3】

○起業家精神の育成や外国語能力を高めるため、外国語による実務的な講義を開講し、学習への目的意識の向上や広く国際的な視野を育てる。

【104-3】

全研究科で英語による授業が開講された。平成21年度開講科目のうち、英語による開講科目数は以下のとおり。
 ・人文科学研究科：5科目
 ・教育学研究科：5科目
 ・理工学研究科博士前期課程・後期課程：21科目
 ・農学研究科：9科目

○理工学研究科の状況
 ・工学系では、今年度開講した英語による授業は、前期12科目、後期9科目の計21科目となった。
 ・工学系では、起業家精神の育成や外国語能力を高めるため、外国語による実務的な講義を開講し、学習への目的意識の向上や広く国際的な視野を育てる教育を行った。今年度は、大学院生の英語能力強化のための「国際コミュニケーション特論」、「国際コミュニケーション演習」、「国際テクニカルプレゼンテーション」の3科目を開講し、技術英語のe-ラーニング教材を新規に導入した。国際コミュニケーション能力認定教育プログラムの導入については、大学院教務委員会で検討を開始した。

・農学研究科では、英語により開講した科目（上記9科目）のうち、アジア農業論（1単位）と地球環境化学特論（1単位）は、外国人招聘教員によって開講した。

【105】

⑩ 多様な留学生のための日本語教育や

【105-1】

○ 多様な留学生のための日本語教育や

【105-1】 【105-2】

・留学生センターでは、工学部・農学部チューター懇談会、地域懇談会等で両キャ

多文化理解教育等の充実を図る。

多文化理解教育等の充実を図る。

ンパスを訪問し、複数キャンパスに起因する諸問題の解決に取り組んだ。FD研修会においては、研修コースで用いられた日本語教材についてレベルごとに総括して、教材の紹介や情報交換を行った。21年度の後期から水戸・日立・阿見の3キャンパス間でバーチャルキャンパスシステム（テレビ会議システム）を利用した日本語授業を行った。VCSによる授業には、前期7名（初級前半、日立）、後期24名（初級前半（13名：日立7名、阿見6名）、初級後半（11名：日立5名、阿見6名））の延べ31名が受講した。日本語教育の機会が拡大された。

・茨城大学外国人留学生機関保証制度取扱要項による機関保証制度を運用して来た。平成18年度23名、19年度30名、20年度41名と確実に利用者の増加が見られた。今年度は、人文学部11名、教育学部4名、理学部5名、工学部9名、人文科学研究科1名、教育学研究科1名、理工学研究科10名、農学研究科4名、合計45名の利用者があった。今後は引き続き同制度の周知に努め、さらに利用者の増を図って行きたい。

・理学部・工学部・理工学研究科では、(1)4月に留学生説明会を実施した。日常生活上の諸注意、諸手続き、留学生支援体制、相談窓口等の説明をした。(2)6月に国際交流会館、おおせ国際寮、吼洋寮（留学生分）などの支援施設の調査・点検を実施した。(3)7月にチューター・留学生センター教員懇談会を実施した。(4)10月に留学生OB・OG講演会を実施した。

・農学部・農学研究科では、留学生の学業や生活に関する相談体制を一層充実させるとともに、日本語教育の授業を前期に実施し、後期にも実施した（各15回）。また、留学生の多文化理解を深めるために阿見町との連携で様々な文化交流会を開催した。

【105-2】

○チューターの留学生支援体制を点検して制度の充実を図り、留学生の支援環境の向上を目指す。

【106】

⑪就職・インターンシップ支援体制を整備し、就職意識の啓発を図る。

【106】

○実務的な講義を開講し、学習への目的意識の向上や起業家精神の育成に努める。

【106】

○教育学研究科の状況

平成21年度には、大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」の成果として附属小学校においてパイロット授業を行い、学びを現場へと展開する力を確認することができた。また、高等学校2校においてキャンパスエイドを行い、学校臨床心理専攻を中心に教育実習とは異なるプロの教員としての意識で教育相談に取り組んだ。

○理工学研究科の状況

理工学研究科大学院教育においては、幾つかの教育改革が実施された。具体的には、大学院共通科目と研究科共通科目を設置した（前者を2単位以上、後者を2単位以上、合計で4単位以上の履修を修了要件化）。この改革の主たる目的には、職業観を涵養し就職意識を啓発することが盛り込まれている。具体的には「国際コミュニケーション特論」「実学的産業特論」「海外とのものづくりアライアンス特論」「産業創生方法論」「知的所有権特論」「組織運営とリーダーシップ」等がその対象授業である。これらの他にも4大学院連携先進創生情報学教育プログラムでは、IT系の専門分野の実践的職業観やIT応用ビジネス分野の諸事情についての感覚を養う意味で昨年度から開設されている「ITマーケティング論」「情報産業インターンシップ」や、今年度から開講した「ソフトウェアビジネスモデル論」「ソフトウェアビジネスモデル開発演習」は職業観を涵養し、就職意識を向上する科目となっている。その他では、工学特別講義として、LSI設計・開発技術特論、高密度LSI製造プロセス、洗浄・防塵技術特論、組込みシステム開発特論、半導体の先端製造プロセス、実体験型ものづくり特論、実用英語、エネルギーと核燃料サイクル特論）が、就業意識を高める科目として開講された。

【107】

[成績評価]

⑫科目ごとに達成基準を設け、適正な成績評価を行って、修了生の質を確保する。

【107-1】

[成績評価]

○適正な成績評価を行い、修了生の質を確保する。

【107-1】

○人文科学研究科の状況

○成績評価基準や修士論文審査基準の周知徹底のため、FD研究会や大学院生との懇談会の場で説明を行った。当該基準は本研究科のホームページや「大学院院生便覧」にも掲載されている。修了生の進路把握は、修了時に進路調査を行うことにより、

大幅に改善され、データが蓄積されている。学生からの成績評価に関する質問とそれに対応する制度を新たに制定した。なお、成績評価の適切性については、今年度アンケート項目の1つとし、また、大学院生との懇談会のテーマの1つとしたが、それらの反応からしても、学生が成績評価に対して、不満や不信を抱いている形跡はないと思われる。

・学位論文の審査体制、審査員の選考方法、学位論文の審査基準等については、専門委員会で検討するのみでなく、大学院FD研究会においてもテーマとして取り上げ、修士論文の審査体制や審査基準とともに、平成20年度に行われた学位論文審査状況についても点検・評価の課題とした。「特定の課題についての研究の成果の審査」についての申し合わせについては、文化科学専攻（コミュニケーションコース）の委員が中心になって点検を行った。論文の保存方法等についても検討し、冊子体のものは新設される資料室に鍵のかかる書架を設置して保管することにした。なお、改組により平成21年度発足した文化科学専攻では、修士論文執筆要項を検討し、制定した。

○理工学研究科理学系では、本年度開講科目（1年次配当）のシラバスを調査し、各科目の【到達目標】の記載状況並びに【成績の評価方法】について分析した。本年度開講科目（1年次配当）のシラバスを調査し、各科目の【到達目標】の記載状況並びに【成績の評価方法】について検討し、問題点と課題を抽出した。

○農学研究科では、成績評価基準及び修了認定基準については大学院履修案内に記載し、かつ異義申し立て制度とともに大学院ガイダンスにおいて学生に周知した。さらに、成績評価の方法についてはシラバスに記入する欄が設けられ、明記するように徹底されている。また、修士論文の指導には主指導教員1名と副指導教員2名が当たり、これら教員の指導により1年次には特別研究計画書、2年次には特別研究経過報告書を作成し、提出することを義務付けている。論文審査委員会には、これら3名の指導教員で構成し、論文審査を行う。論文審査合格者の最終試験は、所属専攻又は専門分野が主催する修士論文発表会での口頭発表と質疑応答により実施し、判定を行う。以上の規定は大学院ガイダンス、学務係、主指導教員を通じて印刷物及び口頭にて周知し、規定どおり実施した。

【107-2】

○シラバスの充実とそれに則った授業実施について継続的な改善を行なう。教育水準の向上を図るために、研究活動成果を反映させた学習指導を行い、各専攻の教育目的に沿った教育課程を展開する。

【107-2】

・人文科学研究科では、各専攻の専門委員が中心となって、平成21年度シラバスの点検を行った。数年来の努力により、シラバスは相当程度、改善、充実されている。平成22年度シラバスについて、シラバス記入要領に従ってシラバスが作成されているか点検を行い、不備な点については教員に修正を依頼した。

・教育学研究科では、教育の実質化のために、指導教員変更の申合せ（指導教員との関係がうまくいかないときなどに教員の変更を可能にする取り決め）、及び成績の疑義に関する申立ての申合せ（成績に疑義のあるときにそれを訴える手続き）を策定した。

・農学研究科では、平成20年度から統一書式のシラバスが導入され、シラバスの充実がなされており、それに則った授業が実施された。各教員は研究活動成果を反映し、より効果的な学習指導をするように努めた。シラバスについては学科長と教務委員が確認し、必要に応じて担当教員に修正等の指示を行った。また、授業アンケートから改善点や問題点を分析し、次年度の授業計画に反映させるシステムが実行されており、各教員は継続して教育水準の向上に努めた。

II 教育研究等の質の向上の状況
 (1) 教育に関する目標
 ③ 教育の実施体制等に関する目標

- 中期目標
- ① 教養教育をはじめとする学士課程教育を円滑に組織的に実施する。
 - ② 幅広い教育研究分野の連携体制をつくり、総合力の発揮が可能な教育実施体制を推進する。
 - ③ 教育の内容と方法の質的向上を図るため、教員の採用方法を改善するとともに、研修制度を整備する。
- 〔教育設備等の活用・整備〕
- ④ 教育設備や図書を整備し、教育方法の改善を図る。
 - ⑤ 情報メディアを活用した先進的方法による教育を行う。
- 〔連携した教育〕
- ⑥ 近隣大学及び研究機関との連携や高等学校との連携及び社会人教育に対して積極的に対応する。
- 〔教育の質の改善〕
- ⑦ 教育成果の点検・評価システムを充実させ、教育の質の向上を図る。

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【108】 ○教養教育 〔教育実施体制〕 ① 大学教育研究開発センターを改組し、専門への広い意味での基礎教育を含む教養教育の実施組織として整備充実し、継続的な改善がやりやすい組織体制とする。</p>	<p>【108】 ○教養教育 〔教育実施体制〕 ○ 平成20年度に変更した組織運営体制の実質化を図る。同時に部会長会議の機能化を図る。</p>	<p>【108】 平成20年度に統合した教育点検支援部に所属する2名の専任教員の業務分担を明確にしたことにより、業務・運営の効率化が進んだ。企画実施部の専任教員も教育点検支援部の業務を一部担当することとした。部会長会議では、教養教育基本計画案・同実施計画案の調整をおこなうことで、基礎教育運営委員会と業務の分担が図られ、教養教育に関わる審議と決定が効率的に行われた。</p>
<p>【109】 ② 4年一貫教育の実現のために、教養科目区分と履修基準を見直し、各分野で専門性の基盤となる教養科目と専門基礎科目を重視した実施体制を構築する。</p>	<p>【109】 ○ 改革に対応した大学教育センターの運営体制と教養教育担当体制を実質化する。</p>	<p>【109】 4年一貫教育の実現のために、教養教育の各科目区分の理念とガイドラインを見直し、より明確な表記に改めると共に、各分野で専門性の基盤となる教養科目と専門基礎科目の位置付けと担当体制について基礎教育運営委員会で共通の理解を図った。</p>
<p>【110】 ③ 教養教育体制、教育内容の管理・評価体制を見直し、JABEE認定可能なレベルに整備する。</p>	<p>【110】 ○ JABEE関連の教養科目書類の保管(電子化を含む)の分担体制を維持する。</p>	<p>【110】 JABEE関連の書類保管は既に担当学部ごとに方式を整えている。現在それらは順調に機能している。</p>
<p>【111】 〔教育設備等の活用・整備〕 ④ 情報通信環境を整備し、シラバスや教育資料を電子化するとともに、IT機器や情報システムを利用した効果的授業の開発・普及や教養教育のe-learningシステムの整備を図る。</p>	<p>【111】 〔教育設備等の活用・整備〕 ○ E-ラーニングシステムを整備し、対応可能な科目(理系接続科目、総合英語)での活用を拡大し、他の科目での利用を促進する。</p>	<p>【111】 【112-1】 【112-2】 学習管理システムRENANDIの利用は科目・教員両方で着実に増加した。利用者は昨年度より約100名増加し(約1.5倍)、登録科目数も300科目増えた(約3倍)。全科目に関して、Live Campusから学習管理システムRENANDIへのデータ移入作業を自動化するソフトを開発・改良した。老朽化したRENANDIのサーバを更新するとともにバックアップ機能も強化した。3地区でRENANDI講習会を合計4回開催した。工学部・農学部と協力して技術者用e-ラーニングソフトを導入した。総合英語で懸案であったA1c学外アクセス問題について、セキュリティー対策をIT基盤センターと協力して進めることとなり、平成22年度から学外アクセスが可能となった。3地区を対象に総合英語の教材用図書を充実した。シラバスに掲載された教科書・参考図書約460冊を購入し、図書館に配架した。教養教育科目「総合英語」で活用する参考図書(英語多読学習資料)約4,000冊を購入し、図書館に配架した。</p>
<p>【112】 ⑤ 学生の自律的学習を支援するプログラムを支える諸施設を整備充実する。</p>	<p>【112-1】 ○ CALLシステムと図書を活用した自主学習プログラムを用いて、総合英語習熟度別クラスの効果を高める。</p>	

	<p>【112-2】 ○ 教科書や参考図書を充実する。</p>	
<p>【113】 [連携した教育] ⑥ 授業を積極的に公開する。</p>	<p>【113】 [連携した教育] ○ 教養科目について、年間40科目程度の公開講座を開講する。</p>	<p>【113】 教養科目のうち、57科目（前期30、後期27科目）を公開講座としても開講した（公開講座の受講者数81名）。また、専門科目においても人文学部、工学部及び農学部で実施した。</p>
<p>【114】 ⑦ 社会人、専門職業人を活用した教育を行う。</p>	<p>【114】 ○ 総合科目を中心にして、社会人・専門職業人を活用した講義を一定程度開講する。</p>	<p>【114】 社会人・専門職業人を活用した総合科目を8本開講した。前期2本：社会人入門・特別講義（履修者数162名）、ハンディキャップをもつ人々と共に生きる社会（履修者数26名）、後期6本：環境としての霞ヶ浦（履修者数81名）、原子力施設と地域社会（履修者数64名）、水戸芸術館で学ぶ（音楽、演劇、美術）（履修者数72名）、キャリア形成と自己実現（2）（履修者数12名）、アスリートの世界～鹿島アントラーズとの提携を通して～（履修者数97名）、社会人入門・特別講義（履修者数61名）。また、地域総合研究所が担当する総合科目として、大洗町・町観光業関係者・観光ボランティア・NPO法人大洗海の大学の協力を得て、「海を活かしたまちづくり」（履修者数46名）の授業題目で宿泊実習をメインにした集中講義を9月に行った。</p>
<p>【115】 [教育の質の改善] ⑧ 教養教育に関する点検評価システムを充実し、評価結果をフィードバックして改善に資する。</p>	<p>【115】 [教育の質の改善] ○ 点検評価のフィードバックのシステムを評価する。そのためのFDを開催する。</p>	<p>【115】 実績は、年度計画【64】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【116】 ○ 学士課程 [教育実施体制] ① 学内の各教育組織の見直しを行うとともに、教職員の教育への適切な配置を促進する。</p>	<p>【116】 ○ 学士課程 [教育実施体制] ○ 教職員の教育への適切な配置を促進する。</p>	<p>【116】 ・人文学部では、第2期中期目標期間における人事調整の基本方針について、「第2期目標期間における人事調整基本方針（考え方）」を教授会に提案し、新しい方法に基づく人事調整の基本方針（ポスト調整・配分の方法）を決定した。新採用人事に当たって、公開模擬授業を行うことを義務付けたことで、教育能力を具体的に点検し、その能力を測ることができている。実際の模擬授業のあとの慎重な審議により、適格者を選び、良い人材を確保することができた。年度の初めに教育能力評価のフォーマットを作成し、それに沿って教育実績を昇進の際の評価に入れている。</p> <p>・教育学部では、教員の定員配置については、大学機関別認証評価における改善を要する点も踏まえ、教育学部・教育学研究科として効果的な教育活動を展開するために、特任教授制度を設け、これに則った採用案を策定し、適切な人事を行った。</p> <p>・理学部では、各分野の教員配置が適切になるよう人事方針検討委員会で検討を行いつつ、新規教員の採用を進めた。化学系や物理系の教員採用に当たっては年齢構成が偏らないよう配慮した。</p>
<p>【117】 ② 対応する分野で、順次、JABEE認定に 対応可能な教育体制を構築する。</p>	<p>【117】 ○ JABEE認定に対応した学習・教育目標を達成するための授業のPDCAサイクルシステムを確立する。</p>	<p>【117】 機械工学科と都市システム工学科に続いて、電気電子工学科も22年度にJABEEを受審する予定で計画を進めており、さらに知能システム工学科も準備を進めている。今後、各学科ともカリキュラムの改善を継続的に進める。学科の学習・教育目標を作成している学科は、その学習・教育目標と開講科目を対応させ、卒業要件（必修科目や選択必修の条件など）を満たした学生が学習・教育目標が達成できることを今後とも確認する。各学科や各専攻におけるFD研修会では、教育水準の維持について科目ごとに検証し、そのFD研修会報告書を教育改善委員会において、それぞれ読</p>

み合わせて確認した。さらに、これらの報告書を各学科において保管場所を決め、保存することを確認した。また、学生個人の学習教育目標の達成と卒業要件を整合させるためにポートフォリオ等を利用することなどが推進されている。

【118】

③ 担任制の充実に努める。不登校学生や単位取得不足学生に対する教育・相談体制を整備する。

【118-1】

○ 学生の就学状況・学習状況を把握し、きめ細かい指導が行えるような体制を確立する。

【118-1】 【118-2】

・人文学部では、前期及び後期のはじめに履修未登録学生や単位取得不足学生に対して、学年ごとの基準（取得単位数や履修状況など）を設けて、担任・指導員等を通じて履修指導等の教育支援を行った。学生担任・指導員が連絡し、対応のない学生に対しては、コースや学生委員会等で保護者・保証人に連絡を取り、対処を行った。また、コース決定手続き・ゼミナール決定手続きについても、教務委員会からの情報提供・依頼を受け、同様の手当てをした。その結果は委員会が集約し、該当する学生に対して、適切かつ、きめ細かに教育支援が行われていることを確認した。また、従来、コース組織としての機能が必ずしも整っていないことが、多く、コースで長期欠席学生に対する対応が話し合われる等、コミュニケーションとして、該当学生に対する対応ができるようになってきた。学生への助言体制の周知としては、まず、「困ったことがあるたら、どうしますか？」（学生相談マップ）や若しくは、学生アドバイザーを知らせる資料を新入生ガイダンス並びに各学年の在学ガイダンスにおいて配布・説明するとともに、人文学部ホームページに掲載した学生相談マップの更新を行った。関連して、従来は年度開始ガイダンスにおいて学生委員が直接担当するのは新入生ガイダンスだけで、在学生ガイダンスについては、教務委員に資料配布・説明を委託していたが、説明事項が増えその内容も複雑になったため、本年度から、在学生の年度開始ガイダンスにも学生委員が対応し、助言体制に限らず、学生生活についてより多くの情報を丁寧に提供できるようにした。

【118-2】

○ 不登校学生や単位取得不足学生に対する教育・相談体制を整備する。

・教育学部では、各教室ごとに学生と教員が参加する行事には、対面式などの学生主体で行うもの、面接対策など教員主導で進めるもの、合格体験記の作成や体験報告会など学生と教員が共同で進めるものといった3つのものがある。各教室ごとに、年間の取り組みを一覧にまとめて確認し、それぞれを充実させることにより教員の積極的な指導活動を高めるようにした。今年度は各教室において、教員採用試験も視野に入れた指導が行われるようになり、また、問題を抱えている学生には個別指導も行われた。

・理学部では、学生個人の修学状況を学期末毎の成績交付の際に把握している。各授業科目の履修学生数、単位取得率、成績分布などのデータは、必要に応じて集計している。きめ細かい指導は、成績表の交付時と授業レポート添削などによって行っている。

・工学部では、「意見聴取HPシステム」を工学部ホームページのトップページに場所を変更し、学生からわかりやすい場所にした。「意見聴取HPシステム」に関する各学年用のガイダンス資料を作成し、年度初めのガイダンスにおいて学生に周知した。

・農学部では、学科長を中心とした学生支援体制、オフィスアワー、何でも相談室、学生投書箱等により、学生の学習相談、進路相談、生活相談、健康相談などの相談と助言体制が適切に運営された。21年度は更なる支援体制を強化するために、学部長直属の教学支援検討WGが新しい学生支援制度（学生担任制度及びクラス委員制度）を平成22年度から実施する答申を作成した。1年次生に対する支援として、何でも相談室とは別に今年度から共通教育棟（水戸キャンパス）の農学部教員控室等を利用して元農学部教員が相談に当たる全員面談を実施した。学生の目線での新入生に対する支援を目指す大学院生による農学セミナーを前期に3回、後期に3回実施した。また、昨年同様に5月にバスをチャーターして1年次生を阿見キャンパスに呼び懇談会等を行った。10月の鋤耕祭（学部祭）にも1年次生を阿見キャンパスに呼んで履修ガイダンスや研究室見学会を行った。常時開設の何でも相談室は学生の間で評判がよく、相談件数以上の成果をあげている。オフィスアワー等の支援体制も、電子メール利用の連絡・相談等を含めて良好に機能している。

<p>【119】 ④ F Dの改善と一層の充実を図り、F Dによって新採用教員と現職教員の研修を推進する。</p>	<p>【119-1】 ○ F Dの改善と一層の充実を図り、F Dによって新採用教員と現職教員の研修を推進する。</p> <hr/> <p>【119-2】 ○ 平成20年度に引きつづき、対象科目を広げて、教員相互によるピアレビューを実施し、教育の質の向上を図る。</p>	<p>【119-1】 【119-2】 ・6月に新任教職員研修会を2日間開催した。この研修会は、本学の新任教職員に対し、国立大学法人の諸制度、本学の概要及び当面の諸課題等を研修し、本学の運営について理解を深めることを目的としたもので、新任教員は、23名が参加した。研修の内容は、「学長講話」から始まり、各担当理事等から「大学改革の方向性と学術面の課題」、「高等教育の課題」、「公的研究費の不正防止について」、「国立大学法人の財務制度」、「本学における大学評価および教員評価の状況」、「ハラスメントの防止について」、「本学の就業規則等について」のテーマで実施した。なお、研修会の終了に当たっては、参加者からの意見、要望、感想等を求めるアンケートを実施し、次回開催の参考にすることにした。</p> <p>・人文学部では、21年度の新たな試みとして、本学の他の部局におけるFDの状況を参照し、ニーズの把握ないし発掘に役立てた。また、昨年度と同様に、12月から1月にかけて開催されたコース別FD研究会で出されたニーズについて、年度末にカリキュラム・FD委員会で取りまとめた。</p> <p>・教育学部では、次の内容でFD研修会を開催した（参加者30名）。 ① 教育学部学生の教員採用試験面接指導を通して感じていること。 ② 教室による教員採用試験対策の実施状況。 このFDは、授業改善の様々な方法論に関するこれまでのFDを受けて、第1期の最終年度で教育学部の最終課題というべき教員採用率の向上のために、教員が授業等の中でどのような活動・意識が重要となるかについての確認ができた。また、「ことばの力実践演習」と「総合演習」の担当者FD研修会及び教科教育教科専門連携融合科目に関するFD研修会を2月に開催した。 ・教育学部の公開授業週間は、昨年度に引き続き、前期（33科目）・後期（22科目）の2度にわたって実施した（前期：7月6～17日、後期：11月6～20日）。 ・「教職実践演習」については、教務委員会によるシラバス案をもとに教員会議で検討し、教員全体に対して意識を広めることができた。</p> <p>・理学部では、20年とは科目を変えて、例年通りピアレビューを実施した。ピアレビューの結果は、コースFDにおいて教員全員で検討し、問題点を洗い出した。また、外部アドバーザー会議でも結果を紹介して委員からの意見を聞いたことが、授業の改善に極めて役にたった。 「組織改革と意識改革-評価とPDCA-」と題して、NPO法人茨城経営品質協議会代表理事鬼沢氏を招いて、教員、事務職員合同のF D/SD研修会を実施し、教員、職員が連携して質の高い教育活動の展開法について検討し、意識の改革に役立った。</p> <p>・工学部では、FD研修会への非常勤講師招聘旅費を確保できたため、旅費を支給できるようになった。これにより外部の非常勤教員もFD研修会に参加できるようになり、FD研修会をさらに充実かつ推進することができるようになった。年末に工学部全体のFD研修会が外部の講師も招いて実施され、教育に関する意見交換も行われ、教育の質向上に向けた進展があった。</p> <p>・農学部では、中期計画委員会の中のFD委員会を中心に今年度のFD実施計画を策定した。第1回目は7月に「バイオセーフティ・バイオセキュリティの考え方と実践」（参加者数37名）、第2回目は9月に「メンタルヘルスケアについて」（参加者数33名）、第3回目は10月に「社会企業活動にみられる最近の学生気質、講義事例からの考察-学生のための表現力向上について-」（参加者数25名）の課題で実施した。これらは、教員の教育研究活動に効果をあげている。さらに2月に、「学生の勉学意欲の向上を目指して」及び「初年次からの食のリスク管理教育プログラム」、3月に「茨城大学農学部1年次生に対しての全員面談実施報告会」の課題でFD研修会を実施した。</p>
<p>【120】</p>	<p>【120】</p>	<p>【120】</p>

⑤ 分野間で授業内容の調整を行うためのシステムを作り、科目間の統一性の確保や学際的テーマに対応できる柔軟な教育体制を整える。

○ 引き続き、学際的テーマなどに対応できる柔軟な教育体制の整備に向けて、分野間や科目間で授業内容の調整を行うための仕組みを整える。

・人文学部では、21年度は特にコース別FD研究会において事例の検討や問題点の摘出を求めた。学部共通科目の英語及び英語以外の外国語、インターンシップ、地域連携論、博物館学の開講と授業運営をより安定化させるため、教務委員会のもとに新たに学部共通科目運営小委員会を設置した。教務委員会では各学部共通科目の担当委員を決めて学部共通科目の運営体制を整備した。

・教育学部では、平成22年度シラバス作成に当たって、「教職実践演習」については教職担当者と教科教育担当者及び教科専門の担当者が連携して授業を構築した。それをもとに学生が、履修科目について毎年度記入し、教員が確認を行いながら教職科目の記録を積み重ねていく「履修カルテ」を設計し、平成22年度からの使用に備えた。

・留学生センターでは、人文学部及び教育学部学生対象の「外国語としての日本語基礎コース」が今年度初めての修了者を出すことができた(修了者8名)。また、「日本語教育プログラム」と名称を改め、「日本語教育プログラム規定」を制定し、修了書の授与等に向けての整備を行った。このコースの必修科目の履修者は「日本語教育概論」24名、「日本語教授法Ⅰ」14名、「日本語教授法Ⅱ」10名、「日本語教授法演習」8名であった。履修者は昨年度より増えていることから、学生の認知度は高まったといえる。

【121】
⑥ TA制度による、学習指導体制の強化を図るとともに、TAの配備の仕方や活用の改善を行う。

【121】
○ 教育学部は、改訂された実施計画書・実施報告書および新たな配備方針のもとでTA制度を運用する。

【121】
・教育学部では、TAを学生の学力向上に結び付けること、負担が過度にならないことを目的として改定された実施計画書・実施報告書及び新たな配備方針のもとでTA制度を運用した。具体的には以下の方針とした。①TAの活用は、自らが主指導教員あるいは副指導教員となっている大学院学生を、自らの学部あるいは大学院の授業において活用することを原則とする。使用申請に際しては、当該大学院生の指導教員がとりまとめる。②TAを活用する学部あるいは大学院の授業は、実験、実習、演習を原則とする。③一人の学生がTAとなるのは1つの授業であることを原則とする。④指導教員との打合せを定期的に行うこととする。平成21年度のTA採用者は52名であった。

・大学教育センターでは、21年度より、教養科目の多人数クラス(150名以上)向けにTAの活用を始め、ガイダンスから募集、実施、報告書の提出までの手順を確立し、それに沿って実施した。該当科目は前学期6クラス、後学期2クラスであり、TAはそれぞれの授業に1名ずつ配置した。科目は分野別教養科目、分野別基礎科目、総合科目に渡った。実施報告書から、多人数クラスTAの活用は、担当教員の教育補助として有効に機能していることが確かめられた。平成21年度のTA採用者は65名であった。

・人文学部では、「教員TA採用計画申請書」を教務委員長と事務担当者間でチェックし、TA申請のチェック体制が確立した。大学教育センターにおけるTA採用基準を比較し、人文学部のTA採用基準が適切であることを確認した。平成21年度のTA採用者は23名であった。

・理学部では、TA活用法の改善について検討し、実験、演習、学習指導を中心にTAを配置する方針を決め、学習指導体制の強化を図った。科目ごとにTA時間の必要度調査を行い、その結果に基づいて配分案を作成した。1年次の基礎科目については、殆どの科目にTAが配置され、学生の理解度を高める効果を発揮した。各授業に貼り付けられるTAの他に、学習相談室を分野ごとに開設して、授業時間に囚われずに基礎科目の理解のための相談が受けられるようになった。学習相談室を利用した学生からは、良い評価を受けている。TA謝金の制約から、週1日教時間の学習相談室開設とならざるを得ないが、学習相談室を訪れた学生は、TAと個人的に約束をとって、相談日以外にも相談を受けている。TAの配分は低学年基礎教育に重点がおかれている。「TA結果報告書」により、TA活用状況が点検できる。平成21年度のTA採用者は110名であった。

		<ul style="list-style-type: none"> ・工学部では、249名のTAを活用し、学習指導体制の強化を図った。 ・農学部では、農学研究科の70名をTAとして採用した。TA採用者に対する研修会を、5月と6月それぞれに開催し、TAのあり方、注意事項等について説明を行った。TA主指導教員にも研修会実施報告書を配布し、TAへの適切な指導と任用を依頼した。TAにはTA終了後に業務内容報告書を提出してもらった。このTA研修会において、TAとはどのようなものなのか、その目的、心得などについて新たに資料を作成して丁寧に解説し、事故保険などのことについても説明した。研修会の内容は各教員にも配布され、意味のある研修会になったと評価している。TA終了後提出の業務内容報告書はTA自身が内容と成果を記入することから、TAの有効活用を図る上で有効であった。
<p>【122】 「教育設備等の活用・整備」 ⑦ 授業の電子化等を図り、情報メディアを利用した多様な授業形態に対応する。</p>	<p>【122】 「教育設備等の活用・整備」 ○ 引き続き新カリキュラムの体系に則して、インターネットや情報機器を活用した講義、演習、実習等を効果的に配置する。</p>	<p>【122】【123】【124】【125】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人文学部では、学生のスキル状況把握については、4月に新入生を対象に質問紙調査を実施し、情報教育スタンダード（教養編）の検証分析を行った。この分析結果に基づき、情報授業のクラス分けを行った。初心者クラスなど、対象者のレベルに応じた効果的な授業を行うことができた。講義・演習などの教育効果を高めるために、学習管理システムRENANDI（レナンディ）を活用している教員の実践報告を行い、RENANDI（レナンディ）利活用の拡大を図った。 ・教育学部では、建物改修とともに施設面での充実が図られた。各種情報メディアを利用した授業について調査した。その結果、学習管理システムRENANDI（レナンディ）を授業に利用する教員が増加していること、情報メディア利用を想定した特別室（B棟202）を利用している授業も複数存在していることがわかった。それらをもとに3月に「授業のあり方」に関するFDを行った。 ・理学部では、すべての講義室に、プロジェクター設備とインターネット端末を備えてある。大教室には音響設備とバーチャルキャンパスシステム（TV会議システム）がある。各授業科目のビデオ教材や、映像資料の整備も、授業担当教員の努力と工夫により、充実してきている。
<p>【123】 ⑧ バーチャルキャンパスシステムやインターネットを改善整備し、3キャンパス間での効果的な教育の実施を図る。</p>	<p>【123】 ○ バーチャルキャンパスシステム（VCS）の改善整備を進め、3キャンパス間での教育等の充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教育センターでは、全科目に関して、Live Campusから学習管理システムRENANDIへのデータ移入作業を自動化するソフトを開発・改良した。老朽化したRENANDIのサーバを更新するとともにバックアップ機能も強化した。3地区でRENANDI講習会を合計4回開催した。工学部・農学部と協力して技術者用e-ラーニングソフトを導入した。総合英語で懸案であったA1c学外アクセス問題について、セキュリティ対策をIT基盤センターと協力して進めることとなり、平成22年度から学外アクセスが可能となることとなった。3地区を対象に総合英語の教材用図書を充実した。
<p>【124】 ⑨ 教材や学習指導法等に関する開発を支援するシステムを構築する。</p>	<p>【124】 ○ 教員のEラーニングシステム（学習管理システム）を用いた教材開発を拡大する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平成21年度においても各キャンパス及び各研究教育センターにVCS（TV会議システム）を導入し、茨城大学のバーチャルネットワークを整備充実した。フロンティア応用原子科学研究センター（東海村）、広域水圏環境科学教育研究センター（潮来市）、宇宙科学教育研究センター（高萩市）、人文学部LL教室（水戸市）、工学部S2棟2階大学院講義室（日立市）にTV会議システムを設置した。 ・IT基盤センターでは、5月に対外接続を1Gbpsとする工事を完了して運用に供した。TV会議システムによる東京大学等の遠隔講義「サステイナビリティ学最前線」を録画するため、録画システムに対する標準外通信ポートを設定するとともに、その実施を支援した。 ・全学研究科を対象とした大学院共通科目において、バーチャルキャンパスシステム（TV会議システム）を活用し、3キャンパスを同時に結び7科目の授業を開講した。 ・21年度のTV会議システムの利用状況は、264回（内、授業利用194回）と昨年度の123回（内、授業利用68件）の利用を大幅に上回った。新しくシステムを整備したこと、マニュアル類の整備により機器の操作が容易になったこと、メンテナンス及びネットワークの整備により安定した運用が可能となったことなどにより、システムの認知度も上がり授業や会議等の利用率向上につながった。

<p>【125】 ⑩ 図書館における情報リテラシー教育の充実・強化を図る。</p>	<p>【125】 ○ 「情報リテラシー」を効果的に実施する。</p>	<p>・図書館における情報リテラシー教育の充実・強化を図るために以下を実施した。 (1) 実施体制の整備：図書館利用ガイダンスが充実している明治大学での実地調査をはじめ、実施に向けての課題を探るとともに、分館も含めた常勤職員全員による「学術情報リテラシー・ワーキンググループ」を設置した。 (2) 授業内容・教材の企画立案：授業担当教員である図書館副館長(教育学部教授)の指導を得ながら、授業時間ごとの担当グループにより授業内容の検討を行った。授業にはパワーポイントを使うこととし、パワーポイントによる教材を作成した。 (3) 授業実施と成績評価：8月の2日間に集中講義を実施した。全ての授業について、図書館副館長の指導のもとに、図書館職員が講師役とサポート役を分担した。従来、図書館のスキル講習は具体的なトピック別に行われるのが一般的であるため、受講者が得られる知識やスキルも断片的なものに終わる傾向があった。今回は必要なスキルを集成し、全体的な文脈に基づいて整理したことにより、統合的なリテラシー能力の講義とすることができた。また、受講生の大半が本学学部出身者であるにもかかわらず、アンケートの結果、この授業で始めて知った情報・知識が少なくないこともわかった。結果的に、授業評価としては比較的高い満足度を示している。</p>
<p>【126】 〔連携した教育〕 ⑪ 他大学との単位互換協定の締結や放送大学の活用等を進め、多様な履修機会の提供を行う。</p>	<p>【126】 〔連携した教育〕 ○ 他大学との単位互換や放送大学の活用等を進め、多様な履修機会の提供を行う。</p>	<p>【126】 ・平成21年度は、茨城キリスト教大学へ5名(5科目各2単位；延べ単位数18)、放送大学へ1名(3科目各2単位；延べ単位数6)の学生を派遣している。茨城工業高等専門学校から工学部へ31名(14科目各2単位；延べ単位数72)の学生を受け入れている。 ・人文学部は、常磐大学と連携する教育研究活動を開始した。具体的には、双方の教員が講師となり共同授業「観光学入門」を開講した。受講生は、平成20年度113名、平成21年度150名であった。 ・理学部では、平成20年度末に関東甲信越5大学理学部単位互換協定(埼玉大学、静岡大学、富山大学、信州大学、茨城大学)を締結し、単位互換による授業開講について協議を進め、平成22年度から5大学間で8科目を開講することとした。 ・農学部では、近接する茨城県立医療大学と連携する教育研究活動(園芸療法)に学生を積極的に参画させた(5名の学生が4回/月、10ヶ月間参加)。また、阿見町及び地域の住民・農家とともに実施する連携事業に学生を参加させる耕作放棄地再生や学校給食の地産地消の取り組みを行い、延べ28名の学生を参加させることができた。このような活動により、学外との交流・連携による教育活動を継続的・着実に推進した。</p>
<p>【127】 ⑫ 大学の授業を高校生に受講させる機会を設けるなど、高大連携教育を推進する。</p>	<p>【127】 ○ 引き続き、高校生を対象とした公開講座、出張(出前)授業等「高大連携教育」を推進する。</p>	<p>【127】 ・これまで実施してきている高校生向けの「公開授業」、「公開講座」、「出前授業」を継続して実施するとともに、今年度は新たに茨城県教育委員会企画の①「未来の科学者養成プロジェクト」(理系大学進学を希望している高校2年生を対象として、大学の研究室における科学体験教室を開講する事業)と、②「いばらき学力向上サポートプラン」(本学学生が県立高校に出向き授業のサポートをする事業)の2事業を実施した。①の実績として、12研究室で32名の高校生を受け入れた。②の実績として、県内8高校に12名の学生を派遣した。 ・21年度の高専模範(出前)授業は、県外の高専も含めて延べ57校(昨年度72校)に、延べ154名(昨年度167名)の教員を派遣し、延べ6,848名が受講した。また、茨城大学を会場とする高専模範(出前)授業は、6校に延べ15名の教員を派遣し、延べ1,040名が受講した。さらに、高校生向けの公開講座を1本開講し、高校生が受講した公開授業は10本あり、合わせて71名(昨年度77名)が受講した。 ・教育学部では、教員へ出張(出前)授業への参加を促した結果、平成21年度においては、登録教員数76名(前年67名)、登録講義数105(前年99)と増加した。また、今後の模範授業における改善点を探る目的で、出前授業を実施した教員に「模</p>

		<p>擬授業（出前授業）実施報告書」の提出依頼を19年度から実施している。21年度は、提供授業数49に対し、46.9%を回収した。</p> <p>・農学部では、高校生を対象とした公開授業1本（参加者4名）、出前授業47本（参加者743名）を開講した。</p>
<p>【128】 [教育の質の改善] ⑬ 学生による授業評価と教員による教育評価を総合的に分析して、改善策を立案・実施するシステムを構築する。</p>	<p>【128】 [教育の質の改善] ○ 授業アンケート及び調査結果の教員へのフィードバックと自己点検評価を継続して実施し、授業内容および方法の改善を図る。</p>	<p>【128】 ・人文学部では、次の項目を実施した。 ① 個別授業アンケートの実施（各学期末）、②点検改善票の記入（①の結果提示後）、③コース別FD研究会（12月～1月）、④学科レベルのFD研究会（両学科とも1月、学部レベルのFD研究会については2月）、⑤ガイドラインの点検、⑥学生の単位取得、卒業研究の水準、進路状況等の調査・分析。</p> <p>・教育学部では、教養科目のほか、前期116件、後期109件の専門科目について授業アンケートを実施し、各教員による自己点検評価を行った。これらに対する自己評価は3月にまとめ、各教員に分析結果をフィードバックした。授業内容に関しては、12月から1月にかけて新規科目や前年度より大幅な変更があったシラバスを中心にシラバスチェックを行う形で授業の点検評価を行った。「ことばの力実践演習」に関しては、担当者FDを3月に行った。「総合演習」に関しては、4年一貫のコミュニケーション能力育成のためのカリキュラムに位置づいているかということを中心自己評価記入シートによって、アンケートを行った。また、「ことばの力実践演習」との連携を考えて、上記の日程で重ねる形で担当者FDを行った。「教職実践演習」については、シラバスを策定するために教務委員会で原案を作成し、さらに教員会議で複数回にわたって意見を聴取したうえで、シラバスを策定し、文部科学省に届け出た。また、教職実践演習に係る「履修カルテ」についても同様のプロセスを経て策定し、4月からの実施に向けて準備が整った。授業公開については継続的に全教員に呼びかけて前期・後期ともに予定通り実施した（55授業）。</p> <p>・理学部では、各コースFDで年度毎に授業科目を絞り、学生による授業アンケート及び教員による教育評価に基づき、授業結果を評価し、授業改善を行った。さらに、その結果を学部のまとめのFDで報告し、総合的検討を行った。学生による授業評価と教員による教育評価を総合的に分析して、改善策の立案をし、実施した。</p> <p>・工学部では、昨年度と同様に各教員に対して授業評価アンケートを実施した。教育改善委員会では、昨年同様に各学科の教育点検結果報告書の点検を行い、点検の結果を各学科にフィードバックした。昨年同様、前期の授業に関する学生による授業評価アンケートの実施率は90%を超えている。</p> <p>・農学部では、21年度も授業ごとに授業アンケートを実施し、取りまとめた結果を各教員に配布した。これに基づき、各教員から授業評価報告書が提出された。後期においても同様に行い、授業での問題点・改善策を検討した。各教員に対して教育活動を含めた教育改善点検評価書（業務点検評価に準ずる）の作成を依頼し、9月にとりまとめた。各教員から提出された授業評価報告書と併せて、教育改善の資料としている。</p>
<p>【129】 ○大学院課程 [教育実施体制] ① 専攻間で共通の授業内容の調整を行うためのシステムを作り、学際的テーマに対応できる柔軟な教育体制を整える。</p>	<p>【129】 ○大学院課程 [教育実施体制] ○ 大学院教育部を組織し、大学院共通科目を実施する。</p>	<p>【129】 ・大学院教育部は、平成21年度から開始された大学院共通科目の開講に当たっての各研究科との連絡調整、履修案内、シラバス等の作成などを行う組織として、20年11月に委員会レベルの組織として設置された。平成21年度の大学院共通科目については、年度計画【73】【102】の「計画の進捗状況」を参照。</p> <p>・教育学研究科は、年度計画【78】、【107-2】の「計画の進捗状況」参照</p> <p>・理工学研究科理学系では、昨年度に引き続き、各系で「授業の系統図」の再確認</p>

		<p>が行われ、他系から見てもわかりやすいものが用意された。 理工学研究科工学系は、年度計画【106】の「計画の進捗状況」参照</p>
<p>【130】 ② R A制度の活用により、第一線の研究活動に触れさせ、研究教育を効果的に行う。</p>	<p>【130】 ○ R A制度の有効性（研究推進、教育効果）について点検し、第2期での改善を図る。</p>	<p>【130】 21年度は理工学研究科博士後期課程大学院生33名をR A採用し、プロジェクト研究を押し進めた。同研究科理学系分野では、学術論文誌に2名の論文が掲載され、また、2名の学生が学位を取得するなどの成果をあげた。R A実績報告書に基づき、制度の妥当性を検討した。本制度はうまく機能していると判断した。</p>
<p>【131】 【教育設備等の活用・整備】 ③ 先端科学技術に関する教育・研究支援拠点を整備し、高度の各種分析機器を効率的に管理・運用し、共同利用の推進と測定サービス等の充実に努める。</p>	<p>【131】 【教育設備等の活用・整備】 ○ 先端科学技術に関する教育・研究支援拠点を整備し、高度の各種分析機器を効率的に管理・運用し、共同利用の推進と測定サービス等の充実に努める。</p>	<p>【131】 ・機器分析センターでは、以下の設備を更新し、共同利用測定サービスを充実させた。 (1) 平成21年度概算要求特別教育研究経費により「多元素機能性分子精密構造解析システム」を設置し、核磁気共鳴装置の更新を図った。 (2) 平成21年度補正予算国立大学法人施設整備費補助金（最先端設備・附属病院設備）により「高分解能質量分析システム」が設置された。このシステムは、磁場型高分解能質量分析計と四重極型質量分析計で構成されている。 (3) 平成21年度補正予算国立大学法人施設整備費補助金（基盤的設備）により「環境・ナノテク・バイオ対応型新質量分析システム」が設置された。このシステムは、「マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析計」と「誘導結合プラズマ質量分析計と誘導結合プラズマ発光分光分析装置」で構成されている。 (4) 依頼分析、機器の利用講習、技術相談を実施した。 (5) 平成19年度から実施している北関東4大学（茨城、宇都宮、埼玉、群馬）間の分析機器相互利用により、埼玉大学から本学に依頼があった元素分析の依頼測定36件を実施した。また、本学からは宇都宮大学の質量分析装置の利用が7件あった。</p> <p>・遺伝子実験施設では、DNAシーケンズの受託分析を行った（理学部、工学部を合わせて296サンプル）。バイオ教育については、小学生親子、高校生、一般向け実験講座を6回実施した。また、高校及び学内学生実験向けにバイオ実験器具レンタルサポートを計10数回実施した。</p> <p>・フロンティア応用原子科学研究センターでは、設立2年目を迎えた平成21年度は、新たに「研究部門」に専任教員2名を配置した。また、タンパク質X線結晶構造解析用X線回折装置、嫌気ストップフロー分光光度計を設置した。平成22年3月には、東京大学物性研究所と連携協力協定を締結し、原子炉中性子源や大強度パルス中性子源を利用した物質科学発展の基盤を整備した。</p>
<p>【132】 【連携した教育】 ④ 魅力あるカリキュラムを構築するため、近隣大学及び研究機関との連携を推進し、単位互換制度、連合大学院制度、連携大学院制度の積極的利用を図る。</p>	<p>【132】 【連携した教育】 ○ 近隣大学及び研究機関との連携を引き続き推進し、カリキュラムの内容充実を図る。</p>	<p>【132】 ○理工学研究科の状況 ・近隣企業や研究所（産業技術総合研究所や日本原子力研究開発機構など）の研究者を迎えてイブニングセミナー（先端科学トピックス）を開催し、多数の大学院生が聴講（21年度理工学研究科全体で延べ3,098名）した。実学的産業特論では、近隣企業の経営者や技術者と本学の大学院生が共同で作業にあたる授業を実施した。 ・4大学院連携先進創生情報学教育研究プログラムでは、「社会創生情報学コース」を開始した。21年度は本プログラム「人間創生情報学コース」で初の修了生を輩出した（全体で修了者6名、うち本学から4名）。</p> <p>○農学研究科における状況 ・サステイナビリティ学教育プログラムの開始に伴い、東京大学との単位互換制度を活用し、双方の学生が授業を受け、単位の認定が行われた。（平成21年度実績：双方各1名）。</p> <p>○連携大学院の状況 理工学研究科、農学研究科の連携大学院の状況については年度計画【101】の「計</p>

		<p>画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【133】 ⑤ 茨城大学・宇都宮大学・東京農工大学で構成される連合農学研究科による教育研究体制を継続し、将来のあり方についても積極的に検討する。</p>	<p>【133】 ○ 平成20年度に引き続き、次期中期目標・中期計画に向けての3国立大学法人間連合農学研究科の連携、協力をさらに強化する。</p>	<p>【133】 ・連合農学研究科での教育研究を実施し、代議員会等、通常の連携業務を計画通りに実施し、連携協力を円滑に行った。海外フィールド実習派遣や海外短期集中コースを含む大学院教育改革支援プログラムを実施した。連合ゼミナールや専門科目「特論」等の講義において、多地点制御遠隔講義システムを利用したリアルタイム同時双方向講義を実施した。21年度の実績は、連合ゼミナールが12講座、共通ゼミナールが37講座、専門分野科目特別講義が37講座開催された。主幹大学（東京農工大学）に、キャリアパス支援センターの発展型としてアグロイノベーション高度人材養成センターが立ち上がり、海外派遣を含むインターンシップの高度な研修が行われた。21年度には、20名の定員に対し、15名（本学で主指導の学生は2名）のインターンシップ参加者があり、また、9月にはアグロイノベーション戦略研究ワークショップが開催された（全国12機関に所属する博士後期課程在学学生およびポストドクター20名（本学で主指導の学生は3名）が参加）。</p>
<p>【134】 ⑥ 社会人学生のための指導体制を整備する。</p>	<p>【134】 ○ 次期中期目標・計画期間に予定されている教育学研究科の改革に向け、14条適用・休職制度を活用した現職教員・社会人大学院生に対する教育方法、研究指導方法の改善案を策定する。</p>	<p>【134】 ・教育学研究科では、大学院設置基準14条適用、休職制度を活用した現職教員、社会人大学院生に対する研究指導方法の改善案として、①研究指導計画書を年度当初に策定し、それに基づいて指導を行うこと。②入学時に指導教員による面接を行い、教育学部出身でない場合には、そのことを意識した指導や現場に生きる指導を行うこと。③前期及び後期開始時、年度末に学習相談を行うこと。④研究会や学会への参加を奨励すること。を定め実施した。</p>
<p>【135】 [教育の質の改善] ⑦ 授業の在り方や研究指導、学位認定などについて点検を行うシステムを充実し、教育の質の改善を図る。</p>	<p>【135】 [教育の質の改善] ○ 学生の研究進捗状況を専攻で把握することの強化に努めるとともに、その支援体制について、引き続き検討し改善する。</p>	<p>【135】 ・人文科学研究科では、授業アンケートの実施・集計、教育研究指導届の点検、FD研究会などを通じて、大学院の授業の在り方や研究指導、学位認定などについて点検を行った。 ・教育学研究科は、継続的に①教育学研究科の共通科目3科目（学校教育基礎論、学校教育総合研究、大学院GP）については個別にアンケート②授業全体及び研究指導についてのアンケート③アンケートに基づいたFDを実施し、授業と研究指導の改善を検討した。 ・理工学研究科理学系では、改組における理学専攻各系での講義内容・形態並びに成績評価法の調査、授業アンケート及びFDを実施し、1)より丁寧なシラバス、2)系による必修科目単位数のばらつき、3)成績に対する考え方等について、各系間の調整を必要とすることが分かった。 ・理工学研究科工学系では、各専攻から教育点検報告書を教育改善委員会でチェックした。各教員の裁量に任せられている特別研究、特別演習、特別実験等の報告に関しては不十分であったため、特別研究、特別演習、特別実験等のシラバス・実施方法・成績評価の具体化について教育改善委員会で決定し、各専攻で実施した。</p>

II 教育研究等の質の向上の状況

- (1) 教育に関する目標
④ 学生への支援に関する目標

<p>中期目標</p>	<p>〔相談・助言・支援〕</p> <p>① 多様な学生の要請に対応し、学生に対する学習・生活・相談等の支援・サービス機能の向上と、指導体制の整備を図り、組織的・総合的な学生支援を推進するとともに、点検評価を行ってその改善に努める。</p> <p>② 学生への経済的支援を推進する。</p> <p>③ 学生の身体的・精神的健康の維持と増進を図る。</p> <p>④ キャンパス環境の向上を図る。</p> <p>⑤ 課外活動への支援を強化する。</p> <p>〔就職支援〕</p> <p>⑥ 学生の就職支援を推進し、職業観を涵養し、就職意識を啓発する活動を行う。</p> <p>〔留学生・社会人支援〕</p> <p>⑦ 留学生に対する支援制度の充実を図る。</p> <p>⑧ 社会人学生の学習に特別の配慮をし、修学を容易にする方策をとる。</p>
-------------	--

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【136】</p> <p>〔相談・助言・支援〕</p> <p>① 水戸キャンパスには学生サービスのセンターを整備し、日立と阿見キャンパスにはその分室を整備して学生サービスを総合的に行う。学生支援業務の点検評価を行って、学生サービスの改善に資する。</p>	<p>【136-1】</p> <p>〔相談・助言・支援〕</p> <p>○ 学生センターのキャノピー広場、玄関ホール、ライトコートの一層の活用を図るとともに、共通教育棟1号館再整備計画を推進する。</p> <hr/> <p>【136-2】</p> <p>○ 学生生活に関するアンケートを行い、学生のニーズや実態について把握し学生支援の改善・充実に努める。</p>	<p>【136-1】 【136-2】</p> <p>・学生センターの具体的な利用案内として20年度に作成された「茨城大学学生センター利用方法について」を若干修正し、全学部周知するとともに、共通教育棟の電子掲示板等で周知を図った。</p> <p>・共通教育棟1号館再整備計画については、これまでの教員研究室を改修し、学生自習室(80㎡)及び3講義室(日本語中・上級者向け講義室(40㎡)、主に総合英語で使用する講義室40㎡と60㎡)を設置し、平成22年度から使用可能とした。</p> <p>・平成21年度は学生の経済状況に重点を置いた学生生活実態調査(第2回)アンケートを実施した。学生生活実態調査(第1回)のアンケート結果を元に、掲示が主であった学生への連絡や情報の提供を、案件に応じてActive mailや携帯電話を併用して行うこととしたことや、学生生活の案内・問題解決の参考としてこれまで入学時に配布していた「学生便覧(われらの学園)」及び「楽しい学生生活を送るための読んで良かった安全な学生生活マニュアル」等を、学生が必要なときに取りやすいよう随時窓口等に配置するなど改善した。</p> <p>・保健管理センターでは、倫理指針を定め、センターにおける個人情報の取り扱い、健康診断、相談業務で得られた情報の調査・研究への利用に関して、保健管理センター利用者のための個人情報保護、倫理的配慮を尊重することを明確にした。センターでは、自己点検評価に加えて第三者評価を実施した。第三者評価は、2名の外部評価委員による書面審査と現地調査により行われた。第三者評価の総合評価は、予算の範囲内で年度計画を着実に履行できているということであった。特に優れた実績をあげているものとして、学生特殊健康診断の実施、新型インフルエンザ対策、大学生の休退学全国調査があげられた。</p>
<p>【137】</p> <p>② 学生の学習室及び交流室のスペースを充実し、教室・実験室等の環境の整備充実を進め、学習環境の向上を図る。さらに、学生用図書充実するとともに、図書館や学習室等の利用時間を延長する。</p>	<p>【137】</p> <p>○ 平成20年度に引き続き、学習や交流に必要な学生用スペースの確保と環境整備および有効利用を図るとともに、図書館ガイダンスの導入により、図書館の有効利用や学生用図書の充実を図る。</p>	<p>【137】</p> <p>○ 人文学部の状況</p> <p>1. 卒業論文と卒業研究題目のデータベースを整備した。</p> <p>2. 人文図書室の特色となる資料(「日経テレコン21」「法学雑誌DVD」「和漢三才図会CD-ROM」など)を充実し、その利用を促進した。</p> <p>3. 学部資料室の運用規則を定め、資料・文献の配架を始めた。コース資料室への図書の配架を始めた。</p> <p>4. 平成20年度に引き続き、資料目録のデータベース化の準備を始めている。</p> <p>・学生の自主的学習スペース(フリースペース)及びリフレッシュコーナーの利用に関しては、2年生を対象に調査を行った。調査によって、フリースペースの室外</p>

		<p>案内をわかりやすく目立つものにすれば利用促進が図れそうなことが判明した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育学部では、耐震工事により学生の自学・自習できる部屋の配置を行った。専攻の学生のニーズに合わせて専攻会室を整備した。学生が個別に、また、学年や専攻を超えたグループでの様々な活動を行うことができるよう、講義室や学生自習室を整備した。 ・理学部では、大学院生学生室について年度ごとの大学院生学生数の変動に対応して効率的にスペースを使用するための複数領域にまたがったバッファ室の設定を行った。また、学生が他人の視線を気にせずに研究に専念できるよう、廊下からの目隠しカーテンを理論系大学院生研究室に設置した。 ・工学部では、学生が図書館や学習室等を利用できる時間を延長した。IT基盤センターの自由履修室（パソコン室）及び図書館工学部分館の開館時間を8時50分～20時50分から8時30分～21時45分に延長した。図書館工学部分館のトイレ改修を行った。同分館に文庫新書コーナーを開設（当初100冊程度）し、学生用図書の実を充実させた。 ・農学部では、就職支援室にパソコンを整備し、常時就職情報を得るための環境整備を整えた。ゼミナール室にエアコンを整備し、自習環境の整備を図った。長年の懸案であった体育館及び課外活動施設（クラブハウス）の新営工事が行われ、年度内に竣工した。併せて体育館及び課外活動施設周辺の新ゾーニング計画を立てた。 ・大学教育センターでは、共通教育棟1号館に「学生自習室」を新設した。理系科目の履修相談室を週に5日開設し、学習支援を行った。学習管理システムRENANDI及び総合英語ALCのサーバを更新し、機能の拡大・充実を図った。
<p>【138】 ③ 学務情報の総合的管理と利便性の向上のため、学生証のICカード化を図る。</p>	<p>【138】 ○（19年度に達成済みのため、20年度以降の年度計画はなし）</p>	<p>【138】 本年度もICカードを用いて、全学年を対象に健康診断証明書の自動発行を行った。平成21年度の健康診断書の発行部数は6,171枚である。</p>
<p>【139】 ④ 奨学制度を学生へ周知し、各種の奨学金制度の利用を拡大するとともに、勉学意欲の高い学生に対する経済的支援の充実に努める。</p>	<p>【139】 ○ 勉学意欲の高い学生に対する独自の経済的支援の充実に努める。</p>	<p>【139】 奨学金制度の周知については、通常の学内掲示板の他、電子掲示板及びポータルシステムの掲示板により周知した。また、勉学意欲の高い学生に対する経済支援等については、平成22年度実施に向けて中央学生委員会に計画案を提示し検討依頼した。併せて、平成22年度特別事業として優秀学生奨学金による支援についての計画案を検討した。平成21年度の奨学生実績は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独立行政法人日本学生支援機構第1種奨学金：学部1,086人、大学院252人 ・同第2種奨学金（きぼう21プラン奨学金）：学部1,710人、大学院152人 ・地方公共団体奨学金：学部40人、大学院0人 ・各種団体等奨学金：学部17人、大学院4人 <p>①平成18年度から引き続き、勉学意欲の高い学生に対する独自の経済的支援として、寺島薬局育英奨学金の募集を行い、5名募集のところ5名（昨年度は14名）の応募があり、選考の上5名を採用し、奨学金（20万円×5名）を交付した。</p> <p>②平成20年度に新規に設けられた鴨志田邦明奨学金制度を引き続き運用し、家計急変により学業継続が困難となった学生に対して支援を行った（前期15万円×2名、30万円×1名）。</p>
<p>【140】 ⑤ 学生の身体的・精神的健康の維持と増進を図るとともに、精神衛生やセクシュアル・ハラスメントなどに係る相談体制をより充実する。</p>	<p>【140】 ○ 学生の身体的・精神的健康の維持と増進を図るとともに、精神衛生やセクシュアル・ハラスメントなどに係る相談体制を継続する。</p>	<p>【140】 ・「茨大なんでも相談室」を継続的に運営するとともに、相談体制等を充実させるため、水戸地区でのカウンセラーの対応時間を増やした。「茨大なんでも相談室」は、授業の履修相談や生活相談など日常的なものから、専門的知識が求められる精神相談など様々な相談を継続的に受け付けている。インターカーがこれら相談に対応し、学生相談員や保健管理センターの精神科医やカウンセラーに繋いでいる。特</p>

		<p>に慎重な対応が必要であり、かつ時間を要する精神相談に対応するカウンセラーの時間を増やすことができた。学生相談員やインテーカーのスキル向上を図るため、学外で開催された全国学生指導研修会に1名、全国学生相談研修会に2名、学生相談インテーカーセミナーに2名、メンタルヘルス研究協議会に4名、メンタルヘルス研究会に2名を派遣した。</p> <p>・工学部では、カウンセラーが毎週火曜と金曜日に相談に応じ、平成21年度は延べ296名の相談を受けた。学生に「工学部学生生活のカウンセラー」を配布した。</p> <p>・農学部では、カウンセラーの相談回数について、昨年度にあった相談回数増の要望に応え、週2回に増やした（昨年度は月2回・相談者85人）。その結果、1年間で228人の相談を受けた。9月開催のFD研修会で、産業医科大学から講師を招いて「メンタルヘルスケア」について講演してもらい、教職員の学生対応の質的向上を図った（参加者33名）。21年度からスタートした農学部OB教員による「1年次生全員面談」についての報告を兼ねて学生支援に関するFD研修会を2月に開催した（参加者85名）。</p>
<p>【141】 ⑥ キャンパス内バリアフリー化や障害者用施設設備の充実を図り、障害のある学生が利用しやすい環境を整備する。</p>	<p>【141】 ○ 建物の改修工事が行われる場合は、バリアフリー化を推進し、学生のキャンパスライフを向上させる。</p>	<p>【141】 ・身障者対応エレベーターは、総合教育棟（教育学部C棟）、先端材料基礎研究棟（工学部棟W3棟）、先端材料応用研究棟（工学部N3棟）に設置した。 ・多目的トイレは、学生寄宿舍（水哉寮）、総合教育棟（教育学部C棟）、先端材料基礎研究棟（工学部W3棟）、先端材料応用研究棟（工学部N3棟）に設置した。 ・車椅子用スロープは、学生寄宿舍（水哉寮）、先端材料基礎研究棟（工学部W3棟）、先端材料応用研究棟（工学部N3棟）、環境エネルギー研究棟（工学部機械工学科別棟W4棟）に設置した。 ・屋外環境整備として、総合教育棟（教育学部C棟）、先端材料基礎研究棟（工学部W3棟）、環境エネルギー研究棟（工学部機械工学科別棟W4棟）、工学部機械力学（W2棟）、工学部風洞実験室（W5棟）、先端材料応用研究棟（工学部N3棟）及び工学部テニスコートの周辺環境整備を行った。</p>
<p>【142】 ⑦ 各種福利厚生施設の有効な利活用に努め、施設の整備改善を図る。</p>	<p>【142】 ○ 福利厚生施設の利用環境の改善策を具体化させる。</p>	<p>【142】 福利センターでは、休憩時間のくつろぎに供するため、デジタル放送対応テレビに更新、空調機のメンテナンスを行った。大会館では、学生・教職員の利用促進を図るため、使用頻度の高い集会室の会議用テーブル8台を更新、テラス部分に学生談話用テーブル・椅子を10セット設置、談話室内の既設パーテーションを取り外し室内有効スペースを拡大した。</p>
<p>【143】 ⑧ 学生の課外活動を支援・助言し、課外活動の活性化に努力するとともに、課外活動に要する経費・施設の充実、表彰制度等の充実を図る。</p>	<p>【143】 ○ 老朽課外活動設備の改修・更新を進める。</p>	<p>【143】 ・第一グラウンドのバックネット改修及び内野グラウンドの整備工事を実施し、学生にとって快適に利用できる環境を整備した。弓道場のシャッター改修、課外活動共用施設の共用練習室の吸音材張替を実施し、騒音が低減された。 ・20年度改修により、大体育館と小体育館との接続が容易になり、体育器具の運搬や、利用者同士で活動内容に合わせてスムーズに活動場所の交換ができるようになり、活動時間がしっかりと確保できるようになった。小体育館においては音響設備と大型の全身鏡が整い、表現運動が充実した。さらに安全面においても調整会議において問題等があれば報告させて速やかに対処できるようにした。</p> <p>・工学部日立キャンパスでは、ハードコート2面の全面改修と損傷があるフェンスの改修、課外活動施設の屋上防水補修を実施した。</p> <p>・農学部阿見キャンパスでは、長年の懸案であった体育館及び課外活動施設（クラブハウス）の新営工事が行われ、年度内に竣工した。併せて体育館及び課外活動施設周辺の新ゾーニング計画を立てた。</p>

・平成21年度の学生表彰は、学術又は教育の分野で顕著な成果をあげたと認められる者として17団体、課外活動において、文化・芸術の分野で文化の向上発展に顕著な功績をあげたと認められる者又は体育の分野で優秀な成績をあげたと認められる者として12団体、ボランティア活動等により地域社会に多大な貢献をしたと認められる者として6団体、その他の模範とするに足る行為があったと認められる者として5団体の合計40団体（延べ人数で268名、昨年度186名）であった。

【144】

〔就職支援〕

⑨ 就職相談体制の強化、就職先の開拓や情報収集の提供などの就職活動に対する支援を行う。さらにインターンシップ講座や就職ガイダンスの充実を図り、職業観を涵養し、就職意識を啓発する活動を行う。

【144-1】

〔就職支援〕

○ 学部と就職支援センターとの連携強化を前提に、学部の就職支援体制や就職説明会のあり方を抜本的に見直し、組織的効果的な就職支援体制を整備する。

【144-2】

○ 職業観を涵養し就職意識を啓発する授業を継続的に推進する。

【144-1】 【144-2】

○ 学生就職支援センターの状況

・年間を通して専門性を必要とする就職相談があり、これらの就職相談に応じるため、水戸、日立、阿見の3キャンパスに企業において人事担当の経験が豊富な非常勤相談員を各1名ずつ引き続き配置した。

・上記就職相談員では対応できない心の悩み、人生の悩みの相談に対応するため、専門のキャリアカウンセラーを水戸地区に配置した。委託契約(雇用人材協会に依頼)により、数人のキャリアカウンセラーの資格を持つ方に、ローテーションで毎日1～2名体制できてもらっている。なお、心理カウンセラーとは異なる。

・企業向け広報紙「求人のための大学紹介」に教育方針や就職指導方針を整理して掲載するなど、大幅に改訂を図り、企業の人事採用担当者向けにアピールできる内容にした。なお、企業向け広報紙「求人のための大学紹介」は全国及び茨城県内の主な企業3,530社に郵送し、求人開拓を行った。

・学生就職支援センターが開拓する就職先以外に、各学部固有の就職先(学科推薦など)の人的・知的財産がある。学部の就職委員を中心に、これらの就職先を維持すると共に新規開拓することに努めた。学生就職支援センター運営委員会で学部就職開拓用旅費を予算化し、さらに厚生補導特別経費を上乘せして各学部の学生就職支援センター運営委員を通じて就職先開拓の計画実行を依頼した。

・1・2年次生を対象にキャリア教育として就職ガイダンスを実施し、低学年から職業意識の涵養を図った。

・各種就職ガイダンス(水戸地区：35回・参加人数延べ：4,449名、日立地区：25回・参加人数延べ：2,895名、阿見地区：20回・参加人数延べ：628名)、公務員機関等説明会(参加機関：14機関・参加人数延べ：373名)、学内合同企業説明会(参加企業：119社・参加人数延べ：927名)を開催した。また、学外で行われた合同企業説明会へバスツアーを企画し参加した(参加人数延べ：431名(3地区合計))。

・キャリアアドバイザー(1名)のもとで、キャリア教育講座(5回)を企画し開催した(参加者186名)。

・学生就職活動支援システム「茨ダイCareer Navi」は、学外からでもインターネット上で、就職ガイダンスや求人票を閲覧することが可能となっている。このシステムへの登録並びに利活用については、新入生ガイダンスや就職ガイダンス、印刷物等で積極的に学生へ周知を図った。

・就職ガイダンスの大まかなスケジュールを出来るだけ早い時期に公表することに努めた。新年度初めに発行した「なりわい・づくり」(学生就職支援センターニューズレター)に水戸地区の年間計画を掲載したほか、日立地区と阿見地区の学部スケジュールを別紙として準備したほか、各学部及び共通教育棟入り口への立て看板の設置、生協学生食堂テーブル上へのパネル設置、3年生の授業クラスへ学生就職支援センター職員が出向いて授業開始直前に、受講学生にアナウンスしながらチラシを配布した。

・リクルート、毎日コミュニケーションズ、ディスコ等の就職情報専門機関に就職ガイダンスの講師を依頼し、就活におけるインターネット活用術、エントリーシート書き方指導、面接対策など就職活動の具体的取り組みについて説明を行った。これらの説明は、学生が就職活動する際に直結するノウハウについて具体的に説明を求められることが出来、学生に好評であった。

・公務員就職ガイダンス、留学生就職ガイダンス、大学院生に特化した就職ガイダンスについては、フリーで活躍しているキャリアアドバイザー等資格を持った適切な人材を見つけて講演を依頼した。

・NPO法人雇用人材協会と共催でキャリア教育として「就活Switch On Forum」(参加者150名)及び就活サポートとして「就活Switch On Cafe」(参加者40名)を開催し、参加学生から好評を得た。

・本学を取り巻く就職状況、低学年からの職業意識の涵養のためのガイダンス、3年次から本格的に始まる就職活動、就活に関する父兄の関わり方、並びに本学での就職支援について、出来るだけ早期に父兄に理解を深めてもらう必要があるため、入学式後の新入生オリエンテーションで、学生就職支援センター長から新入生並びに列席の保護者に向けて、就職支援及び就活の現況等について説明するとともに、その午後に開催された学部ごとの父兄対象の説明会で、本学の就職状況や最近の雇用状況などの説明を行った。

・「OBからのメッセージ」と題して、大手企業の人事担当者である卒業生を講師に迎え、「茨大だからこそ求める人材」と題する講演会を開催（テレビ会議システムを利用して工学部・農学部にも配信）した。学生の就活サークルとの共催により、卒業生5名を講師に迎え、グループディスカッションを開催した。NP法人雇用人材協会との共催により、「就活Switch On Forum 2009」の第2部に卒業生を含めた社会人を講師に招いて、トークセッションを開催した。「教育研究高度化のための支援体制整備事業」経費で開催した「キャリア教育講座」において、全学年を対象に「OG・OB報告会」と題し、20代から30代の卒業生3名を講師に迎え、働く側からの現状報告と在学生との討論会を開催した。

・5月上旬に「職務適性テスト」を実施した。受講者数が440名と大変多く、一昨年に比べ4倍の受講者数となった。10月～12月に開催した「就活Switch On Cafe」（全7回）のセミナーの中で、職務適性検査を実施した。低学年からの職業適性検査などの受験が可能となる方向で検討し、対象学年の見直しを図った。また、学生就職活動支援システム「茨ダイCareer Navi」等により、適性検査の受験に向けた対策講座への参加を訴えた。職業適性検査や、作業能力検査、公務員試験対策講座などの受験が学年を問わず可能となっている。

○人文学部の状況

・学生が「就活力」をつける支援として、人文図書室の一角に「就活情報コーナー」（仮称）を開設することとした（平成22年4月利用開始）。パソコン3台を設置し、就活支援DVDや、NHKや民放などの「仕事関連」テレビ番組の録画を常時視聴できるようにする。利用開始時点で仕事の紹介、働くということの理解を助ける番組、経済・雇用動向を紹介する番組等、約500タイトルが用意され、漸次新たな録画番組を追加することになっている。

・学生就職支援センターとの連携については、同センターによるガイダンス等の就活情報を学部内随所にきめ細かく掲示し、また、必要に応じて指導教員などを通じて周知した。

・公務員講座担当者は、人文学部社会科学科所属の教員であるが、公務員講座の開講は全学的な就職支援の事業として実施されている。平成21年度に開講した公務員講座は4講座で、全て分野別教養科目（社会の分野）である。講座名と履修者数は下記のとおりである。「社会と法 行政救済法」（前期開講）（人文学部28名、教育学部15名、理学部17名、工学部9名、農学部3名、計72名）、「日本国憲法 現代憲法入門」（前期開講）（人文学部24名、理学部13名、工学部29名、農学部7名、計73名）、「社会と経済 ミクロ経済学入門」（前期開講）（人文学部24名、教育学部5名、理学部16名、工学部22名、計67名）、「社会と経済 マクロ経済学」（前期開講）（人文学部27名、教育学部20名、理学部5名、工学部12名、農学部1名、計65名）。しかし、開講されている公務員講座について、開講本数、開講年次、開講形態、そして講座運営の組織などの様々な改善すべき課題も明らかとなっている。これらの諸問題を検討し、次年度以降に改善策が実行できるように、学科担当者からの提案を踏まえてまとめた。

○教育学部の状況

教育学部の「就職相談室」では、これまで教員採用試験の2次試験対策の面接指導を行ってきたが、受講希望者の学生が急増し、運用の改善が求められていた。そこで平成22年度は、6月から8月にかけて非常勤講師を例年よりも6名まで増やし、新たに面接室を臨時に2カ所増設して、学生への周知も徹底し、面接・作文の指導を丁寧に行った。それによって利用度が高まり、学生の教職に対する意識の高まりとともに目標に向けての努力がみられた。これに加え、教室単位での適切な指導、教員のボランティア的指導もあって、今年度の教員採用試験合格者は110名（昨年度86名）で昨年よりも24名増加した。

○理学部の状況

就職ガイダンスを3回行った。①5月に「茨城県職員採用上級職試験説明会」(参加学生23名)、②6月に「(株)リクルートによる講演と学生2名の体験談」(参加学生33名)、③11月に「(株)毎日コミュニケーションズによる講演と学生2名の体験談」である。また、学生就職支援センターと連携し、1)同センターの企業説明会に企業のリストを提供した。2)大学院生を対象とした就職ガイダンスを2回(9月、2月)開催した。

○工学部における状況

27回(昨年度23回)にわたり3年生及び大学院1年生を対象として外部講師及び就職指導教員による就職ガイダンスを行った。基本的事項を説明するガイダンス(「就職の手引き活用法」及び「エントリーシート対策」)については、それぞれ2回ずつ実施し、学生の参加機会を増やした。なお、5月に「茨がiCareer Navi(就職の手引き)活用法について」(株)ディスコ(就職情報会社)の担当者から説明願ひ、学生182名が参加した。また、27回の就職ガイダンスには、昨年よりも多い3,021名の学生が参加した。

○農学部における状況

就職支援室が中心になって就職ガイダンスや就職情報を提供した。今年度は教学支援検討WGが、就職支援体制の強化を図るために学務係に就職相談窓口を設け、メールを介して就職情報の配信及び就職活動等に関する相談を実施している。就職ガイダンス・会社説明会は23回実施し、延べ641名(大学院生を含む)の参加があった。就職相談は、毎週火曜日の13時～17時に行い、81名(大学院生10名含)の相談に応じた。このほか、東京ビッグサイトで行われた毎日就職EXPOに大学院生を含めて延べ65名(大学院生8名含)が参加した(大学がバスをチャーター)。

○平成21年度に開講した就職意識を啓発する授業科目は以下のとおり。

- ・平成18年度から教養科目の中にキャリア教育に関する総合科目として、前期と後期に各1本ずつ開講している。前期は、労働問題に詳しい教育学部の専任教員が「キャリア形成と自己実現(1)」を担当した(受講者数15名)、後期は、非常勤講師によるオムニバス形式の「キャリア形成と自己実現(2)」を開講した(受講者数12名)。
- ・人文学部：インターンシップ(受講者数：52名)、地域連携論Ⅰ(受講者数：58名)、地域連携論Ⅱ(受講者数：111名)
- ・教育学部：教師のキャリアデザイン(受講者数：48名)、インターンシップ(受講者数：4名)、教師の資質と教職設計A(受講者数：46名)、教師の資質と教職設計B(受講者数：193名)、教職のためのパブリックスピーキング(受講者数：27名)
- ・理学部：理学部教育と就職Ⅰ(受講者数21名)
- ・工学部：社会人入門(履修者数：162名)、技術者倫理(履修者数：620名※前期、後期、Bコース向け計4科目の合計数)
- ・人文科学研究科：インターンシップ(受講者数1名)
- ・理工学研究科(※印のあるものは理工学研究科以外の学生を含む人数を示す)：国際コミュニケーション特論(受講者数※128名、単位修得者数※120名)、実学的産業特論(受講者数33名、単位取得者数33名)、海外とのものづくりアライアンス特論(受講者数※14名、単位取得者数※14名)、産業創生方法論(受講者数26名、単位取得者数25名)、知的所有権特論(受講者数12名、単位取得者数12名)、実体験型ものづくり特論-PET教育-(受講者数9名、単位取得者数9名)、情報産業インターンシップ(受講者数6名、単位取得者数6名)、ソフトウェアビジネスモデル論(受講者数11名、単位取得者数10名)、ソフトウェアビジネスモデル開発演習(受講者数7名、単位取得者数7名)、組織運営とリーダーシップ(受講者数28名、単位取得者数24名)

【144-3】

○ インターンシップの実施体制を確立する。各学科からのインターンシップの報告書を点検し、インターンシップの充

【144-3】

学生就職支援センターは、全学部対象のインターンシップに関して各学部へ情報提供を行った。茨城県経営者協会を通じてのインターンシップ並びに茨城県庁のインターンシップは、学生就職支援センターが全学部のインターンシップ参加学生の取りまとめと連絡調

	<p>実を図る。</p>	<p>整を行い実施した。平成21年度は、茨城県庁へ32名、鹿嶋市へ1名、東京都庁へ1名のインターンシップ受入を実施した。水戸市及び高萩市におけるインターンシップ受入の道を開いた。「茨城インターンシップ推進協議会」の会合や東京経営者協会主催のインターンシップ・シンポジウムなどに積極的に参加し、県内及び首都圏の各企業のインターンシップに関する情報の収集を行い、的確な情報を提供した。また、インターンシップ関連のハイパーキャンパスシステム（インターンシップ実習先を探すための支援システム）の利用も学生に奨めた。</p> <p>人文学部の実績は、年度計画【87-2】、【93】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【145】 ⑩ 卒業生へ大学院への社会人入学、研修生入学などによる卒業後の再教育の機会があることを積極的に周知するとともに同窓会を仲立ちとした卒業生との連携協力関係を活発にする。</p>	<p>【145-1】 ○ 引き続き同窓会との連携を活用しながら、卒業生への大学院教育の周知を図る。</p> <p>-----</p> <p>【145-2】 ○ 卒業生による就職ガイダンスを多賀工業会との交流・連携により継続実施し、就職支援体制の一層の強化に努める。</p>	<p>【145-1】 【145-2】 ・人文科学研究科では、大学、人文学部及び同窓会のホームページに大学院公開説明会の案内を掲載するとともに、同窓会室に大学院パンフレットを置き、卒業生及び在學生に大学院教育の周知を図った。また、同窓会会報第26号（平成21年5月発行）には前大学院専門委員会委員長の「大学院改組について」の文章のほか、修了生の「再び母校に学ぶ」という大学院体験記が掲載された。大学院公開説明会を2回（学内及び学外）実施した（参加者49名）。第2回目は11月に学外公開説明会として、東海村中央公民館にて実施した。これは、人文科学研究科の地域社会に向けての周知と社会人入学者の拡大を目指したものである。参加者8名で、地元東海村からの参加者は1名のみであったが、県内外の遠方から社会人や留學生の参加者があった。今年度、改組が行われて新体制になったことや新たに教育プログラム（地域人材養成プログラム）が始まったことなどを積極的にPRした。</p> <p>・工学部では、同窓会である多賀工業会との交流・連携により卒業生による就職ガイダンスや合同企業説明会を実施した。また、こうがく祭やオープンキャンパスを利用し、卒業生による講演会を開催した。また、昨年度学内表彰を受けた工学部学生の活動のパネル展示も多賀工業会館で行った。</p> <p>・学生就職支援センターでは、3つの就職ガイダンス「OBからのメッセージ 茨城大学だからこそ求める人材」、学生就活サークルSEEKと共同開催した就活イベント「就職座談会—先輩に聞け！就活って何？」、新しく結成された学生就活サークルブリッジの支援を受けてキャリア教育講座「OB・OG報告会」を実施した。企業に勤務する卒業生と在學生が、就職・仕事・人生のキャリアプランに関する講話、討論により交流できた。学生の就職支援を推進するため、3回の就職ガイダンスをOB・OGとの交流・懇談にあて、学生の職業観の涵養と就職意識の啓発に努めた。OB・OGとの交流は、これら3回のガイダンス以外にも、学内合同企業説明会や公務員機関等学内説明会において、卒業生が説明者として来ていただいた。</p>
<p>【146】 [留学生・社会人支援] ⑪ 留学生からの学業や生活に関する相談体制を強化し、カウンセリングや研究指導体制を改善する。さらに、学生チューターによる支援体制を点検し充実を図るとともに、日本人学生との交流を活発に行う。</p>	<p>【146-1】 [留学生・社会人支援] ○ チューターの留学生支援体制を点検して制度の充実を図り、留学生の支援環境の向上を目指す。</p>	<p>【146-1】 【146-2】 【147-1】 【147-2】 ○留学生センターでは以下の留学生支援を実施した。 ・21年度から、より詳しい活動実態の把握のため、中間報告書を提出する制度を設けた。チューター活動の中間報告書、チューターの常時登録制度を導入することで、チューター制度の改善を図った。 ・チューター懇談会を水戸（5月）、阿見（6月）、日立（7月）に実施し、チューター制度の説明及び活動に対する指導・助言を行った。チューター懇談会の出席者数は、水戸（教職員9名、チューター15名）、阿見（教職員18名、チューター4名、留學生8名）、日立（教職員16名、チューター8名）であった。 ・7月に行った国際交流パーティーでは、工学部と農学部の往復バスを運行したことにより大幅に参加者が増え（留學生84人、チューター26人、教職員19人：計129人）、より幅広く交流が促進された。 チューターには、留學生の実地見学旅行への参加を促すとともに、水戸散策、チューターと留學生との忘年会等の新たな交流の機会を提供し企画に携わってもらうことで、留學生とチューター及びチューター間の意見交換の機会が広がった。 ・多様なレベルやニーズに応えられるようカリキュラムを整えた。21年度からは水戸・日立・阿見の3キャンパス間でテレビ会議システムを使った遠隔授業により、日本語授業を実施した。テレビ会議システムによる授業には前期7名（初級前半、</p>

【146-2】
 ○ 学部と留学生センターとの連携により、留学生に対する学業・生活に関する相談及びカウンセリング、教育研究等の支援体制の一層の充実を図る。

日立)、後期24名(初級前半(13名;日立7名、阿見6名)、初級後半(11名;日立5名、阿見6名))の延べ31名が受講した。
 ・財団法人日本教育支援協会の留学生住宅総合保障を活用することによって、留学生が民間アパートを賃貸する際、本学が機関保証を行っている。21年度も、新入生オリエンテーションでの説明やホームページ、メールグループの活用等を通して同制度の周知に努め、利用者数の増加を図った。人文学部11名、教育学部4名、理学部5名、工学部9名、人文科学研究科1名、教育学研究科1名、理工学研究科10名、農学研究科4名、合計45名(対前年比4名増)の利用者があった。
 ・留学生センターの専任教員3名が留学生の生活・勉学面での支援のため、週1時間ずつ相談・指導を担当している。4月には、新入留学生を対象にオリエンテーションを実施し、大学生活等に関するガイダンスを行うとともに、4ヶ国語対訳版の『外国人留学生のためのガイドブック』を改訂し、留学生全員と指導教員及びチューター等に配布した。留学生センター教員2名が5月中旬に新入留学生全員を対象に個人面談を実施し、個々人が抱える問題について相談を受け、指導に当たった。
 ・留学生支援の一環として、学生就職支援センター(主催)の協力を得て水戸キャンパスで「外国人留学生のための就職ガイダンス」を2回(6月・参加者22名、1月・参加者15名;阿見・日立キャンパスにはビデオ貸出)実施した。また、工学部では独自に「就職ガイダンス:留学生の就職活動について」及び「留学生OB・OG講演会」を10月に行い、留学生15名が参加した。
 ・外国人留学生のための就職ガイダンスは、茨城大学としては初めての試みであったが、就職ガイダンスを通して日本での就職を目指す留学生にとって有益な情報を提供することができた。
 ・留学生にメールリストを利用して、新型インフルエンザ対策や休学中のアルバイト時間についての注意などを周知することにより指導を強化した。また、4月に加え、10月にも新しく水戸警察署の職員による留学生を対象とした防犯講習会を実施した。

【147】
 ⑫ 留学生と関連地域団体との交流を促進し、日本文化理解のための教育の充実を図る。さらに、帰国後の支援を図る。

【147-1】
 ○ 留学生と地域団体との交流の実施内容を検討し、更に活性化させて、留学生の日本理解の向上と地域住民の国際理解に貢献する。

【147-2】
 ○ 留学生の帰国後の支援を図る方策を引き続き検討する。

・地域団体との交流として、水戸東ロータリークラブ主催の「心の交流会」(6月;参加留学生49名)への参加、地域催事への参加、県内高校への留学生派遣(6月、11月、12月に延べ9名)、及びホームステイ(5月;18名、11月;15名、1月;8名、延べ41名)の実施などを通して、留学生が地域住民と関わる機会を設け、日本人家庭などで日本の習慣や文化を学ぶなど、相互交流や日本に対する理解を促した。また、地域住民との交流会等(「11月;支援団体等23名、県内留学生68名(うち本学留学生27名)、教職員14名」、「12月(日立地区);支援団体等25名、留学生64名、チューター6名、教職員13名」、「3月(阿見地区);支援団体等7名、留学生20名、チューター3名、教職員18名)を開催し、留学生と地域団体との交流を活性化させ、地域住民の国際理解に努めた。さらに、水戸市国際交流センターにおいては、財団法人水戸市国際交流協会との共催で地域住民及び本学の関係者を招き、日本語研修コースの成果発表会(2月)を開催した。
 ・留学生の帰国後の支援の方策として、引き続き、卒業予定者を対象に進学・就職状況等調査を実施しており、卒業後の進路状況及び連絡先の把握が進んでいる。メールを利用した登録制度の確立に努めることによって、留学生の卒業後のネットワーク構築の基礎作りを行った。
 ○学部では、以下の留学生支援を実施した。
 ・人文学部では、留学生懇談会とチューター懇談会で聴取した留学生の抱えている問題と要望や意見を彼らに対する学業・生活に関する相談、教育研究等の支援体制の充実で反映させるよう努めた。日本語が不十分な1名の科目等履修生に受入教員を付け、学業に関する相談等の支援体制を充実させた。国際交流協定の増加により、交流校からの短期留学生が増加傾向にあるため、これまで一部の教員に偏っていた受入体制が限界に近づいているため、学部全体で受け入れていく方策を検討した。
 ・教育学部では、21年度からチューターの月間の報告を提出させ、チューターの活動をモニターすることとした。前期授業終了後、学業成績の不振者(成績が平均値以下:3名)を抽出し、担任が面接し、その結果を報告させた。留学生の修学状況を把握し、学生支援委員会との連携により、支援の具体的な方策について検討した。

		<p>これまで通り、各教室によるガイダンスと、年度2回以上の教員との話し合いを持ち、生活・学習状況の確認と指導をサポートした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理学部では、入学時に指導教員と大学院生のチューターを決め、学修の計画立案とその後の指導、諸手続きや生活上の相談を行った。日常的には、留学生との面談により、教育システムにおける履修上の問題点を把握した。理学部留学生相談会を11月に実施し(参加留学生3名)、日本での留学生活、大学での勉学生活上の悩み、学部教育について、理学部への要望を聴取した。 ・工学部では、4月に留学生説明会を実施し、日常生活上の諸注意、諸手続き、留学生支援体制、相談窓口等の説明をした。6月に国際交流会館、会瀬国際寮、吼洋寮などの支援施設の調査・点検を実施した。7月にチューターと留学生センター教員との懇談会を実施した。10月に「留学生のための就職ガイダンス」(OB・OG講演会を含む)を実施した(参加者19名)。 ・農学部では、留学生の学業や生活に関する相談体制を一層充実させるとともに、日本語教育の授業を前期及び後期に実施した(各15回)。また、留学生の多文化理解を深めるために阿見町との連携で様々な文化交流会を開催した。 ・理工学研究科では、1月に「留学生にキャリアパスを提示するための連携シンポジウム」を開催した。連携先の産業技術総合研究所から約10名の研究者が参加し、学生と自由な雰囲気での議論もでき、交流を深めるだけでなく、教育上の効果もあった。
<p>【148】 ⑬ 社会人学生への相談等に対応できる支援体制を整備する。</p>	<p>【148】 ○ 平成20年度に策定された社会人学生への学習相談・支援の改善策を実施する。</p>	<p>【148】 理工学研究科では、20年度に大学院生の自主的交流組織(「院生会」)と協議し、大学院設置基準14条適用・休職制度を活用した現職教員・社会人大学院生に対するアンケートを実施し、次の改善策を整備した。①直接的学習支援として、それぞれの学生に合った研究方法についての指導を強化する。②14条学生に対しては(修了後の研究の継続性を保障する意味も含め)現場に出ていることがメリットとなるような学習、研究を行えるように指導する。③図書等の資料については、平成20年度中に整備された「カリキュラム開発室」を積極的に活用して指導する。21年度は、これに基づいて、茨城県教育委員会派遣の大学院生及び休職制度を活用した大学院生に対して、前期及び後期開始時並びに年度末に学習相談のための面接を行い、また、研究指導計画書の策定を通して丁寧な指導を行った。課題意識の強さ、現職経験というメリットを活かし、方法的トレーニングの不十分さ(特に修士論文作成に関して)を補うことに留意した。また、教育学部出身者以外の大学院生に対してはそのことを意識して、教職に関する学習のための指導を各専修の事情に合わせて実施した。また、実際に生じた問題(指導教員の指導に関わる問題、単位認定にかかわる問題など)においても、専門委員会で当該学生の意見聴取や専修に対する指導助言を通して指導改善のための支援を行った。</p>
<p>【149】 ⑭ 学生及び留学生向けの宿舎の活用について点検を行い、運営の改善に努める。</p>	<p>【149】 ○ 水哉寮の耐震改修を計画どおり進めるとともに、みずき寮の居住環境の改善を図る。</p>	<p>【149】 ・水哉寮の耐震改修工事を計画どおりに進め、みずき寮の居住環境の改善を行った。①水哉寮入寮生の借り上げアパートへの移転を行った。②みずき寮に空調機(エアコン)を設置し、浴室給湯を更新した。③デジタル放送設備を導入した。④みずき寮に防犯カメラ及び掲示板を設置した。④水戸警察署等による防犯巡回により、寮生の安全対策を向上させた。</p> <p>・日立地区及び阿見地区の国際交流会館の増築及び新築、水戸地区の国際交流会館(旧棟)の改築について、早期に実現するよう計画してきたが、平成21年度目的積立金整備事業として、水戸地区国際交流会館の旧棟(A、B、C棟)のうち、B棟22室について居室内の壁面・天井及び床面の改修並びに設備・備品の更新を行った。農学部国際交流会館の新築に着手した。</p>

- II 教育研究等の質の向上の状況
 (2) 研究に関する目標
 ① 研究水準及び研究の成果等に関する目標

中期目標	[方向性・重点領域] ① 知的資産の増大に貢献する水準の高い学術研究活動を推進するとともに、研究の重点領域を設定し、地域性と総合性を特色とする研究を推進する。 [社会への還元] ② 研究成果を高度の専門的な職業人養成を目的とした教育にフィードバックするとともに、産業技術の発展並びに国民生活の向上などのため積極的に社会へ還元する。 [水準と成果の検証] ③ 研究目的や目標に照らして、評価に耐える研究内容と水準を達成する。 ④ 研究に関する多面的な評価システムを構築するとともに、外部評価を実施し、研究内容や成果の点検・評価・改善を行う。
------	---

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【150】 [方向性・重点領域] ① いくつかの分野で研究拠点となるべき重点研究を育成し、高い水準の研究を行う。</p>	<p>【150-1】 [方向性・重点領域] ○ フロンティア応用原子科学研究センターにおいて、中性子応用諸分野における高度研究を推進するとともに、茨城県中性子ビームラインの運転・維持・管理・研究を実施する。</p> <p>-----</p> <p>【150-2】 ○ 「東京大学サステイナビリティ学連携研究機構」の参加大学として地球変動適応科学を中心にサステイナビリティ学の研究を推進する。</p>	<p>【150-1】【150-2】 フロンティア応用原子科学研究センターでは、研究部門に専任教員2名が着任し、専任教員を核とした3キャンパスにまたがる教員によるプロジェクトを立ちあげた。このプロジェクトは、茨城大学推進研究プロジェクトに認定され、全学の力を集める研究体制の構築に向けた準備が整えられた。11月に国際会議(MECASENS-5:第5回中性子および放射光による応力評価に関する国際会議)を開催(主催:日本原子力研究開発機構・茨城大学)し、12月には年会講演大会(中性子科学学会年会)を開催し、研究拠点の基盤を築いた。茨城県中性子ビームラインの運転維持管理において、生命物質構造解析装置では14台の検出器を設置・調整を実施し、ユーザー供用を開始した。3月に、この装置による有機結晶の中性子構造解析に成功した。材料構造解析装置では3バンク約1,500本の検出器を設置・調整を実施し、試料交換搬送機構の調整を行い、ユーザー供用実験を実施した。</p> <p>地球変動適応科学研究機関では、環境省地球環境総合推進費戦略研究S-4をはじめとして、沿岸域への影響と適応策、農業の適応策などについて研究成果を公表した。これらの成果は新聞・テレビ等で報道され、社会的にも大きな注目を浴びた。グローバルとローカルを繋ぐ取り組みとして、地域の市民との協働を目指した地域サステナワークショップ(2月開催・参加者22名)、茨城大学・茨城県・茨城産業会議連携講演会(10月開催・参加者約100名)、W-BRIDGEプロジェクト(早稲田大学と株式会社ブリヂストンの環境問題への貢献を目的とした連携研究プロジェクト)などを実施した。大学院サステイナビリティ学教育プログラム(持続可能な人類社会を構築するために地域及び国際的に活躍できるサステイナビリティ学の専門家の育成を目指す大学院修士課程の学生を対象としたプログラム)を本格開始した。サステイナビリティ学教育プログラムコア科目の開講、東京大学との単位互換制度の開始(平成21年度実績:双方各1名単位認定)、環境省「環境人材育成事業」などの助成を受けながらタイ・ラチャパット大学や大洗町の実践演習を開講した。</p> <p>KDDI(株)から移譲された大口径パラボラアンテナを用いた宇宙の教育研究を推進するため、平成21年5月に宇宙科学教育研究センターを設置した。国内外のVLBI天文学共同研究と茨城大学独自の2素子干渉計による活動天体研究を推進するため、本センターと理学部が中心となって国立天文台とVLBIグループ大学と共同しつつアンテナの望遠鏡への改造を進めている。また、本センターを活用した学部・大学院教育を実施すると共に、小学校教諭の理科研修や高校生対象の観測実習体験教室、親子科学実験体験教室などにより、科学教育の推進を図っている。さらに、市民対象のIEEE・Milestone受賞記念講演会を開催するなど地域市民への貢献活動を展開している。</p> <p>いくつかの分野で研究拠点となるべき重点研究を育成するために、「茨城大学推進研究プロジェクト認定制度実施要項」を制定し、本学教員が取り組むプロジェクトを認定し、研究活動の一層の活性化を図った。37件の応募があり、29件を茨城大学推進研究プロ</p>

		<p>プロジェクトとして認定した。さらに平成22年4月からは、推進研究プロジェクトを中心として、特色ある重点研究の育成と推進を目指して「重点研究」として認定する制度を導入することとした。また、先進的又は独創的な研究を実施している研究者の特筆すべき研究成果を称え、その研究成果と研究内容を学内外に広めることにより、教員の研究意欲の向上を図り、もって大学の研究の活性化と更なる発展を目指すことを目的とする「茨城大学学長学術表彰制度実施要項」を制定した。平成21年度は、4名の教員を認定し、学長学術表彰を授与した。</p>
<p>【151】 ② 地域課題の解決をめざした全学的なプロジェクト研究など、地域貢献型研究を推進する。</p>	<p>【151-1】 ○ 研究を通じた地域連携の強化をめざして、地域連携型研究を一層推進する。</p> <p>-----</p> <p>【151-2】 ○ 地方公共団体および市民、NPOと協力して学際的な地域研究の拠点活動を推進する。</p>	<p>【151-1】【151-2】【152】 地域連携推進本部では、地域貢献活動支援事業として、「教員地域連携プロジェクト」11件、「プロジェクトリーダー事業」5件、「学生地域参画支援事業」9件を認定し実施した。その成果を纏め、平成21年度「教員地域連携プロジェクト報告書」及び「学生地域参画プロジェクト報告書」を出版した。学生地域参画プロジェクトは、マスコミ等でも紹介され、社会的にも高い評価を得た。平成20年度実施の学生地域参画プロジェクト2件（地質情報活用プロジェクト、光害対策プロジェクト）の成果を、農学部において開催された県南同窓会で発表し、後日、地元の小・中学校長等から、これらの成果について大変興味をもったとの感想が寄せられた。また、平成21年度も継続した「光害対策プロジェクト」の成果に基づき、「世界文年2009エッセイ賞」に応募した学生が、平成21年12月に大賞（ガリレオ賞）を受賞した。</p> <p>地域連携協定を締結している自治体及び団体（水戸市、日立市、鹿嶋市、阿見町、東海村、茨城産業会議、茨城県経営者協会、鹿嶋アントラーズ、KDDI、日本原子力研究開発機構、常陸大宮市、茨城県、高萩市等）との連携により市民講座（日立市との連携事業「茨苑セミナー日立」（参加者60名））、インターンシップの実施（鹿嶋市役所による本学学生1名のインターンシップ受入など）、講演会（茨城産業会議との共催講演「地球温暖化とエネルギー問題の解決の可能性」（参加者100名））を開催した。茨城県北ジオパーク推進協議会を立ちあげ（茨城県北7市町村が正式に参画を表明し首長等が出席）、研究を通じた地域連携を強化した。連携協定を締結している団体である鹿嶋アントラーズと連携し、アントラーズの著名選手や経営幹部等が講師となる総合科目を継続的に実施し、カシマサッカースタジアムに本学の広告を掲載し、大学のアウトリーチを推進した。阿見町との協働事業では、「学校給食を活用した食教育推進への取り組み」を実施し、阿見町・茨城大学・あみ自然再生ネットワークと共催シンポジウム「今、地域が育てる豊かな「食」を考えるー地産地消の「食」と健康・「食」と教育の観点からー」をその一環として開催（参加者数95名）し、阿見町小学校での具体的な食育授業を茨城県産豚肉を活用して実施した。</p>
<p>【152】 ③ 環境の保全に関わる学際的な教育研究の推進と技術開発を行う。</p>	<p>【152】 ○ 茨城県の地質環境や生物環境、沿岸環境など、環境保全に関わる学際的な教育研究を行う。</p>	<p>茨城県霞ヶ浦環境科学センターとの共同研究をベースとして、茨城大学・茨城県霞ヶ浦環境科学センター地域連携シンポジウム（茨城県の湖沼環境をめぐるー5年間の連携活動の成果）を開催した。霞ヶ浦流域再生シンポジウム（茨城大学地域連携シンポジウム）を開催した。今回は、「霞ヶ浦周辺のような農業が盛んな地域における土地利用・水利用について、自然環境の保全や計画に関する地域の取り組みを含めて、海外の事例等を参考に検討する」という趣旨で農家、行政、一般の方を対象に、海外の事例として英国リーズ大学の研究者による記念講演や、本学教員による講演が行われた。</p> <p>茨城大学広域水圏環境科学教育研究センターでは、茨城県霞ヶ浦環境科学センターと「西浦および北浦におけるユスリカ群集の分布と底質環境に関する調査研究」の課題で共同研究を実施した。この成果の一部は日本陸水学会第74回大会で発表した。茨城県内水面水産試験場とは、「霞ヶ浦における仔稚魚の出現特性」の課題で共同研究を実施した。この成果の一部は、日本魚類学会第42回大会で発表した。</p>
<p>【153】 [社会への還元]</p>	<p>【153】 [社会への還元]</p>	<p>【153】 理工学研究科博士後期課程では、21年度修了者24名に博士学位を授与した。</p>

④ 博士の学位を持つ高度な技術者・研究者を養成する。

○ 高度な解析・実験技術の支援ができる博士の学位を持つ技術者・研究者を養成する。

【154】

⑤ 研究成果を社会に還元するため、技術研修や市民を対象とした公開講演会等を積極的に開催する。

【154-1】

○ 研究成果を社会に還元するため、技術研修や市民を対象とした公開講演会等を積極的に開催する。

【154-1】 【154-2】 【155】 【156-1】 【156-2】

○ 人文学部の状況
 ・ 5年目を迎えた常陸大宮市市民大学講座を次のとおり開講した（参加者18名）。11月に秋講座（テーマは「世界の名作を読み直す」、人文コミュニケーション学科の教員3人）を開催した。2月に春講座（テーマは「川からみる歴史・文化・社会」、社会科学科の教員3人）を開催した。
 ・ 地域連携事業の広報活動の一環として、従来から公開している地域連携委員会Webサイト（<http://renkei.hum.ibaraki.ac.jp/>）の全面的なリニューアル作業として次の2点を実施した。① 情報内容を最新のものに更新した。② 見やすさや利便性を高めるためにデザインを更新した。
 ・ 地域連携委員会の広報用パンフレット『地域とともに』の活用については講演会、報告会、諸会議等で配布し、地域連携に取り組む人文学部の考え方や体制をアピールした。イベント等の場を活かして情報発信に努めた。
 ・ 第5回茨城大学人文学部地域史シンポジウム「よみがえる戦国の城」を11月に常陸大宮市において開催した。第一部記念講演会（常陸大宮に城が造られた時代—室町・戦国期を語る—）では、常陸大宮に城が築かれた時代背景について、室町・戦国時代研究の第一人者を招き、わかりやすく説明いただいた。第二部パネルディスカッション〈常陸大宮の城から何が見えるのか〉では、ホームページなどで山城に関する情報を公開する民間の城郭研究者から山城の歩き方のポイントを説明いただき、最後に、今回、市域の山城調査を担った茨城大学中世史研究会と常陸大宮市歴史民俗資料館による、新たに作成した地図をもとにした調査成果報告を行った。このシンポジウムには350名の参加者があり、好評であった。併せて、10月～11月に常陸大宮市歴史民俗資料館で特別展「館〈たて〉と宿〈しゅく〉の中世—常陸大宮の城跡とその周辺—」を開催（来館者は1,570名）、10月（参加者80名）及び11月（参加者60名）にヒストリーツアー「常陸大宮 戦国の城を歩く」を実施した。市内だけでなく市外からも多数の歴史愛好家が訪れ、常陸大宮市が中世の山城という地域資源を有していることが全国に発信されることとなった。
 ・ 第2回アクションミーティング2010（常陸大宮市との連携から生まれた一連の研究成果を市民の前で発表する場）及び5回目のまちづくりシンポジウムを3月に連続して開催した（参加者93名）。アクションミーティング2010では、常陸大宮市をフィールドとして研究を行った5組の学生のグループ（計17名）が研究成果を発表した。まちづくりシンポジウムは、人文学部教員2名とこれまでのまちづくりシンポジウムで、その活動と取り組みが紹介された複数の市民グループが集まって開催された。企画課との連携では、地域総合研究所が担当する教養科目として、「地域と大学—取り戻そう！地域の力と地域の自立」をテーマに常陸大宮市での実習を中心に集中講義を行なった（平成22年1月13日～24日）。
 ・ 茨城大学学生サークルの文芸部学生が、詳細な調査に基づく常陸大宮市を舞台とした文学作品「常陸大宮物語」を発表することとなった。本作品は12月に常陸大宮市長に贈呈され、新聞でも取りあげられた。「農村体験事業」や「田舎体験事業」の受け入れボランティアを人文学部の延べ数十名の学生が担った。理学部教員による「昆虫観察会inおがわふれあいの森」を9月に開催（参加者30名）した。
 ・ 大洗町在住の外国人に対する日本語教室を開講した。20年度に受託事業として実施した住民意識調査結果を基に、5月から開始された総合計画審議会に委員として参加し、調査結果を説明した。調査で浮かび上がった子育て世代の住民ニーズについて意見交換をする場として、一般市民対象の公開シンポジウム「海辺の町での暮らしと子育てを語るシンポジウムin 大洗～子育て世代10年後の大洗を語る～」（大洗町・人文学部・地域総合研究所共催）を実施した。水辺活動実践と水辺で生活・仕事を行っている地域住民を対象にしたヒアリング調査を実施した。この調査研究の成果は、『大洗町における海を活かしたまちづくりに向けたライフスタイルの研究と「海辺・水辺活動」の実践モデルの開発・提案報告書』として平成22年2月に公表した。

【154-2】

○ 阿見町および近隣大学との連携活動を継続的に推進し、フォーラム等を開催する。

【155】

⑥ 国・地方公共団体等の各種審議会・

【155】

○ 国・地方公共団体等の各種審議会・

委員会並びに学協会の調査活動等へ参加し、研究成果の社会への還元を促進する。

委員会並びに学協会の活動等へ参加し、研究成果の社会への還元を促進する。

○教育学部では、前年度から継続された鹿嶋市、神栖市、土浦市各教育委員会、鉾田南中学校の教員研修事業に協力した。県立鹿島灘高校、結城二高でのキャンパスエイド事業を通して、関連教員及び教育委員会メンバーの研修を協力した。連携協定に基づき、茨城県研修センターでの各種研修（特に10年経験者研修）に講師を派遣して協力した。茨城県教育研究連盟の研究集会に、地域連携委員会が各部門の助言者の仲介に努めた。JICA（国際協力機構）の依頼に応じて、中南米の教員研修事業に協力した。水戸市教育委員会と連携して「学生ボランティアに関するシンポジウム」を開催した。ボランティアの教育効果についての研究成果を社会に還元する企画であったが、今後の教育学部の地域貢献活動のあり方を考えるための良い機会となった。

○茨城大学と茨城産業会議との連携による「茨城大学理学部研究室訪問交流会」（参加者数37名）を2月に、「茨城大学工学部研究室訪問交流会」（参加者数83名）を10月に、「茨城大学農学部研究室訪問交流会」（参加者数69名、うち企業関係者44名）を開催した。この交流会の目的は、本学と茨城産業会議が連携協力し、地域の発展と産業の振興を図るため、本学の有する技術ニーズの提供や情報交換の場として開催している。

○農学部では、阿見町との協働事業で、「学校給食を活用した食教育推進への取り組み」を実施し、10月に阿見町・茨城大学・あみ自然再生ネットワークと共催シンポジウム「今、地域が育てる豊かな「食」を考えるー地産地消の「食」と健康・「食」と教育の観点からー」をその一環として開催（参加者数95名）、阿見町小学校での具体的な食育授業を12月に茨城県産豚肉を活用して実施した。11月に茨城県農林水産部農産課と（社）茨城県畜産協会が共催する「平成21年度土づくりシンポジウムー耕畜連携のたい肥利用を進めるポイントについてー」（参加者数145名）に協力した。東京医科大学茨城医療センターと第3回研究交流セミナーを開催した（参加者数70名）。茨城県、地域自治体、企業が参画する茨城大学バイオ燃料社会プロジェクト（IBOS）において、本学におけるバイオ燃料研究の取組みが大きく貢献した。

○生涯学習教育研究センターでは、偕学苑講座（公開講座）は20講座を実施した。受講生数は321名であり、前年度よりわずかに減少した。なお、この20講座には無料講座が3件含まれている。公開授業（教養科目・専門科目）は93講座であり、受講生数は138名である。平成20年度から公開授業に専門科目を導入している。また、専門科目の公開授業数は36講座となっている。公開講座（法人化後）と公開授業（平成15年度教養科目開始）について、それぞれの実施状況をまとめ分析した。また、平成18年度から平成21年度までの受講生について、受講状況をまとめ分析した。公開講座・公開授業担当者を増やすため、それぞれの担当候補者一覧を作成した。

○産学官連携イノベーション創成機構の状況
・共同研究開発センターとベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）を統合して、5月に産学官連携イノベーション創成機構を設立した。組織の構成等は次のとおり。同機構は、「共同研究推進部門」、「知的財産部門」、「ベンチャービジネス部門」、「インキュベーション部門」、「人材育成支援部門」と研究支援室（事務部門）で構成されている。

・同機構は、機構長（兼任）1名、副機構長（兼任）1名、専任教員（教授）1名、部門長（兼任）5名、客員教授6名、産学官連携コーディネーター3名、知的財産コーディネーター1名、文部科学省産学官連携コーディネーター1名、非常勤研究員4名、研究支援室事務職員6名で組織した。この組織で、学内及び学外の各機関と連携して産学官連携活動を推進した。また、（財）日立地区産業支援センターのコーディネーター2名を技術移転協力員として、協力いただいた。産業創生関連講義「実学的産業特論」及び「実体験型ものづくり特論ーPET教育ー」を開講した。また、社会人の人材育成支援としてメカトロニクス・ロボット系社会人向け講座を開講した。ベンチャービジネス部門では、地域社会への研究成果発信として、展示会「彩の国ビジネスアリーナ2010」に、「CGM/SNSを用いた行楽情報サービス」、「伸縮ロフトランドクラッチ」及び「地域社会と連携した環境保全型バイオ燃料社会の構築」のテーマで、3件の研究成果を展示した。

【156】
⑦ 国・地方公共団体・民間企業及び特殊法人等との間で、共同・受託研究や連携・交流の機会の増加を図る。

【156-1】
○ 人文学部では、地域連携委員会を中心に、引き続き地方公共団体や産業界等との連携をつよめ、共同で調査・研究を行う機会の増加を一層図る。

【156-2】
○ 共同研究開発センターとベンチャービジネスラボラトリー（VBL）を統合し、交流会や新技術説明会等を引き続き実施し、今後も共同研究の増加を図る。

・ひたちものづくりサロン（HMS）の活動への参加者数は、企業関係者257名、支援機関関係者50名、茨城大学教員67名、コーディネーター156名で合計延べ530名となっている。各研究グループ活動、日立地区産業支援センターと連携したスーパーヒッククラブ活動等によって多くの産学官関係者が参画して茨城大学の知的財産の活用機会を創っている。（財）日立地区産業支援センターの「中小企業のための研究委託」テーマを、HMS関連を中心に募集し共同研究4件を獲得した。

・新技術説明会を開催：茨城大学の研究成果を、首都圏北部をはじめとして広域に技術移転を促進させるために、連携する北関東4大学が主軸となって4県自治体、産業支援機関、JSTや中小機構等と産学官連携の技術移転の運営協議会組織を構築した。第6回4大学新技術説明会キャラバン隊in小山に参加した。JST首都圏北部4大学新技術説明会に参加した。本学への個別相談は10件であった。第7回4大学新技術説明会キャラバン隊in日立を日立地区産業支援センターにて開催した。県内外から産学官合計146名が参加した。第8回4大学新技術説明会キャラバン隊開催に参加した。

・技術相談件数182件の内、県外からの技術相談件数38件があった。技術相談を経て48件が共同研究の契約を締結した。

・共同研究は、平成21年度は178件となった。20年度は179件であり、この数値は全国の国・公・私立大学全体の中で28番目（19年度27番目）に多い件数であった。

○日本経済新聞社「日経グローバル」誌による全国大学の地域貢献度ランキングで、本学は総合ランキング14位（去年は11位）にランク付けされた。国立大学の順位では6位（去年7位）にランク付けが上った。

【157】

[水準と成果の検証]

⑧ 国際学会や全国的レベルの学会、研究会等における研究発表や、学術誌における論文発表を積極的に行い、研究成果を公開し、当該研究分野の発展に資する。

【157】

[水準と成果の検証]

○ 国際学会や全国的レベルの学会、研究会等における研究発表や、学術誌における論文発表を積極的に行い、研究成果を公開し、当該研究分野の発展に資する。

【157】

・研究成果は、教員が研究者情報管理システムに入力し、ウェブ上で「茨城大学研究者情報総覧」として公開している。平成21年度中に登録された「著書」「学術誌論文」「国際会議論文」の総数は952件、受賞は26件（人文4件、理学1件、工学19件、農学1件）（20年度「著書」「学術誌論文」「国際会議論文」の総数は769件、受賞は14件（教育1件、工学12件、農学1件）であった。人文学部教員が受賞したものの中には、「第15回NHK地域放送文化賞」（歴史研究）、「第26回渋沢・クローデル賞本賞」・「第31回サントリー学芸賞」（美術史研究）等があり、高く評価された。そのほかマヤ文明史を環太平洋の環境文明史の視点から研究するプロジェクト（文部科学省科学研究費：平成21-25年度）を領域代表の青山和夫教授（人文学部）が開始した。また、本学において先進的又は独創的な研究を実施している研究者の特筆すべき研究成果を称えるため、「国立大学法人茨城大学学長学術表彰制度実施要項定（平成21年5月制定）」を定め、平成21年度には工学部教員4名の研究成果を認定し、学長学術表彰を授与した（これら4名の研究成果は、平成20年度に、「第6回軽金属功績賞」、「文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）」、日本磁気学会学術奨励賞（内山賞）」、「クリタ水・環境科学研究優秀賞」を受けている）。

・人文学部では、21年度も継続して人文学部紀要を年2回発行した。紀要掲載論文（研究ノート、訳注等を含む）数は、『人文コミュニケーション学科論集』7号17本、8号15本、『社会科学論集』48号8本、49号5本であった。『茨城大学人文科学研究』を発行する体制を整え、第1号（掲載論文数3本）を発行した。

・工学部附属超塑性工学研究センターでは、海外の研究機関と以下のような共同研究を進めた。小角中性子散乱法（SANS）による超塑性セラミックスの空隙解析とそれらの特性評価（チェコ共和国核物理研究所、ドイツHahn-Meitner研究所、フランスLaue-Langevin研究所との共同研究）（20年度から継続）。アルミニウム合金系材料のECAP法による組織制御と超塑性（ロシア科学アカデミー金属超塑性問題研究所との共同研究）（20年度から継続）。

・農学部では、バイオ燃料開発に関する共同研究プロジェクトをインドネシアのボゴール農科大学、ウダヤナ大学、ガジャマダ大学と実施した。教員個人間でバングラデシュ、スリランカ、ラオスの研究者と共同研究を行った。

<p>【158】 ⑨ 教員の研究を点検評価し、教員評価に反映させる評価システムを検討する。</p>	<p>【158】 ○ 平成19年度に制度化した教員の研究評価システムを改善し、平成21年度の評価に用いる。</p>	<p>【158】 ・教員業務評価のうち、研究評価では、教員個人の達成度を評価者が評価する方式から、学野内での相対位置を示す方式に変更した。一方、教員評価委員会では、教員業務評価の分析を行い、処遇との関係を整理した。平成21年度までの業務を対象として実施する教員業務評価は、導入の目的に従い、教員個人の改善を促すものであることが確認された。ただし、評価情報はほかの客観的なデータ（例えば、研究者情報管理システムに登録されている情報）などとともに、勤務評価を行う際の資料として用いることとした。このことは、平成21年11月の教育研究評議会において了承され、平成22年度に取りまとめる。</p> <p>・理学部では、全学的に議論、決定した教員評価と処遇との関係について、学部構成員の間での合意の形成を図るべく、評議員、全学教員評価委員による教授会での説明をきめ細かく行った。平成22年度に実施される理学野教員の研究の自己点検評価については、学野内の新たな評価基準で評価することを検討した。</p> <p>・工学部では、教員の業績等に関して、研究者データベースから抽出したデータの整理・校正を行った。特徴のある事業に関して、個々の推進担当者に報告を求めた。</p>
---	---	--

II 教育研究等の質の向上の状況
 (2) 研究に関する目標
 ② 研究実施体制等の整備に関する目標

- 中期目標
- 〔研究者の配置〕
 - ① 学術研究の動向や社会の要請に対応して、研究組織を柔軟に編成できる運営体制を作る。
 - ② 大学院博士後期課程の充実を図る。
 - 〔研究資金の配分〕
 - ③ 高度な科学技術の教育と研究を推進し支援するため、競争的研究資金の獲得を促進・支援する体制を作る。
 - ④ 研究活動や研究業績の状況を、学内における研究費等の配分に適切に反映させる。
 - 〔研究設備の整備〕
 - ⑤ 研究活動の状況を把握し、研究の質の向上や改善を図るための設備を整備する。
 - ⑥ 情報の総合的管理と活用を図り、情報セキュリティを確保する。
 - ⑦ 図書資料の充実と利用環境の改善を図る。
 - 〔知的財産管理の整備〕
 - ⑧ 知的財産の管理及び技術移転のための組織を整備し、研究成果の社会への還元を推進する。
 - 〔共同研究〕
 - ⑨ 学内共同教育研究施設の整備充実を図る。
 - ⑩ 学外の研究組織との研究連携や技術協力を推進支援する体制を整備する。

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【159】</p> <p>〔研究者の配置〕</p> <p>① 学士課程の教育組織から教員組織を分離し、柔軟に研究組織を編成できる体制とする。</p>	<p>【159】</p> <p>〔研究者の配置〕</p> <p>○ 平成21年度当初に再編される新たな「学野一領域一系」の新組織構成が、学部学野制を実質化し、効率的効果的な組織運営を維持するうえで、実際に有効なものとなっているか点検評価し、問題点の有無を検証する。</p>	<p>【159】</p> <p>・人文学部では、従来の8領域から4領域への再編を、平成21年4月にスタートさせた。留学生センター教員が所属する日本語教育学領域と大学教育センター教員が所属する外国語教育学領域を除く2領域を対象に再編後の問題点の有無の検討を後期に行った。旧体制より受け持つ研究分野が明確化したとの意見も人文コミュニケーション領域から出された。また、領域と学科で所属が違う教員の存在を問題視する意見も出されたが、今回の再編によってむしろその数は減少した。再編前の小単位での領域会議開催に比べると運営体制は効率化された。</p> <p>・農学部では、学部学野制組織の見直しについては、農学部改革WGにおいて作成した「カリキュラム改革の最終答申案」に盛り込み、3月の教授会で、その方向性について了承した。</p>
<p>【160】</p> <p>② 学内共同研究の組織化や支援する体制を整え、研究条件の充実とともに、プロジェクト研究を運営するための組織を柔軟に編成する。また、研究プロジェクトへ研究支援者を期限付きで配置する。</p>	<p>【160】</p> <p>○ 学内共同研究の組織化や支援する体制を整え、研究条件の充実とともに、プロジェクト研究を運営するための組織を柔軟に編成する。また、研究プロジェクトへ研究支援者を期限付きで配置する。</p>	<p>【160】</p> <p>・茨城大学の教育・研究活動の高度化を目指す取り組みの一環として「茨城大学における教育高度化・特色研究の加速プロジェクト」を立上げ、文部科学省の平成21年度補正予算「研究拠点形成費等（教育研究高度化のための支援体制整備事業）」に応募し、採択された。この事業で、大学内において教育研究プロジェクトの質を向上させ、当該学問分野における発展を目指すべく、当該プロジェクトに関わる大卒教員・研究者及び博士課程学生等が教育研究に専念できるよう教育研究業務やプロジェクトマネジメント等を支援する体制を整備することとし、関連するプロジェクト支援要員（コーディネーター、TA、ポストドク、事務支援要員等）の雇用や関連経費（謝金、消耗品費、雑務費、旅費、設備備品費等）として配分した。本経費の目的に沿って、各部署単位でプロジェクトに関わる支援要員の雇用及び謝金、消耗品費、雑務費、旅費、設備備品費を有効活用し、プロジェクトを達成した。</p> <p>・茨城大学における教育の質の向上を目指した改革及び学術研究の充実と高度化を実現するため、茨城大学学内共同教育研究施設等の組織の改革を行うことが教育研究評議会等で承認され、平成22年度から実施することになった。10月から従来の学術情報局を改組した学術振興局が試行的に開始された。学術振興局には、IT基盤センター、産学官連携イノベーション創成機構、機器分析センター、地域連携推進本部、広域水圏環境科学教育研究センター、遺伝子実験施設、地域総合研究所、地</p>

		<p>球変動適応科学研究機関、フロンティア応用原子科学研究センター、宇宙科学教育研究センター、五浦美術文化研究所の全学共同利用施設が置かれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の充実と高度化推進のための施策を検討・企画・立案し、実施を推進する組織として平成22年度から研究企画推進会議を設置することが教育研究評議会等で承認された。本会議の具体的な業務については、研究プロジェクト推進委員会で審議し規則化した。 ・人文学部では、人文学部共同プロジェクトの予算措置をした。新任教員支援のための新任教員研究発表会を6月に開催した（出席者44名）。 ・教育学部では、共同研究を進めたい、あるいは興味がある者を集わせ、それぞれの関心について交流させ、その中から互いの興味に応じて研究面で連携を図る動きへと導き、積極的に科研費応募への支援など、具体的な取り組みを出発させた。
<p>【161】 ③ 博士の学位を持つ高度な技術者・研究者を育成するため、博士後期課程を充実するとともに、研究員の受入れの拡大と流動性の確保を図る。</p>	<p>【161】 ○ 超塑性工学研究センターで、非常勤研究員（外国人）並びに留学生や外国人研究者の受け入れを促進する。</p>	<p>【161】 工学部附属超塑性工学研究センターでは、2名の外国人非常勤研究員及び1名の留学生を受入れた。海外から著名な研究者5名、国内から5名の研究者を招聘し、3月に国際シンポジウム（“Superplasticity and its Related Areas”）を開催した。このシンポジウムは、超塑性とその関連・周辺分野の最前線の研究者を国内外から招聘し、今後研究・開発されるべき課題等を展望、議論する場を設け、この分野の更なる発展・展開を目指すことを目的に開催された。10人の研究者から発表があり、そのうち5人は、外国（英国、仏国、中国、スペイン、チェコ）から招聘された研究者が行った。</p> <p>産学官連携イノベーション創成機構では、当機構のVB部門に外国人研究者（1名）の招聘と非常勤研究員を採用した。</p>
<p>【162】 ④ サバティカル等の研修制度を整備し、教員の研究能力向上を目指す。</p>	<p>【162】 ○ 教員の教育・研究能力向上のためにサバティカル制度を活用し、その効果を検証する。</p>	<p>【162】 人文学部では、サバティカル制度を活用することによって、研究実績をあげ、大学の研究体制を強化することを目指した。21年度は人文学部教員数の5%以下の人数に抑え、5名に絞った。研究計画、年齢などの観点から若手の研究を重視する環境を整えた。</p>
<p>【163】 [研究資金の配分] ⑤ 競争的研究資金情報の教員への広報体制と戦略的研究の組織化に機敏に対応できる体制を整備する。さらに、資金獲得へのインセンティブを与えるシステムを整備する。</p>	<p>【163-1】 [研究資金の配分] ○ 資金獲得へのインセンティブを与えるシステムを整備する。</p> <p>-----</p> <p>【163-2】 ○ 科学研究費等の競争的資金及び受託研究・共同研究による外部資金の獲得を積極的に行う。</p>	<p>【163-1】 【163-2】 【164-1】 【164-2】 ・外部資金の獲得に向けて、資金を獲得した教員へのインセンティブの付与について研究プロジェクト推進委員会で検討するとともに、継続して平成22年度から研究企画推進会議の下に「外部資金獲得専門委員会」を設置して検討を行うこととした。</p> <p>・科学研究費補助金の申請件数（新規・継続）は、平成16年度335件、17年度364件、18年度388件、19年度402件、20年度422件、21年度426件、22年度439件となっている。平成21年度の採択件数は152件で採択金額は350,020千円であった。</p> <p>○受託研究及び共同研究等の外部資金の獲得状況は以下のとおりで、受託研究の受入金額が前年度比約85,000千円増加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受託研究：58件（20年度53件）、受入額517,875千円（20年度433,301千円） ・共同研究：178件（20年度179件）、受入額133,280千円（20年度176,202千円） ・寄附金：146件（20年度124件）、受入額91,024千円（20年度127,126千円） <p>○人文学部の状況 ①学部内被採択者と審査委員経験者による情報交換会を7月に開催した。特に、若手教員の被採択者による情報提供に努め、関連資料も配布した。また、全学の科学研究費補助金説明会への参加を呼びかけた。 ②人文図書室に被採択者から提供されたデータを集めて、応募者の参考となるようにした。 ③応募者に対して、学部長裁量経費から研究費補助を行った。 ④様々な組織・団体による研究費補助に教員が積極的に応募するように、それらの</p>

		<p>情報をメールや掲示で全教員に周知した。</p> <p>○教育学部の状況 ・全学の科学研究費補助金説明会への出席のほか、学部独自の科学研究費補助金申請のための説明会を1回、研究者交流会を3回（共同研究者発掘のため交流会）、共同研究推進のためのFDを1回実施した。また、科学研究費補助金への応募経験の浅い研究者に対して、研究計画調書の書き方窓口を開設し、10名の研究者から相談を受け、7名の研究者に研究計画調書の書き方等の指導を行った。 ・共同研究グループによる平成22年度科研費申請件数は19件で、平成21年度の申請件数（16件）を上回った。共同研究グループが多く誕生したことにより、科学研究費補助金の申請や各種競争的研究資金獲得のための組織的で機敏な対応体制をとることができた。</p>
<p>【164】 ⑥ 研究評価を研究費配分に反映させるシステムを検討する。さらに、評価を基に研究体制や研究プロジェクトの見直しを行う。</p>	<p>【164-1】 ○ 科学研究費補助金の申請状況に応じて、基盤経費の傾斜配分を継続する。</p> <p>-----</p> <p>【164-2】 ○ 研究評価を研究費配分に反映させるシステムを検討する。特に、若手教員への研究支援を充実する。さらに、評価を基に研究体制や研究プロジェクトの見直しを行う。</p>	<p>○理学部の状況 ・外部資金獲得を目指すORU (Organized Research Unit) 推進策として、教員が研究グループを組織する際に「茨城大学理学部〇〇フォーラム」という名称を名乗ることができるようにしている。 ・他機関との連携強化のための事業に対して支援を行っており、検討会としては、「量子医療研究・教育ネットいばらき」、他機関との連携講演会として「高萩・日立32メートル電波望遠鏡を用いたサイエンス」、「がん放射線治療と人材育成ー基礎科学とベッドサイドを結ぶ連携を目指してー」、「総合原子科学プログラム講演会」の開催を支援した。これらの事業には学内外で延べ113名が参加した。 ・理学部の教員が学内外の研究者・研究機関と連携して新たな共同研究等の立ち上げを目指すものとして、以下の事業を研究フォーラムレベルで実施している。 ①産業技術総合研究所の環境化学技術部門・分子触媒グループとの研究フォーラム ②学外の医療機関等と連携したがん放射線治療に関する生命科学基礎研究の立ち上げ ③宇宙科学教育研究センターによる国内大学研究者に対する電波望遠鏡の共同利用</p> <p>○工学部の状況 ・事務情報提供システム（グループウェア・ガルーン）の掲示板に貼り付けられた助成金の募集案内一覧を応募締切が迫っている順に閲覧できるよう工夫し、教員等に周知した。 ・今年度は、工学部科学研究費補助金FDを実施し、工学部の科研費に関する状況の説明及び今後の申請への方針案が紹介された。平成22年度向け新規・継続の申請数は146件であり、21年度向けは143件であった。 ・科学研究費補助金の申請状況に応じて基盤研究経費の傾斜配分を実施した。科学研究費補助金の獲得金額を考慮して、間接経費による研究環境を整備した。工学部の組織的研究体制の検討を継続し、理工学研究科博士後期課程の改組と連動させることとした。</p> <p>○農学部の状況 ・科学研究費補助金に関するセミナーを実施し、科学研究費補助金の獲得に積極的に取り組んだ。継続課題も含め、農学部所属の教員のほぼ全員が科学研究費補助金を申請した。また、科研費間接経費等を利用し、特に若手教員の研究を支援した。また、環境省から2件(44,553千円、42,574千円)、農林水産省から1件(28,500千円)、独立行政法人農業環境技術研究所から1件(17,500千円)の大型受託研究費4件が新たに採択されるなど外部資金の獲得が積極的に展開された。</p> <p>○研究プロジェクト推進委員会では、第2期中期目標・中期計画に向けて、科学研究費補助金への申請をした研究者及び申請後の審査においてA評価で不採択になった若手研究者へのインセンティブとしての研究費配分について検討を開始した。また、学術振興局に所属する各センター等においては、自己点検評価の実施に向けて中期計画を立てた。</p>
<p>【165】 ⑦ ベンチャーラボ・レンタルラボを整備し、競争的資金に基づく研究や外部との共同研究スペースとして提供する。</p>	<p>【165】 ○ ベンチャーラボ・レンタルラボを整備し、競争的資金に基づく研究や外部との共同研究スペースとして提供する。</p>	<p>【165】 平成21年度改修建物において、レンタルスペース5室（工学部N3棟：168㎡）を整備した。 既存のレンタルスペースは、1室（国際研究員室53㎡：海外からの研究者用）を除き、</p>

共同研究、競争的資金による研究等により100%運営され、有効な活用が図られた。

【166】
 [研究設備の整備]
 ⑧ 研究拠点となる高い水準の研究を育成するために、最先端の実験・分析設備を導入し運用する。

【166】
 [研究設備の整備]
 ○ 研究拠点となる高い水準の研究を育成するために、最先端の実験・分析設備を導入し運用する。

【166】
 ○平成21年度に国の補正予算等を活用して新規導入の大型設備（500万円以上）は、以下の40件である。この中には、世界最先端の設備もあり、教育研究の最先端の実験を行える環境を整えた。
 ・教育学部：行動画像計測解析システム、眼球運動計測装置、桌上顕微鏡装置(3件)
 ・理学部（理工学研究科を含む）：液体シンチレーションカウンタ、R I モニタリングシステム、無冷媒He3冷凍機システム、立体視計算機システム(4件)
 ・工学部（理工学研究科を含む）：赤外線ランプ加熱装置、DNAシーケンサー、精密平面研削盤、単結晶X線構造解析装置、熱膨張測定装置、高分解能レーザー顕微鏡、ワイヤ放電加工機、液体クロマトグラフィー (8件)
 ・農学部：炭素・窒素自動測定装置、イメージアナライザー、液体クロマトグラフ・タンデム質量分析計、超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置、マイクロプレートリーダー、高精度切片・断面試料作製装置、発酵蒸留精製装置、電子顕微鏡、電界放出形分析走査電子顕微鏡、電界放出形走査電子顕微鏡(10件)
 ・機器分析センター：多元素機能性分子精密構造解析システム、マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析システム、高分解能質量分析システム、高周波プラズマ発光分析装置、誘導結合プラズマ質量分析計(5件)
 ・フロンティア応用原子科学研究センター：多元素機能性分子精密構造解析システム、タンパク質X線結晶構造解析用X線回折装置、嫌気ストロプトフロー分光光度計、単結晶用顕微分光光度計システム、X線結晶構造解析試料調整用嫌気チャンバー、試料自動交換システム、多機能超遠心装置(7件)
 ・宇宙科学教育研究センター：電波天文用マイクロ波帯冷却デューワー、22GHz帯受信システム、マイクロ波帯偏波分離型受信機(3件)
 ・その他500万円未満から250万円の研究機器37件を新規導入した。

【167】
 ⑨ 高度の研究を推進し支援するために各教育研究施設の充実と施設間の密接な連携を図る。

【167】
 ○ 高度の研究を推進し支援するために各教育研究施設の充実と施設間の密接な連携を図る。

【167】
 ○産学官連携イノベーション創成機構の設置
 ・共同研究開発センターとベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）を統合して、5月に産学官連携イノベーション創成機構を設置した。
 ・同機構は、「共同研究推進部門」、「知的財産部門」、「ベンチャービジネス部門」、「インキュベーション部門」、「人材育成支援部門」と研究支援室（事務部門）で構成されている。
 ・同機構は、機構長（兼任）1名、副機構長（兼任）1名、専任教員（教授）1名、部門長（兼任）5名、客員教授6名、産学官連携コーディネーター3名、知的財産コーディネーター1名、文部科学省産学官連携コーディネーター1名、非常勤研究員4名、研究支援室事務職員6名で組織した。この組織で、学内及び学外の各機関と連携して産学官連携活動を推進した。また、(財)日立地区産業支援センターのコーディネーター2名を技術移転協力員として協力いただいた。活動状況は、年度計画の【175】【176】【179-1】【179-2】【186】の「計画の進捗状況」を参照。

○宇宙科学教育研究センターの設置
 ・高萩市にある旧KDDI茨城衛星通信センター跡を有効利用するため、茨城大学、国立天文台、茨城県、日立市、高萩市、KDDI(株)は、平成19年6月に連携協定を締結した。パラボラアンテナ2基は国立天文台が、土地は高萩市と日立市が、衛星通信館は茨城大学が譲り受け、旧KDDI大パラボラアンテナを電波望遠鏡へ転用を図ることにより、超長基線電波干渉計（VLBI）観測に基づく先端的な天文学研究及びこれに関連した教育研究及び科学教育並びに周辺地域の自然を活かした地域振興を推進し、大学連携と地域連携の拠点を形成するため、5月に設置した。
 ・センターの組織は、センター長（兼務）、専任教員1名、兼務教員10名、事務職員1名を配置した。各教員は、1) 宇宙物理・地球物理・情報通信等の教育研究分野、2) 科学教育分野、3) 地域連携分野を担っている。
 ・11月に6.7GHz帯と8GHz帯の2偏波（右旋・左旋）冷却受信機とアンテナ制御方式が開発され、太陽からの電波受信に成功した。平成22年1月にはメーザー天体の

		<p>電波を受信し、パラボラアンテナの電波望遠鏡への改造が順調に進められた。</p> <p>○フロンティア応用原子科学研究センター ・設立2年目を迎えた平成21年度は、新たに「研究部門」に専任教員2名を配置した。また、タンパク質X線結晶構造解析用X線回折装置、嫌気ストップフロー分光光度計などの研究設備を設置し整備を充実した。さらに、平成22年3月には、東京大学物性研究所と原子炉中性子源や大強度パルス中性子源を利用した物質科学の発展に寄与するため、連携協力協定を締結した。機器分析センターの設備の導入を図り、施設間の連携を強化して、学術研究推進の環境整備を図った。</p> <p>○学術研究系の学内共同研究施設間の綿密な連携と相互補完関係を向上させるため、平成22年度に学術振興局を設置することを目的に、学術振興局設立準備委員会を立ち上げ、その準備をした。</p> <p>○「教育研究高度化のための支援体制整備事業費」により、重点的研究施設であるフロンティア応用原子科学研究センター、産学官連携イノベーション創成機構、機器分析センター、遺伝子実験施設、地球変動適応科学研究機関、IT基盤センターでの研究活動を支援する人的組織を充実した。</p>
<p>【168】 ⑩ 放射線及び放射性元素利用研究における安全性の確保のため、設備を整備する。</p>	<p>【168】 ○ 放射線およびR I 利用研究に関わる安全教育と施設の安全確保を行う。</p>	<p>【168】 ○安全教育の実施 ・放射性同位元素等取扱施設を有する理学部及び阿見地区では、放射性同位元素等の従事申請登録者（教職員及び学生）に対して、放射線取扱主任者が安全教育を実施した（理学部：216名受講（4月）、阿見地区：53名受講（32名（4月）、18名（5月）、2名（6月）、1名（7月））。</p> <p>○安全確保の実施 ・作業環境測定：各地区では、外部専門業者へ作業環境測定及び放射線モニタリングの測定業務を委託し毎月測定を実施した。各地区の測定結果に問題はなく、各地区の放射線取扱主任者も確認していることから、従事者の放射線による安全、地域環境の安全が確認できた。</p> <p>○施設の安全性能 ・理学部では、放射線安全管理にも用いている液体シンチレーションカウンタを12月に、放射線モニタリングシステムを2月に新しいシステムに更新した。また、地下式の排水処理設備を地上式に更新する変更承認を取得し、更新工事を3月末までに完了した。なお、工事期間中は安全保持のために実験室の使用を停止し、保管管理のみを行った。</p> <p>・阿見地区では、NaI(Tl)シンチレーションサーバイメータの修理を行った。排水設備分配槽水位計の交換修理を行った。遺伝子実験施設の給気フィルタの交換及び温度センサーの交換修理をした。R I 研究棟R I 実験室の陶器製流し台が破損したため、陶器部分の交換修理をした。これにより施設の安全性能は維持できている。</p> <p>・両地区とも放射性同位元素等の在庫管理、廃棄物の適正処理及び施設の自主点検も引き続き行っている。</p> <p>・文部科学省から「管理下でない放射性同位元素等に関する一斉点検の実施及び報告依頼について」が発せられ、本学では放射線安全委員会で、この件を審議し全学的な点検調査を行うため、放射性同位元素等調査要綱を12月に作成した。この要綱に基づき、平成22年1月から全学調査を開始し、平成22年4月に文部科学省に中間報告を行う予定である（報告内容は無い）。なお、最終報告は平成22年9月末である。</p>
<p>【169】 ⑪ 学術データベースの構築と整備に努力するとともに、外部電子情報の利用促進を図る。</p>	<p>【169】 ○ 機関リポジトリのコンテンツを充実する。</p>	<p>【169】 ○図書館の状況 ・科学研究費補助金の実績報告書を機関リポジトリに掲載するよう各教員に要請を行うなど、コンテンツの充実に努力した結果、科学研究費補助金報告書等の登録或未登録の学内出版物の登録が行われるようになった（627件（20年度）→1,005件で60%増）。</p> <p>・コンテンツ充実策について、実態及び教員の希望を把握するために、アンケート調査を実施した。ROSEリポジトリいばらきの利用促進のため、講習会を開催した（参加人数10名）。</p>

		<p>機関リポジトリに関して、教員を対象とするアンケートを行った。その結果、約50名からリポジトリに登録してよいと考える論文約80件の情報を得た。</p>
<p>【170】 ⑫ 教育・研究・業務に関する情報の総合的管理運営と活用を図り、学内情報のサービスを行うとともに、情報セキュリティを確保する。そのための組織体制の整備充実を図る。</p>	<p>【170】 ○ 情報セキュリティポリシーの実施体制を強化する。また、IT基盤センターの業務整理を進めると共に、利用者へのサポート体制の改善を図る。</p>	<p>【170】 ○ IT基盤センターの状況 ・文部科学省が示した4レベルの新セキュリティポリシーの確立と実施準備に向けた体制の強化を図った。図書館に設置してあるIT基盤センター設備（PC）の利用時間を、図書館の利用時間とともに21時45分まで延長を図り、利用者へのサポート体制を強化した。 ・サポート体制については、Webフィルタリング解除に関する依頼が多いため、フィルタリング方式を改善し、Mail送受容量についても見直しを行い、教職員で50MB、学生で15MBと改善した。 ・全キャンパスで15台の無線LANアクセスポイントを学生の利用が多い場所に増設し、無線LANアクセスポイントの利用マニュアルを改訂した。 ・情報セキュリティポリシーを現状に即して見直すことについての検討を開始した。 ・IT基盤センターの技術職員の所属変更を検討し、IT関連の技術職員を集中化して業務の効率化を図る体制を強化した。</p>
<p>【171】 ⑬ 図書館資料の系統的な収集・整備を促進し、電子図書館サービス機能の充実・強化を図る。</p>	<p>【171】 ○ 図書館資料の系統的な収集・整備を促進し、電子図書館サービス機能の充実・強化を図る。</p>	<p>【171】【172】【173】【174】 ○ 図書館の状況 ・教員及び学生の意見を反映し学生用雑誌を抜本的に見直して、タイトル数を約40%増やした。 ・教育、教員養成系図書を重点的に整備した。 ・本館では英語多読学習資料（約4千冊）、工学部分館と農学部分館では、それぞれ専門分野の基礎資料を整備した。 ・学生選書企画「この本オススメ！2009」を実施した（本館）。学生の基礎学力の向上に資する資料の整備に大きな成果をあげた。 ・図書館運営委員会で電子ジャーナルの導入について検証した。 ・リポジトリ部会で電子ジャーナルの利用について、教員を対象にアンケートを実施した。 ・電子ジャーナルの利用促進のため、講習会を開催した（参加人数10名）。本学の実情にあった電子ジャーナルを導入した結果、SCIENCE DIRECTに多くの利用（論文のダウンロード件数：90,611件）があった。 ・図書館各館では、計画的に蔵書点検を行い、21年度は以下を行った。本館（人文学部の1研究室）対象・点検件数450冊、工学部分館対象・点検件数4万冊、農学部分館対象・点検件数6万冊。 ・図書館間相互協力（ILL）の私費利用者の簡便性を確保して利用環境の改善を図るべく、自動精算機の導入を検討した。 ・「平成21年度教育研究高度化のための支援体制事業」により遡及入力委託業務を申請し、約2千万円が認められた。外部委託により遡及入力作業を行った（本館所蔵図書28,865冊、工学部分館所蔵雑誌39,990冊の計68,855冊）。 ・書庫の製本雑誌について、所蔵情報の入力が完了した（本館、工学部分館）。 ・遡及入力が大幅に進み、22年度で完了する見通しとなった。図書館内の図書及び雑誌の所在を迅速に照会することができ、資料調査作業の効率化につながった。</p>
<p>【172】 ⑭ 外国雑誌について電子ジャーナルを中心とした、全学的な収集・共同利用体制を推進する。</p>	<p>【172】 ○ 電子ジャーナル共通経費について、平成22年度以降の収集方針について検討する。</p>	
<p>【173】 ⑮ 他大学図書館及び国立情報学研究所等と連携し、国際的・国内的な図書館間相互協力（ILL）を推進する。</p>	<p>【173】 ○ 図書館間相互協力（ILL）の需要に応じるため、学内の資料所在情報の精度を向上させる。</p>	
<p>【174】 ⑯ 図書管理システムを整備し、所蔵資料の利用促進を図るとともに、図書の資産管理の効率化を図る。</p>	<p>【174】 ○ 図書館所蔵図書の遡及入力を実施する。</p>	
<p>【175】 [知的財産管理の整備] ⑰ 社会の要請にしたがって企業と共同研究を展開し、本学のシーズを社会に提供する。また、本学の知的財産の創成と管理及び活用を図る拠点として知的財産管理部を形成する。</p>	<p>【175】 [知的財産管理の整備] ○ 産学官連携イノベーション創成機構内に設置した「知的財産部門」を拠点として、(1) 社会のニーズに沿った共同研究を展開し、本学のシーズを社会に提供することを推進する。(2) 知的財産の管理体制と制度整備の充実及び知的財産の活用を図ることを推進する。</p>	<p>【175】 ○ 産学官連携イノベーション創成機構の状況 ・同機構の「知的財産部門」を拠点として、社会のニーズに沿った共同研究を展開し、本学のシーズを社会に提供することを推進した。 ・共同研究は、年々増加傾向にある（16年度78件、17年度134件、18年度161件、19年度170件、20年度179件（受入金額176,202千円）、21年度178件（受入金額133,277千円））。平成20年度の179件は、全国の国・公・私立大学全体の中で28番目に多い件数である。 ・首都圏北部4大学新技術説明会を、茨城県、栃木県、埼玉県、群馬県で計4回開</p>

		<p>催した。一般企業向けに「中小企業こそ知的財産権を武器に！」をテーマとして首都圏北部4大学合同知財実践セミナー及び地域ブランド創出に向けて産学官連携事例講演会を開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知的財産の管理体制と制度整備の充実及び知的財産の活用を図ることを推進した。知的財産管理経験を有する知的財産コーディネーターを雇用し、また、知的財産管理ソフトと特許庁データベース利用ソフトを導入し、効率的な管理体制を整備した。 ・発明届の件数は、平成17年度41件、18年度24件、19年度29件、20年度34件であったのに対し、21年度は28件であった。 ・大学が承継した発明件数は、平成17年度10件、18年度13件、19年度21件、20年度26件であったのに対し、21年度は25件であった。 ・出願件数は、平成17年度8件、18年度9件、19年度20件、20年度11件であったのに対し、21年度は30件であった。保有する特許は21年度末現在で3件、実用新案は1件である。
<p>【176】 [共同研究] ⑱ 先端科学技術に関する研究支援拠点として学内共同教育研究施設を整備し、密接な連携を図って、共同利用の推進に努める。</p>	<p>【176】 [共同研究] ○ 先端科学技術に関する研究支援拠点として学内共同教育研究施設を整備し、密接な連携を図って、共同利用の推進に努める。</p>	<p>【176】 ○産学官連携イノベーション創成機構では、共同研究先と学内で共同研究するために、当機構の研究室を活用している。21年度は10研究室を16名の教員に提供した。</p> <p>○機器分析センターの状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成19年度から4大学間の分析機器相互利用を実施しており、本学は核磁気共鳴装置と元素分析装置を相互利用に供している。埼玉大学からの元素分析の依頼測定を36件実施した。 ・機器分析センターの共同利用実績は、登録者数で教育学部13人、理学部152人、工学部173人、理工学研究科47人であり、20年度の登録者数を上回った。依頼測定件数は、教育学部から90件、理学部から42件、工学部から65件であった。液体窒素自動供給量は、教育学部160L、理学部1,385L、工学部100L、理工学研究科270Lであった。 <p>○フロンティア応用原子科学研究センターの状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・設立2年目を迎えた平成21年度は、新たに「研究部門」に専任教員2名を配置し、共同利用体制を整備した。 ・タンパク質X線結晶構造解析用X線回折装置、嫌気ストップフロー分光光度計などの研究設備を設置し充実した。 ・平成22年3月に、東京大学物性研究所と連携協力協定を締結し、原子炉中性子源や大強度パルス中性子源を利用した物質科学の共同研究体制を整備した。 ・平成22年3月に、世界で最も高性能なパルス中性子用回折装置「茨城県生命物質構造解析装置(iBIX)」において、重水素化された有機化合物(酒石酸水素アンモニウム)単結晶の中性子構造解析に成功した(平成22年3月25日に茨城県庁にてプレス発表)。 <p>○遺伝子実験施設は、年度計画【177】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【177】 ⑲ 生命科学研究における安全性の確保と生命倫理の遵守を図りながら、遺伝子研究の支援と教育を行う。</p>	<p>【177】 ○ 生命科学研究における安全性の確保と生命倫理の遵守を図りながら、遺伝子研究の支援と教育を行う。</p>	<p>【177】 ○遺伝子実験施設の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組換えDNA実験の利用者説明会あるいはホームページを通じて、生命倫理・組換えDNA実験に関する法の遵守と安全確保の周知を進めた。説明会は2回開催し、合わせて150名が参加した。 ・21年度における施設利用の登録研究グループは36グループ、登録者数は224名であった(20年度:34グループ、240名)。 ・各種分析機器は活発に利用され、キャピラリー型DNAシーケンサー(2台)、核酸自動分離装置、定量PCR装置(2台)を利用し、多数のサンプル分析が行われた。 ・DNAシーケンス受託分析は、工学部及び理学部から合わせて296サンプルについて行った。

		<p>・バイオ教育・実験プログラムへの参画と社会へのバイオの普及を図った。遺伝子実験施設が所有するバイオ関連器具の農学部学生実験へのレンタルを10回以上行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生のためのバイオテクノロジー実験講座を開催した（参加者27名）。 ・一般向けバイオテクノロジー実験講座を開催した（参加者22名）。 ・科学未来館との共催で、リアルラボ@茨城大学遺伝子実験施設を実施した（参加者21名）。 ・新たに単一高校から高校生20名を受け入れ、実験講座を遺伝子実験施設において実施した。 ・サンプル/器具のレンタルを土浦市内の高校向けに実施した。 ・学外開催事業として、NPO法人との共催により親子バイオ入門実験教室（科学技術館）を実施（参加者20名）、一般向けバイオテクノロジー実験講座（東京都立高校）を実施（参加者24名）した。
<p>【178】 ⑳ 大学院連携分野の近隣研究機関の研究者と共同研究を推進する。</p>	<p>【178】 ㉑ 大学院連携分野の近隣研究機関の研究者と共同研究を推進する。</p>	<p>【178】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成19年度より、理工学研究科・フロンティア応用原子科学研究センター、茨城県、(株)日立製作所日立研究所が実施主体となり、「中性子ビームの学術・産業利用における容易性確立のための技術開発」を目的とする連携融合事業がスタートし、本年度も引き続き、以下の3つのテーマを計画通りに実施した。21年が最終年度である。(A)タンパク質大型単結晶育成技術の開発 (B)残留応力測定法と小角散乱ナノ・マイクロ組織定量測定法の高度化 (C)材料構造解析装置データ処理プログラムの開発 ・理工学研究科博士後期課程担当教員109名を対象に共同研究調査を行い、延べ56公的機関、79大学、112企業と共同研究が進められ、29名の博士後期課程学生の関与、133名の博士前期課程学生の関与があることが分かった。近隣研究機関との共同研究では、連携大学院締結機関の日本原子力研究開発機構、(株)日立化成、(株)日立製作所日立研究所など行われている。 <p>○連携大学院の状況 理工学研究科、農学研究科の連携大学院の状況については年度計画【101】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【179】 ㉒ 研究情報の広報体制を整備するとともに、学外研究機関や大学、企業、NPOとの間の研究連携を推進するための組織を整備し、研究の連携・協力・技術移転を積極的に進める。</p>	<p>【179-1】 ○ 地域連携推進本部を拠点として、外部研究機関や大学・企業・地方自治体等との連携を推進し、研究の連携、協力、技術移転を推進する。</p> <p>-----</p> <p>【179-2】 ○ 大学の知的所有権の公表・出版を行う。また、これらの情報のホームページ上での広報を行う。</p>	<p>【179-1】【179-2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○外部研究機関、企業及び地方自治体との連携 ・高萩市と地域連携事業に係る協定を1月に締結した。本協定は、高萩市に所在する本学の宇宙科学教育研究センターが5月に開設したこと、本学が推進している「茨城県北ジオパーク」の設立に同市が参画を表明したことなどに伴い、様々な交流が行われることにより、より連携を深め地域の発展・人材の育成を目的としている。この協定で、連携締結機関（大学協定）は、茨城県、水戸市、日立市、阿見町、常陸大宮市、鹿嶋市、高萩市、東海村、茨城県産業会議、茨城県教育委員会、株式会社常陽銀行、株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー、商工組合中央金庫水戸支店、KDDI株式会社・国立天文台等、社団法人茨城県経営者協会、独立行政法人日本原子力研究開発機構となった。 ・連携協定に基づく茨城県産業会議との研究室訪問交流会は、日立キャンパス（工学部）、阿見キャンパス（農学部）、水戸キャンパス（理学部）の3地区で実施した。本交流会は、企業のニーズと本学のシーズを融合させ、産学連携の発展及び地域の発展に貢献する目的で開催されている。平成21年度からは新たに「技術相談コーナー」を設け、参加者に予め相談内容を募り、対応できる本学教員に当日アドバイスしていただくという、主催者側からの一方的な企画の提供のみでなく参加者側・企業側からの要望に細やかに応える企画も行い、更なる企業からのニーズへの対応を行った。また、茨城県を新たに加えた各協定締結自治体との実務担当者会議も20年度に続き、21年度も開催し、各協定先自治体と行っている連携事業の内容や事業を行っていく上で浮き彫りになった問題等を共有し、連携事業の発展・充実ひいては地域活性化につながる意見交換を行った。 以上の連携協定に基づき、地域連携推進本部を拠点として多数の連携活動が推進された。 <p>○技術移転に関する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本学が承継した発明は、発明者と連携して、産学官連携イノベーション創成機構

の知的財産部門を中心に権利化と技術移転に向けた活動を行っている（21年度実績：譲渡契約に基づく譲渡10件（特許を受ける権利）、実施許諾契約書に基づく実施許諾1件、ライセンス等収入額1,079千円）。

- ・新技術説明会の開催：研究成果を、首都圏北部をはじめとして広域に技術移転を推進するために、連携する4大学（茨城、宇都宮、群馬、埼玉大学）が主軸となつて、JST首都圏北部4大学発新技術説明会や首都圏北部4大学連合（4U）事業の一環としての4大学新技術説明会キャラバン隊（合計3回開催）の活動を実施した。

○農学部における状況は、年度計画【151-2】の「計画の進捗状況」を参照。

○本学が所有する知的財産の内、開放特許一覧を産学官連携イノベーション創成機構（平成21年5月設置）のホームページに掲載し、活用推進を図っている。

- II 教育研究等の質の向上の状況
 (3) その他の目標
 ① 社会との連携、国際交流等に関する目標

- 中期目標
- [地域との連携]
 - ① 教育及び研究における社会サービスを積極的に推進する。
 - ② 地域貢献・地域交流の組織的・総合的な取り組みを推進する。
 - [産学連携]
 - ③ 社会の要請を汲み上げた研究を展開し、社会にシーズを発信する。
 - ④ 産業振興・環境保全に貢献し社会の健全な発展に寄与する研究を推進する。
 - [他大学との連携]
 - ⑤ 他大学や外部研究機関と協力して地域課題を解決するため組織的連携を図る。
 - [留学生等交流]
 - ⑥ 国際的な大学間学生交流・学術交流の推進を図る。
 - ⑦ 留学生や外国人研究者を積極的に受入れる。
 - [国際貢献]
 - ⑧ 国際的共同研究に取り組むとともに、国際社会の要請に応える研究の構築と人材養成への協力を強める。

中期計画	年度計画	計画の進捗状況
<p>【180】 [地域との連携] ① 地域貢献を本学の重要施策の一つとし、地域貢献を目的とする教育研究を充実し、成果を社会へ還元する。地域貢献と地域連携の拠点となるよう本学を整備する。</p>	<p>【180-1】 [地域との連携] ○ 茨城県教育委員会や各市町村教育委員会と連携し、現職教員の研修事業を実施するとともに、地域学校の教育力向上の支援を行う。</p> <p>-----</p> <p>【180-2】 ○ インキュベーションスペースなどの地域連携等のための施設の管理・運用を実施する。</p> <p>-----</p> <p>【180-3】 ○ J-PARC関係の連携融合事業を引き続き実施する。</p> <p>-----</p> <p>【180-4】 ○ 地域連携コーディネーター会議を有効に活用するとともに、地域連携推進本部との役割分担を明確にして密接な協力を図る。</p>	<p>【180-1】【180-2】【180-3】【180-4】 ・教育学部では、水戸市教育委員会との連携で学校支援ボランティアの派遣、茨城県教育委員会との連携で県内小学校へ体育授業サポーターの派遣（保健体育課）、夏休みの小学校まなびの広場（算数基礎学習）ボランティア派遣（義務教育課）、理科支援事業（文部科学省）、神栖市及び鹿嶋市の学力アップを目指す教育委員会協力、県立高校キャンパスエイド事業、県立高校学力支援事業（特に依頼があった県立高校及び中学校への協力）、東海村スポーツ支援事業等に学生、教員が協力し、地域の教育向上に貢献した。また、茨城県教育研究連盟及び茨城県研修センターに協力して、地域の教員の研修事業に協力した。</p> <p>理学部では、以下の教育委員会等と連携した科学体験教室や独自プログラム等を開催した。 ・科学技術週間に呼応した「サイエンステクノロジーフェスタ」を4月に開催した。 ・8月に、茨城県教育委員会との共催で「高校生科学体験教室」を理学部7研究室で実施し（参加者数20名）、水戸市立博物館との共催で「特別企画展（洞穴の動物たちー暗闇で生きる）」を開催した（参加者数45名）。 ・11月に、「青少年のための科学の祭典」（茨城県科学技術教育推進協議会〔事務局：教育学部理科教室〕主催）のひたちなか大会（3,567名参加）、北茨城大会（約1000名参加）に積極的に出展した。 ・スーパーサイエンスセミナー及びスーパーサイエンス体験プログラムや、地質観察体験講座「茨城の大地の成り立ちを考える：阿字ヶ浦・平磯～大洗海岸」を実施した（参加者数77名）。</p> <p>・工学部では、ものづくり体験工房、子供ラジオづくりチャレンジ教室、第4回ものづくり体験・理科工作教室を4テーマで開催した。技能五輪・アビリンピック茨城大会の併設イベントとして開催された「いばらきものづくりフェスタ2009」、科学の祭典・日立大会に参加した。工学部の改修により、インキュベーション・スペースを4か所確保し、地域連携に活用する。</p> <p>・理工学研究科・フロンティア応用原子科学研究センター、茨城県、(株)日立製作所日立研究所が実施主体となり、J-PARC関係の連携融合事業「中性子ビームの学術・産業利用における容易性確立のための技術開発」を本年度も引き続き実施し、以下の3つのテーマを計画通りに実施した。(A) タンパク質大型単結晶育成技術の開発 (B) 残留応力測定法と小角散乱ナノ・マイクロ組織定量測定法の高度化 (C) 材料</p>

構造解析装置データ処理プログラムの開発

・地域連携コーディネーター会議を開催し、各学部における地域連携活動について集約し、推進本部の活動を強化した。コーディネーター会議では、現状について問題点を整理することにより、その後の活動の強化を図った。

【181】

② 国、各地方自治体、学校、地域の研究機関、民間企業、さらにはNPOや市民団体と共同して、多様な社会活動を行って、産官民学の連携を推進する。

【181】

○ 地方自治体等など提携先との協力事業を推進する。地域連携推進本部を全学の窓口にして、提携先の地方自治体や団体との連携事業、共同研究、技術移転などを推進する。

【181】

○ 地域連携推進本部を窓口として、実施した主な連携事業（連携協定先は年度計画【179-1】の「計画の進捗状況」を参照。

・水戸市：「水戸藩開藩400年記念行事」への支援
 ・日立市：市民講座「第3回茨苑セミナー日立」の開催
 ・阿見町：「茨城大学バイオ燃料社会プロジェクト」における協力、公共交通に関する調査研究の実施
 ・鹿嶋市：学生インターンシップの受け入れ、「かしま灘楽習塾」での文化活動等
 ・東海村：原子力安全フォーラムの開催
 ・常陸大宮市：市民大学講座や連携シンポジウムの開催等
 ・茨城県経営者協会：連携による「地域連携論Ⅰ、Ⅱ」（人文学部専門科目）の開講

・鹿島アントラーズ：連携事業として、カシマスタジアムへの本学PR掲示の実施及び総合科目「アスリートの世界」～鹿島アントラーズとの提携を通じて～の開講
 ・茨城県霞ヶ浦環境科学センター：連携による総合科目「環境としての霞ヶ浦」の開講

・茨城県・茨城産業会議：「温暖化とエネルギー問題の解決の可能性ー持続可能な社会の構築に向けてー」の講演会開催

・茨城産業会議：理学部、工学部及び農学部研究室訪問交流会の開催
 以上のように連携協定を締結している自治体や団体との連携活動は、活発に実施され、特に鹿島アントラーズとの連携は、アントラーズの著名選手や経営幹部等の講話を聴講できる総合科目の継続的な実施や、カシマスタジアムでの本学の広告掲載など、大学のアウトリーチにもなった。

・連携協定締結先の茨城県及び7市長村との間で意見交換会を開催し、阿見町とは定期協議会も開催した。

・茨城県北ジオパーク構想に関しては、茨城県北ジオパーク推進協議会を平成22年2月に設立した（茨城県北の北茨城市、高萩市、東海村、ひたちなか市、大子町、常陸太田市、常陸大宮市7市町村が正式に参画を表明し首長等が出席）。この推進協議会が設立されたことにより、事業推進が図られることとなった。

○ 日本原子力研究開発機構との連携

・本学と日本原子力研究開発機構は、平成20年3月に連携協力に関する包括協定を締結している。その協定等に基づき、連携協議会が平成22年3月に開催され、教育プログラムとして実施している「総合原子科学プログラム（理学部）」及び「原子力工学教育プログラム（工学部、理工学研究科）」についての連携協力の現状及び今後の計画について協議した。

○ 生涯学習教育研究センターの状況

・茨城県社会教育・生涯学習研究会の活動と並行して設立されたNPO法人「ひと・まちねっとわーく」の中心となり、文部科学省委託事業として「江戸しぐさから茨城しぐさ」運動に取り組み、「江戸しぐさフォーラム」を開催した。

・文部科学省委託社会教育主事講習を実施し、講習内容を実践的にするべく、社会教育現場からの講義を充実した。

・牛久市・水戸市・守谷市・城里町・阿見町など多くの市町村生涯学習課と連携し、各種の事業の相談・支援を行った。

・学外からの依頼を受け、100件以上の講演を行った。

○ 地域総合研究所の状況

		<p>東海村住民2,000人を対象にした「政治意識と原子力政策」についてのアンケート調査を実施した。その中間集計報告を「原子力安全フォーラム2009」（東海村・原子力文化振興財団共催）と公開講座「原子力と地域社会」（東海村・茨城大学共催）で報告した。この調査と公開講座は、毎日新聞（2月10日付）で詳しく紹介された。</p> <p>・大洗町関係の研究プロジェクトは、「海を活かしたまちづくり」をテーマにした大洗町における総合科目の開講とも連動させ、従来の「海」から、那珂川・涸沼川・涸沼にかけての水辺活動と環境問題に展開した総合的研究を行った。第24回常磐鹿島灘の漁業を考える水産海洋地域研究集会「川と海のつながりを考える」を、県内の主要漁業協同組合関係者を集めて開催した。大洗町・人文学部・地域総合研究所共催で一般市民対象の公開シンポジウム「海辺の町での暮らしと子育てを語るシンポジウムin 大洗」を実施した。子育て世代の町住民、子育て支援を行う町職員、ボランティアがパネラーとなり、一般市民向けに大洗町での子育ての魅力と政策課題を語り合った。その内容は、茨城新聞や町の広報で大きくとりあげられた。</p> <p>・日立地区の政策課題を市民と共に語り合うシンポジウム「ひたち未来シンポジウム」では、「都市空間再構築～生活のデザイン・空間のデザイン～」をテーマに報告討論を行った。</p> <p>・茨城NPOセンターコモンズ及び茨城県経営者協会などの主催、地域総合研究所などの後援で2月に「茨城NPOフォーラム2010」に参加し、「多様な働き方を求めて」をテーマに連合茨城代表や県内企業の代表らと公開討論を行った。</p> <p>○地域貢献ランキング順位 日本経済新聞社が実施している全国大学の地域貢献度ランキングが発表（11月）され、本学は総合ランキングで14位にランクされた（国立大学の順位では7位から6位に上昇）。</p>
<p>【182】 ③ 地域への積極的な貢献のため、学内共同教育研究施設を有機的に組織化しその活用を図るとともに、生涯学習の充実、地域環境改善、地域産業活性化に寄与する。</p>	<p>【182】 ○ 連携強化のため、学内共同教育研究施設等を組織化する。</p>	<p>【182】 ○学内共同教育研究施設の組織化 茨城大学における教育の質の向上を目指した改革及び学術研究の充実と高度化を実現するため、また、学内共同教育研究施設等の綿密な連携と相互補完関係を向上させるため、学術研究系の施設等を包括する組織として「学術振興局」を、教育系の施設等を包括する組織として「教育振興局」を平成22年4月から設置することとした。「学術振興局」には、IT基盤センター、産学官連携イノベーション創成機構、機器分析センター、地域連携推進本部、広域水圏環境科学教育研究センター、遺伝子実験施設、地域総合研究所、地球変動適応科学研究機関、フロンティア応用原子科学研究センター、宇宙科学教育研究センター、五浦美術文化研究所が置かれ、全学共同利用施設に位置づけられる。「教育振興局」には、大学教育センター、入学センター、生涯学習教育研究センター、留学生センター、保健管理センター、学生相談センター、学生就職支援センター、大学院教育部が置かれ、全学共同利用施設に位置づけられる。</p>
<p>【183】 ④ 社会貢献のための情報発信組織を整備し、広報活動を行う。</p>	<p>【183-1】 ○ 社会連携事業会や同窓会連合会と協力し、地域と連携する本学の社会連携事業とその成果がさらに広く認知されるようにする。</p> <p>-----</p> <p>【183-2】 ○ 社会連携事業会の「地域・茨城大学インターフェイス委員会」「広報普及委員会」と地域連携推進本部を通じて、積</p>	<p>【183-1】【183-2】 社会連携事業会会報「茨苑」第13号、第14号、第15号（各3,500部）を発行した。茨城県南同窓会において、学生地域参画プロジェクトのうち学長表彰を受けた2チームが講演を行った。WEBページでも公開した（http://jigyoukai.ibaraki.ac.jp/essay/backno_new.html）。また、社会連携事業会の支援事業である「学生地域参画プロジェクト」(http://www.ibaraki.ac.jp/generalinfo/activity/liaisonin/g/studentproject/index.html)及び「教員地域連携プロジェクト」の報告書（平成20年度）を作成し、地域貢献としての事業内容を紹介した。社会連携事業会及び地域連携推進本部のホームページによる広報に加え、メールマガジンも内容を充実させ、リアルタイムな情報提供に心がけた。</p> <p>人文学部では、地域連携事業の広報活動の一環として、従来から公開している地域連携委員会Webサイト（http://renkei.hum.ibaraki.ac.jp/）の全面的なリニューアル作業を実施した。当委員会広報誌『地域とともに』を講演会、報告会、諸会議等で配布し、地域連携に取り組む人文学部の考え方や体制をアピールした。21年</p>

	<p>極的に広報活動を進める。「茨苑」の発行やホームページでの広報を継続し、本学の社会連携事業とその成果を学内外に</p>	<p>度も茨城県経営者協会、茨城大学文理・人文学部同窓会との緊密な連携の下で、講義「地域連携論Ⅰ」（受講生：57名）及び、「地域連携論Ⅱ」（受講生：103名）を順調に実施した。</p>
<p>【184】 ⑤ 地域への図書館開放など、図書館サービスの拡充を図る。</p>	<p>【184-1】 ○ 茨城県図書館協会の情報ネットワーク及び物流システムに参加し、県内の公共図書館との相互協力体制を整備する。</p> <p>----- 【184-2】 ○ 大学所有の古文書を中心とした資料を社会に有効に還元し、文化振興に貢献する。</p>	<p>【184-1】【184-2】 ・茨城県図書館協会大学部会会長館として、職員研修等の活動を積極的に推進した。県域の公共図書館との相互貸借の実績は、貸出冊数129冊、借受冊数95冊であった。一般市民を対象に公開講座「使ってみよう大学図書館一見して、聞いて、学んで」を開講し、地域との交流を深めた。所蔵する古文書の説明紹介等を含んだプログラムを実施し、県内から合計11名の参加があった。 ・「水戸藩の地図と書」の展示を2月3～9日に開催した。このイベントは、本図書館が所蔵する水戸藩の貴重資料を展示するとともに、学生の研究発表や研究者の講演会を実施した（来場者数約1,400名）。 ・大学所有の古文書資料を活用し、地域の歴史を可視化する試みとして作成した「水戸の城下町マップ」と「城下町マップ（幕末版）」が、地域の教育と観光の現場で、効果的に活用された。各協力機関から観光・教育に関する情報を収集して、「城下町マップ」の試作版を作成した後、一般市民の意見を聴取し、試作版の完成度を高めるべく、財団法人水府明徳会との共同研究及び水戸商工会議所と共催で市民を対象としたタウンウォッチングを2回実施し、その意見を反映して完成版を作成した。基本となる絵図を本学所蔵のものに変更し、「城下町マップ（幕末版）」を作成した（水戸商工会議所とも協力）。この城下町マップ作成を実施したことにより、次の成果を得た。 ① 自館の資料に依存せず、地域の他機関の所蔵資料やデータの有効活用が図られた。特に、水府明徳会と共同研究契約を締結したことは、今後の地域（水戸市）の歴史遺産における研究の推進において、非常に大きな意義がある。 ② 自館のスタッフに限定せず、地域の学芸員、商工会議所及び市民との連携による事業を推進することにより、公立図書館のみならず、博物館等の専門家とのネットワークを築いたことは、大学図書館の新たな可能性を考える契機となった。 ③ 机上の作業に終始することなく、現地調査やタウンウォッチングで城下町マップの精度を向上させた。 ④ 城下町マップが教育と観光の現場で、実際に効果的に活用された。（市民や市内小中学校等へ約3千部を配布） ⑤ マスコミに大きく取りあげられ、この事業が広く地域に浸透したことから、大学における地域の窓口としての図書館の存在が定着した。</p> <p>・永井路子氏の老家（茨城県古河市）に伝わる古文書を本学に寄贈いただいた。これを受けて、資料を整理、修復し、図書館1階展示コーナーにて展示し、講演会「茨城の富士山信仰—永井路子の家伝書から」を開催した（来場者数約200名）。プログラム：「私の先祖八郎治」・永井路子（歴史小説家、直木賞など多数受賞）、「江戸時代後期における農村荒廃の復興」：小野寺淳（茨城大学教授）、「徳川時代の富士信仰と不二道」：梅澤ふみ子（恵泉女学園大学教授）。</p>
<p>【185】 ⑥ 大学所有の各種文化資料及び文化財等を社会に有効に還元し、文化振興に貢献する。</p>	<p>【185】 ○ 茨城県天心記念五浦美術館、北茨城市、天心偉蹟顕彰会、日本ナショナルトラストと連携し、地域社会の文化振興に貢献する。</p>	<p>【185】 ・茨城県天心記念五浦美術館、北茨城市、五浦日本美術院岡倉天心偉蹟顕彰会、日本ナショナルトラストと連携し、恒例の「観月会」を開催した（期間中の入館者数は11,600人）。 ① 茨城県天心記念五浦美術館講堂において講演会「岡倉天心と東京美術学校」（講師：東京芸術大学大学美術館准教授）を開催した。② 天心邸茶会を五浦美術文化研究所天心邸にて開催した。③ 六角堂展：題目：「西成田育男展—不可視—」を10月24日～11月23日に五浦美術文化研究所六角堂ならびに天心邸において開催した。 ・水戸藩の文化と書：10月15日に古美術研究家、22日に郷土史研究家による講演会を本学図書館で開催した。 ・中学生からの美術アカデミーを開催した（9年目：受講生徒8期生10名、9期生8名、修了生3名）。 ・台渡里遺跡パネル展「巡回展 古墳時代の大きな溝、発見！～豪族居館と台渡里廃寺跡～」を4月24日～5月22日に本学図書館において開催した（参観者：約1,800名）。 ・台渡里遺跡パネル展・延長展「パネル展 古墳時代の大きな溝、発見！～豪族居館と台渡</p>

		<p>里廃寺跡～」を7月18日～10月17日に茨城大学三の丸インフォメーションセンターにおいて開催した(参観者：約800名以上)。</p>
<p>【186】 [産学連携] ⑦ 共同研究・受託研究等を積極的に推進し、民間等からの相談に積極的に対応する。</p>	<p>【186】 [産学連携] ○ 共同研究・受託研究等を積極的に推進し、民間等からの相談に積極的に対応する。</p>	<p>【186】 ○産学官連携イノベーション創成機構の状況 (1) 茨城大学採用の客員教授、茨城県商工労働部から派遣された客員教授、産学官連携コーディネーター、文部科学省配置のコーディネーター等による企業訪問、技術相談を充実させて、広く茨城県内企業のニーズと茨城大学の知的財産(シーズ)の活用を推進した。 ・訪問件数は合計192件で昨年より大幅に増加した(20年度83件)。 ・訪問先の分野は電気機械、ビル設備、医療機器、機械加工、ソフト、理化学機器など。 ・地域比率では、例年どおり茨城県北の占める割合が70%と高い(昨年は県北78%)。 ・大・中小企業比率では、中小企業の占める割合が64%であった。(昨年は中小企業60%) ・技術相談状況：技術相談件数は、前年度からの継続を含め182件となった。 ・技術相談を経て共同研究成約に至った件数は48件であり、その内36件は企業訪問を実施した企業である。企業訪問が共同研究成約への効果が高い。 ・技術相談件数182件の内、茨城県外からの技術相談件数は38件であった。 (2) 共同研究：平成21年度は178件となった。昨年度は179件であり、この数値は全国の国・公・私立大学全体の中で28番目に多い件数であった。 (3) 各種イベントの開催・参加を通じてのシーズ発信 ・「第6回首都圏北部新技術説明会」：4月に小山商工会議所(栃木県)において開催。本学から農学部准教授が発表・報告を行った。 ・工学部・農学部・理学部研究室訪問交流会：茨城産業会議を含む5団体との共催で工学部・農学部・理学部の研究室訪問交流会を実施した(工学部参加者：83名、農学部参加者69名、理学部参加者：37名)</p>
<p>【187】 ⑧ 高度の各種分析機器を運用して共同利用の推進と測定サービス等の充実に努め、社会と連携した業務の拡充を図る。</p>	<p>【187】 ○ 各種分析機器を運用して共同利用の推進と測定サービス等の充実に努める。</p>	<p>【187】 機器分析センターは年度計画【176】、遺伝子実験施設は年度計画【177】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【188】 ⑨ 研究成果に基づくベンチャービジネスを育成する。</p>	<p>【188】 ○ ベンチャービジネスラボラトリー(VBL)と共同研究開発センターを統合し、ベンチャービジネスの育成活動を強化する。</p>	<p>【188】 共同研究開発センターとベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)を統合して、5月に産学官連携イノベーション創成機構を設立した。組織の構成等は次のとおりである。 ・同機構は、「共同研究推進部門」、「知的財産部門」、「ベンチャービジネス部門」、「インキュベーション部門」、「人材育成支援部門」と研究支援室(事務部門)で構成されている。 ・同機構は、機構長(兼任)1名、副機構長(兼任)1名、専任教員(教授)1名、部門長(兼任)5名、客員教授6名、産学官連携コーディネーター3名、知的財産コーディネーター1名、文部科学省産学官連携コーディネーター1名、非常勤研究員4名、研究支援室事務職員6名で組織した。この組織で、学内及び学外の各機関と連携して産学官連携活動を推進した。また、(財)日立地区産業支援センターのコーディネーター2名を技術移転協力員として、協力いただいた。 ・同機構で担当した人材育成支援活動として、学生の起業家精神養成を目的とした産業創生関連講義「実学的産業特論」及び「実体験型ものづくり特論-PET教育-」を開講した。また、社会人の人材育成支援としてメカトロニクス・ロボット系社会人向け講座を実施した。 ・同機構のベンチャービジネス部門では、地域社会への研究成果発信として、展示会「彩の国ビジネスアリーナ2010」に、「CGM/SNSを用いた行楽情報サービス」、「伸縮ロフトランドクラッチ」及び「地域社会と連携した環境保全型バイオ燃料社会の構築」のテーマで、3件の研究成果の展示を行った。</p>

<p>【189】 [他大学との連携] ⑩ 社会人教員の登用や研究機関との連携大学院の充実、インターンシップの充実などにより、大学教育における社会との連携を図る。</p>	<p>【189】 [他大学との連携] ○ 社会人教員の登用や研究機関との連携大学院の充実、インターンシップの充実などにより、大学教育における社会との連携を図る。</p>	<p>【189】 ○連携大学院の状況 理工学研究科、農学研究科の連携大学院の状況については年度計画【101】の「計画の進捗状況」を参照。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理工学研究科では、外部研究機関等の講師を活用したイブニングセミナーを16回開催した。聴講者数は合計3,676名(延べ人数)と非常に多く、そのうち、理工学研究科博士後期課程学生は144名、博士前期課程学生は2,984名、学部学生は94名となった。 ・教養科目の総合科目「社会人入門特別講義」は、13名の社会人講師を迎え開講した。平成21年度は162名が履修した。 ・農学部では、近接する茨城県立医療大学と連携する教育研究活動(園芸療法)に学生を積極的に参画させた(5名の学生が4回/月、10ヶ月間参加)。また、阿見町及び地域の住民・農家とともに実施する連携事業に学生を参加させる耕作放棄地再生や学校給食の地産地消の取り組みを行い、延べ28名の学生を参加させることができた。このような活動により、学外との交流・連携による教育活動を継続的・着実に推進した。 ・工学部では27名が、理工学研究科博士前期課程(工学系)で18名が夏季休業期間にインターンシップを実施した。 ・理学部、農学部のインターンシップは、年度計画【87-1】【87-2】の「計画の進捗状況」参照。
<p>【190】 ⑪ 北関東4大学連携や近隣3大学連携を継続し、共同で行う事業等で連携する。</p>	<p>【190】 ○ 北関東4大学の大学院連携協定に基づき、引き続き大学院間の教育研究の連携を推進する。</p>	<p>【190】 ・現在のIT技術革新が求める人材育成に不応するため、4大学(茨城大学、宇都宮大学、群馬大学、埼玉大学)が連携して、情報工学、社会経済学、医学から編成される大学院教育プログラム「先端的ITスペシャリスト育成推進プログラム」を平成19年度に試行的に実施し、平成20年度からは同プログラムの発展形として「4大学院連携先進創生情報学教育研究プログラム」を開始した。このプログラムは開始初年度から文部科学省の特別教育研究経費(平成20-22年度)の支援を受け、2年目を迎えた人間創生情報学コースでは、初めての修了生4名(全体で6名修了)を出し、3月に4大学院合同で修了式を行った。IT企業の積極的な協力もあり、長期インターンシップの教育効果も高く、現代のIT産業が求める多面的な視野を有する創造性豊かな人材育成の成果をあげている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・首都圏北部4大学連合(4U)連携事業を実施した。4大学新技術説明会キャラバン隊(第6回:4月、第7回:11月、第8回:1月)を3回、JST首都圏北部4大学発新技術説明会(7月)、弁理士チャレンジ講座(10月)、第2回合同知財実践セミナー(2月)、産学官連携事例講演会(2月) ・近隣3大学(茨城、福島、宇都宮大学)の連携事業を実施した。平成21年度は、本学が当番校として3大学学生支援業務連絡会議を12月に開催した。協議議題は第1分科会が5件、第2分科会が5件、第3分科会が20件と、各大学のこの会議に寄せる期待が伺えた。この会議では、3大学の学生支援業務がどのように行われているか意見交換を行い、業務の見直しや学生サービスの向上に繋げることを目的としている。これらの目的を達成することとして、学生サービス業務の向上のためには担当職員としての意識改革と専門職能力の向上、各種窓口業務の改善の必要性が改めて確認された。
<p>【191】 [留学生等交流] ⑫ 学術交流協定や学生交流協定がかわされている外国の大学と、研究交流をよ</p>	<p>【191-1】 [留学生等交流] ○ 学術交流協定や学生交流協定がかわされている外国の大学と、研究交流をよ</p>	<p>【191-1】【191-2】 平成21年度に新たに以下の学術交流協定等を締結した。 ・インドネシア3大学(ボゴール農科大学(7月)、ウダヤナ大学(12月)、ガジャマダ大学(3月))と大学間交流協定(学術と学生交流)を締結(学部間交流からの発展によるも</p>

り活発にするとともに、交換留学生の増加を図る。

り活発にするとともに、交換留学生の増加を図る。

の)
 ・ベトナム国家大学ハノイ(ベトナム)と大学間交流協定(学術と学生交流)を締結(3月)
 ・静宜大学(台湾)と大学間交流協定(学生交流)を締結(9月)
 ・ペンシルバニア州立大学(アメリカ合衆国)と大学間交流協定(学生交流)を締結(10月)
 以上、新たに3大学と締結したことにより協定締結数は31機関となった。
 ・学術交流協定校・学生交流協定校への教職員の派遣は68名であった。

人文学部では、前年度同様、ベトナム、韓国への学生引率旅費を学部予算の中から確保した。特定の教員に大きく依存した交流を制度化する方策の1つとして、学生引率教員用手引きを作成することとし、関係教員に作成を依頼した。人文学部が中心となって実施している交流協定は、すべて大学間協定となっている。21年度は、大学間協定を前提に中国の北京国際関係学院との交流協定締結の準備を進めてきた。

農学研究科において、インドネシアのボゴール農科大学、ウダヤナ大学、ガジャマダ大学に教員・学生を派遣し、学生間の相互研究発表を行った。また、同3大学から教員・学生を招き、ワークショップを開催して、教育と研究の交流を促進させた。さらに、熱帯農業フィールド実習(1単位)、グループ課題演習(1単位)を同3大学の教員と共同で開講した。また、アジア農業論(1単位)と地球環境化学特論(1単位)を外国人招聘教員によって英語で開講した。インドネシアのボゴール農科大学、ウダヤナ大学、ガジャマダ大学との研究プロジェクトとして、バイオ燃料開発に関する研究を行った。インドネシア以外では、バングラデシュ、スリランカ、ラオスの研究者と共同研究を展開した。本年度、ボゴール農科大学(7月)、ウダヤナ大学(12月)、ガジャマダ大学(平成22年3月)との学部間協定を大学間協定に格上げし、より密接な交流を可能とした。スリランカ・ルフナ大学のシンポジウム(9月)に1教授が参加した。バングラデシュ農業大学での博士論文審査に1教授が審査員として参加した。

留学生センターでは、センターの担当者を中心に、週2回の相談日を決めて、引き続き、海外留学相談を実施した。また、メールによる相談にも対応できるようにした。センターホームページに海外留学者の体験談と協定校に関するより詳しい情報を載せ、情報提供の改善を図った。センターが中心となって、テレビ会議システム(VCS)を利用し、水戸キャンパスを主会場に、日立キャンパス、阿見キャンパスの3会場を結んで海外留学説明会を開催した。昨年度と同様に、前学期と後学期に各1回、計2回開催(5月と10月)した。5月の説明会ではTOEFLの説明も行った。また、大学生協の協力を得て、学内TOEFLテスト(TOEFL-ITP)を前学期と後学期に各1回実施した。前学期の説明会には100名程度の参加者があり、多くの学生に、学生交流協定締結校の紹介など、留学に関する概要的な情報を提供することができた。後学期の説明会にも30名程度の参加者があり、派遣留学に向けての具体的な手続きや準備に関して情報提供を行うことができた。

宇都宮大学との共催による留学生センターシンポジウム2009「大学の国際化に果たす日本語教育の役割」を宇都宮大学において11月に実施した。本シンポジウムには、国内の18大学及び関係機関の留学生教育関係者、留学生等計51名が参加した。本シンポジウムでは2名の講演者による講演をもとに活発な討論が行われ、大学の国際化と日本語教育を捉え直すとともに、今日本語教育が取り組むべきこと、さらに今後考えていかなければならないことなどについて、有益な情報共有、意見交換ができた。

【191-2】

○引き続き忠北大学校との交流事業、仁済大学校との短期交換プログラム、イースタン・ワシントン大学、復旦大学や浙江大學への短期留学などの国際交流事業の充実を図る。

○平成21年度の学生交流協定に基づく交流の実績

- ・派遣：55名(平成20年度：57名)
- ・受入：17名(平成20年度：21名)

そのうち、学生の交流事業の内訳は、以下のとおりである。
 (1) 仁済大学校からの短期留学生を5名受け入れた(昨年度と同数)。茨城大学から短期留学生4名を派遣した。
 (2) 忠北大学校からの訪日団受入れ及び忠北大学校への訪韓団派遣に向けて準備を行ったが、新型インフルエンザ流行の影響を受け、これらの事業の実施は取り止めとなってしまった。
 (3) イースタンワシントン英語語学研修プログラム及び中国短期語学研修に関して、ウェブサイトや留学説明会等で広報活動や支援を行い、英語語学研修には21名(昨年度28名)、

<p>【192】 ⑬ 留学生や外国人研究者を受入れる体制を整備し、受入れを促進する。</p>	<p>【192】 ○ 留学生や外国人研究者を受入れる体制を整備し、受入れを促進する。</p>	<p>中国短期語学研修には12名（昨年度は未実施）の学生が参加した。</p> <p>【192】 ○ 受入体制 ・留学生センターを中心に受入体制をとっている。平成21年度も海外での留学フェアへの派遣を行っている。 ・外国人研究者の受入は、各研究組織で体制をとっている。平成21年度の受入者数は34名（20年度：59名）。</p> <p>○ 平成21年度留学生の入学状況（入学後に留学生となった者を含む） ・全学部25名（20年度：全学部17名） ・全研究科（修士）34名（20年度：36名） ・理工学研究科博士後期課程4名（20年度：7名） ・編入学1名（20年度：2名） 学部でやや増えたが、大学院ではやや減少した。</p> <p>○ 学生国際会議の実施状況は、年度計画【104-2】の「計画の進捗状況」を参照。</p> <p>理学部のホームページにおいては、学部概要の説明を英語及び韓国語で掲載し、留学生や研究者に情報を発信している。平成21年度は、さらに中国語の作成に着手し、平成22年度前半にホームページに掲載できるよう進めている。</p> <p>工学部附属超塑性工学研究センターでは、2名の外国人非常勤研究員及び1名の留学生を受入れた。また、海外から著名な研究者5名、国内から5名の研究者を招聘し国際シンポジウムを開催した（詳細は年度計画【161】の計画の進捗状況）を参照。</p> <p>産学官連携イノベーション創成機構のVB部門の活動として、外国人研究者1名を11月に約2週間招聘した。この研究者（Assist. Prof.）による講演会を開催した。</p> <p>農学研究科の実施状況は、年度計画【191-1】の「計画の進捗状況」を参照。</p>
<p>【193】 ⑭ 国際交流のための資金の充実と効率的運用を図るとともに、国際交流に関わる学生の経済的支援体制を確立する。</p>	<p>【193-1】 ○ 教員、学生の海外への派遣、学会発表、招聘教員による英語による大学院授業、海外の大学との交流等を積極的に推進する。</p> <p>-----</p> <p>【193-2】 ○ 開発途上国の学術交流協定締結校との国際交流を推進し、開発途上国の人材養成に貢献する。</p>	<p>【193-1】 【193-2】 ・海外派遣の実績は、年度計画【191-1】【195】の「計画の進捗状況」を参照。 ・学会発表は、年度計画【104-1】の「計画の進捗状況」を参照。 ・学生国際会議の実施状況は、年度計画【104-2】の「計画の進捗状況」を参照。 ・農学研究科の実施状況は、年度計画【191-1】の「計画の進捗状況」を参照。</p> <p>平成21年度に新たに以下の学術交流協定等を締結した。 ・インドネシア3大学（ボゴール農科大学（7月）、ウダヤナ大学（12月）、ガジヤマダ大学（3月））と大学間交流協定（学術と学生交流）を締結（学部間交流からの発展によるもの） ・ベトナム国家大学ハノイ（ベトナム）と大学間交流協定（学術と学生交流）を締結（3月） ・静宜大学（台湾）と大学間交流協定（学生交流）を締結（9月） ・ペンシルバニア州立大学（アメリカ合衆国）と大学間交流協定（学生交流）を締結（10月） 以上、新たに3大学と締結したことにより協定締結数は31機関となった。</p> <p>人文学部の学術交流状況については、年度計画【191-1】の「計画の進捗状況」を参照。</p> <p>地域連携推進本部では、留学生への奨学金を例年通り支給した。留学生支援団体並びに地域の方々との交流会支援を行った。また、「留学生によるそば打ち体験」の支援を行った。</p>

<p>【194】 〔国際貢献〕 ⑮ 国際共同研究に積極的に参加し、国際社会の要請に応える研究の構築と人材を養成する。</p>	<p>【194】 〔国際貢献〕 ○ 国際共同研究に積極的に参加し、国際社会の要請に応える研究の構築と人材を養成する。</p>	<p>【194】【195】 理学部では、海洋研究開発機構、統合国際深海掘削計画、日本地球掘削科学コンソーシアムに関わる、国際的な研究への参加として、IODP第323次航海（7月～9月）、324次航海（9月～11月）にそれぞれ准教授及び大学院生各1名が乗船するとともに、313次航海のドイツブレーメンでのコア記載と試料採取（11月）に教授1名が参加した。</p> <p>附属超塑性工学研究センターでは、海外の研究機関と以下のような共同研究を進めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小角中性子散乱法（SANS）による超塑性セラミックスの空隙解析とそれらの特性評価（チェコ共和国核物理研究所、ドイツHahn-Meitner研究所、フランスLaue-Langevin研究所との共同研究）（前年度から継続） ・アルミニウム合金系材料のECAP法による組織制御と超塑性（ロシア科学アカデミー金属超塑性問題研究所との共同研究）（前年度から継続） <p>農学部では、インドネシアのボゴール農科大学、ウダヤナ大学、ガジャマダ大学との研究プロジェクトとしては、バイオ燃料開発に関する研究を共同で行った。インドネシア以外では、バングラデシュ、スリランカ、ラオスの研究者と共同研究を展開した。</p>
<p>【195】 ⑯ 本学の教員や学生を海外に積極的に派遣する。</p>	<p>【195】 ○ 本学の教員や学生を海外に積極的に派遣する。</p>	<p>平成21年度における教職員の海外派遣数は395名（昨年度391名）であった。</p> <p>留学生では、センターの担当者を中心に、週2回の相談日を決めて、引き続き、海外留学相談を実施した。また、メールによる相談にも対応できるようにした。センターホームページに海外留学者の体験談と協定校に関するより詳しい情報を載せ、情報提供の改善を図った。センターが中心となって、テレビ会議システム（VCS）を利用し、水戸キャンパスを主会場に、日立キャンパス、阿見キャンパスの3会場を結んで海外留学説明会を開催した。昨年度と同様に、前学期と後学期に各1回、計2回開催（5月と10月）した。5月の説明会ではTOEFLの説明も行った。また、大学生協の協力を得て、学内TOEFLテスト（TOEFL-ITP）を前学期と後学期に各1回実施した。前学期の説明会には100名程度の参加者があり、多くの学生に、学生交流協定締結校の紹介など、留学に関する概要的な情報を提供することができた。後学期の説明会にも30名程度の参加者があり、派遣留学に向けての具体的な手続きや準備に関して情報提供を行うことができた。</p>

- II 大学の教育研究等の質の向上
 (3) その他の目標
 ② 附属学校に関する目標

- 中期目標
 ① 附属学校としての設置目的を踏まえ、教育研究を一層充実する。
 ② 地域の研究課題を踏まえ、公立学校や関係教育機関との連携を一層強化する。

中期計画	平成21年度計画	進捗状況	判断理由（計画の実施状況等）	ウェイト
<p>【196】 ① 教育研究については、様々なテーマについて学部との共同研究を推進する。</p>		IV	<p>「平成20～21年度の実施予定概略」 各学校園において学部教員と連携して研究を推進し、研究成果を公開研究会などを通じて普及を図る。</p> <p>（平成20年度の実施状況概略） 各学校園において公開研究会を行い、水戸市を始め茨城県内外の多くの学校から参加者を得て、成果を地域に普及・還元できた。特に、附属中学校では教育学部の共同研究者とともに年間を通じて教科・領域ごとに研究内容・授業方法を研究・検討してきた内容をもとに、14人の学部研究助言者並びに茨城県教育委員会から10人の講師を招き、2日間に亘り公開授業研究会を開催し熱心な研究協議を行った。さらに文部科学省の研究開発学校（平成18～20年度）として研究開発課題「社会をつくる意欲と力をはぐくむカリキュラムの開発」のもと、研究実践内容・領域の授業・研究成果について公表・協議を行った。いずれも県内外公立学校、教育委員会、私立大学等の学生、教育に関心のある方々と多岐にわたる参加者があった。</p>	
	<p>【196】 ○ 様々な教育研究課題について学部との共同研究を推進する。また、研究成果を地域学校に普及・還元する。</p>		<p>（平成21年度の実施状況） 【196】 ① 附属学校園では、全体で9回の公開研究会（公開授業研究会）を開催し、茨城県内外の教育関係者1,677名が参加した。また、教育学部教員と附属学校園教員との間で、33件の共同研究が行われた。内訳は、幼稚園3件、小学校10件、中学校14件、特別支援学校4件と小学校・中学校については、大学院GP関連で1件、「ことばの力」（学部授業）関連で1件である。 ② 教育学部と附属学校の研究協力体制を確立する第一歩として、平成21年6月～7月にかけて、教科あるいは領域別の教員交流会を実施した。教育学部・附属学校園双方で80%以上の教員が参加し、交流を深めると共に、研究や教育実習における協力について話し合った。 ③ 教育研究高度化のための支援体制整備事業により、附属教育実践総合センターに非常勤職員を1名、各附属学校園に非常勤教員を1名ずつ配置し、教育学部と附属学校園における研究活動を仲立ちする任務を果たした。 ④ 附属学校園教員と教育学部教員による共同研究の実質化を図るための環境作りを行いつつ、平成22年度から附属小学校の前副校長（平成22年3月退職）を附属教育実践総合センターの客員教授に任命し、附属学校担当副学部長とともに、教育学部と附属学校園との組織的で密接な共同研究実施体制の構築を行うこととした。</p> <p>（附属幼稚園） ① 幼児教育に関心のある教育学部教員と附属幼稚園教員との交流会を初めて行い、附属幼稚園からは常勤の90%の教員が参加した。この交流会では、現状や課題を出し合うことができ、双方にとって有意義な交流会となった。 ② 例年以上に教育学部教員との連携を図り、研究を進めることができた。附</p>	

		<p>属幼稚園研究紀要25に附属幼稚園教員と教育学部教員による3件の共同研究の成果を掲載することができた。</p> <p>③ 平成21年度においても、未就園児とその保護者を対象とした子育て支援（コミュニティ広場）を継続的に実施した。この子育て支援には、附属幼稚園の全教員が参加し、2歳児対象は年4回で参加人数231組、3歳児対象は1回で21組と多数の参加者を得ることができた。教員が子どもとかわる姿を見せることで、保護者にかかわり方を学んでもらったり、相談に応じたりした。子育て講座は、園児の保護者が受講するもので、年4回実施（参加者460名）しており、保護者の学びの場を提供することができた。この子育て講座には、附属幼稚園教員だけでなく、教育学部教員3名が講師として参加（年4回のうち3回）した。また、預かり保育をし、参加者がゆつくりと学べる環境を整えた。</p> <p>④ 子育て相談を兼ねて、保護者対象にアッセンブリーを年間30回実施し、保護者290名が参加した。</p> <p>その他附属幼稚園の公開研究会（公開授業研究会）等の実施状況は、年度計画【201】の「計画の実施状況等」を参照。</p> <p>（附属小学校） 平成21年度に2回の公開授業研究会を以下のとおり開催した。</p> <p>① 平成21年6月に「自分づくり」を支える教育活動の創造（1年次）－他とのかかわり合いを通して－をテーマに、教育学部教員4名が講師として参加し、授業公開や研究協議会・講演会を実施し、412名が参加した。新しい教育の方向を見定めた先進的な教育活動を公開することができた。</p> <p>② 平成22年1月に教育学部教員14名を研究アドバイザーとして、授業公開を中心にした公開授業研究会（国語、社会、算数、理科、音楽、図工、家庭、体育、英語活動）を実施し、205名が参加した。</p> <p>③ 参加者アンケートでは「授業展開が参考になった」「新教材が実践に生かせる」等の好意的な意見・感想が大半で、多くの参加者に何らかの成果を持って帰っていただけたと考えられる。</p> <p>（附属中学校）</p> <p>① 公開研究会、教科組織、個々の研究課題について、教育学部教員と協力して共同研究を進めた。</p> <p>② 教育学部教員と公立学校教員、附属学校教員で、20年度末に設置した、恒常的に共同研究体制の構築を図りつつ、教育課題の解決を目指す「授業づくり研究会」では平成21年度において、新学習指導要領を見据えた授業づくりについて教材開発・実践研究を行い、公開研究会において授業を公開し、年度末に成果と課題をまとめた。なお、「授業づくり研究会」は平成21年度は64回開催し、延べ352名が参加した。教育学部教員は29名が参加した。</p> <p>③ 附属中学校教員・教育学部教員との研究成果を茨城県内外の学校に普及・還元するため、公開授業研究会を5月（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、英語、道徳、特別活動：参加者379名）と2月（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、英語、道徳、特別活動、保健指導：参加者219名）に開催し、公開授業、分科会を実施した。その際に、公開研究会の改善を図る目的で参加者アンケートを行い、参加者の約1割の51名から回答を得た。感想欄には「参考になった/勉強になった/母校でも実践してみたい」などの意見を約96%の参加者が記述しており、地域の教育課題の解決に対して相当程度、貢献していることが伺える。</p> <p>（特別支援学校） ・特別支援学校の実施状況は、年度計画【201】【202】の計画の実施状況等を参照。</p>
<p>【197】 ② 学部教員の専門分野を生かした教材開発や指導法についての共同研究を推進する。</p>		<p>Ⅲ 「平成20～21年度の実施予定概略」 学部教員の専門分野を生かし、幼児教育が直面している課題について事例検討を行う。幼稚園では、各学期1回程度、教育学部教員と連携した検討会を行う。</p>

			<p>(平成20年度の実施状況概略) 各附属学校園、特に幼稚園において、保育上の課題のある園児を対象に、教育学部の専門の研究者の協力を得て月1回の事例検討会を行うなど、指導法の助言を受けたり事例研究などを行った。また、附属小学校では、特別支援の必要な児童について幼稚園から引き継ぎ、教育学部教員の指導を受けながら、本人の観察とその後の事例検討会を実施した。附属中学校においても特別支援を要する生徒の教育相談を、附属特別支援学校教員と行った。</p>
	<p>【197】 ○ 学部教員と連携した教育相談を充実するとともに学部教員の専門分野を活かし、教育が直面している今日的課題を明確にすることによって、これに対応できる教材開発や指導法の共同研究を継続する。</p>		<p>(平成21年度の実施状況) 【197】 (附属幼稚園) ① 教育学部教員が各学期に1回以上来園し、実際に保育活動を参観して、教育相談、事例検討、教材開発や指導法の共同研究に参加した。観察内容をもとに、問題のある幼児への援助の方法や保護者への対応について附属幼稚園教員と討論・検討を行った。 ② 教育学部教員と附属幼稚園の全教員で事例検討会を行い、気になる幼児の援助の方法や保護者への対応などを検討してきた。このことを充実させてきたことから、気になる幼児への適切な援助が見いだせるようになってきた。また、附属幼稚園教員は、幼児の発達を捉える理解力もつけてきている。</p>
<p>【198】 ③ 大学院生や学部学生との連携も図り、少人数指導やチームティーチング指導などの在り方を検討する。</p>		<p>Ⅲ</p>	<p>「平成20～21年度の実施予定概略」 附属中学校では、少人数指導や個人指導に関する実践的研究活動を推進する。大学院生・学生等による学習支援については、教育学部と組織的に対応するシステム作りを行う。</p> <p>(平成20年度の実施状況概略) 附属中学校では、学部教員、大学院生などの協力の下、文部科学省の研究開発学校（平成18～20年度）の研究課題と関連した少人数指導や個人指導を実践し、その指導法を深めた。その際に、教育学部の組織的対応により大学院生・学生等による学習支援を実現した。</p>
	<p>【198】 ○ 少人数指導、個人指導、チームティーチング指導などの有効性を再確認し、第2期中期計画期間での教育実習改革（少人数指導等の導入）の準備をする。</p>		<p>(平成21年度の実施状況) 【198】 教育実習中に、一部ではあるが実習生に少人数指導や個人指導・チームティーチングを体験させた。また、学部生、大学院生、学部及び附属学校教員が連携したチームティーチングを行った。少人数指導、個人指導、チームティーチング指導などの必要性、学生への指導手順などを教育実習委員会や附属学校委員会とは十分に検討できていないが、教育学部教員の理解があって実施推進がなされている。</p>
<p>【199】 ④ 研究・教育実践成果を紀要にまとめたり、公表したりすることを通して、教育課題の解決に資する。</p>		<p>Ⅲ</p>	<p>「平成20～21年度の実施予定概略」 引き続き実施予定</p> <p>(平成20年度の実施状況概略) 附属学校園の教育・研究活動の成果は、学部教員と連携のもとに学部紀要や附属教育実践総合センター紀要に発表した。</p>
	<p>【199】 ○ 研究・教育実践成果を紀要にまとめたり、公表したりすることを通して、教育課題の解決に資する。</p>		<p>(平成21年度の実施状況) 【199】 附属学校園の教育・研究活動の成果を、学校園のもつ研究紀要に発表し、教育学部教員との共同研究を、教育学部附属教育実践総合センター紀要に発表した。特筆すべきは、教育学部教員と特別支援学校の共同研究成果を、平成19年11月から21年1月にかけて「特別支援教育の子ども理解と授業づくり」と題する6冊の本として黎明書房から公刊したことである。</p>

<p>【200】 ⑤ 県教育委員会をはじめとする関係教育機関との連携のともと、人事にかかる諸条件を整備し、公立学校等の人事交流を円滑に進めるとともに教員の資質向上を図る。</p>	<p>IV</p>	<p>「平成20～21年度の実施予定概略」 引き続き実施予定</p> <p>(平成20年度の実施状況概略) 平成20年度の公立学校からの採用者に対し、公立学校において受けていた給与を基礎として格付けを行い、格差の是正を図った。</p> <p>(平成21年度の実施状況) 【200】 平成20年度同様、平成21年度の公立学校からの採用者についても、公立学校において受けていた給与を基礎として格付けし、給与格差の是正を継続した。さらに、平成19年度以前の公立学校からの採用者についても、平成20年度からの採用者と同様に、公立学校において受けていた給与を基礎として基本給の決定を見直し、平成21年4月の給与からは正した。</p>
<p>【201】 ⑥ 附属幼・小・中にあるのはこれからの新しい教育内容や指導法の在り方等、幼小中学校の課題を解決するための先導的な役割を果たし、地域の教育力向上のための研修機会を提供する。</p>	<p>IV</p> <p>【201】 ○ 公立学校の抱える教育的ニーズに応えられるような研究テーマを設定し、地域の教育力向上のための公開研究会及び授業研究会を引き続き開催する。</p>	<p>「平成20～21年度の実施予定概略」 公立学校の抱える教育的ニーズに応えられるような研究テーマを設定し、地域の教育力向上のための公開研究会及び授業研究会を引き続き開催する。</p> <p>(平成20年度の実施状況概略) 公開保育・講演会・研究発表会・研修会などを多数実施し、公立学校の抱える教育的ニーズに応えた。附属幼稚園では、公開研究発表会において公立幼稚園のニーズに応じて「研究テーマ：子供の育ちを捉えるために」を新たな視点から捉えて発表し、県内外の多くの参加者に関心をもたれた。附属小学校では、研究主題「人らしく生きる心をはぐくむ教育活動の実践」「自分づくりを支える教育活動の推進」の研究発表が行われ、また、ALTを活用した授業を公開し、新学習指導要領に入ってくる外国語活動についての方向性を示した。附属中学校では、県内外の教員、学生等の参加を得て、教科・道徳・特別活動について授業公開・研究協議等がなされた。附属特別支援学校では、学部教員と本校教員が共著で出版した書籍（「障害特性に応じた指導と自立活動、障害児の職業教育と作業学習」）は、新学習指導要領で新たに取上げた自立活動の「人間関係の形成」や高等部の「職業教育の充実」に視点を当てたものであり、先行した研究の成果を広く全国に発信することができた。</p> <p>(平成21年度の実施状況) 【201】 附属学校園では、全体で9回の公開研究会（公開授業研究会）を開催し、茨城県内外の教育関係者1,677名が参加した。また、教育学部教員と附属学校園教員との間で、33件の共同研究が行われた。 茨城県及び各市町村の教育委員会、教育団体からの要請を受けて、研修会、研究会の講師を附属幼稚園教員延べ7名、附属小学校教員延べ21名、附属中学校教員延べ8名、附属特別支援学校延べ7名が務めた。</p> <p>(附属幼稚園) ① 平成22年2月に「遊びを見つめて一学びを探る」をテーマに、公開研究会を開催した。この研究会には、本園教員11名、茨城県内外の幼稚園教育関係者161名が参加し、公開保育・研究発表・講演会を実施した。参加者のアンケート結果（回収率63.4%）では、公開保育・研究発表について96.1%の参加者が「参考になった（勉強になった）」と回答しており、附属幼稚園の公開研究会が地域の教育力向上に十分貢献していると考えられる。 ② 茨城県及び各市町村の教育委員会、教育団体からの要請を受けて、研修会、研究会の講師を務めた。 ③ 毎年4月に茨城県教育委員会指導主事の研修として、保育参観と副園長による講話を行っている。</p>

		<p>(附属小学校)</p> <p>① 附属小学校の公開研究会（公開授業研究会）の実施状況は、年度計画【196】の「計画の実施状況等」を参照。</p> <p>② 茨城県教育研究会や各市町村教育委員会、公立小中学校からの要請を受けて、研修会の講師を務めたり、当該校での「出前授業」を実施したりして茨城県内の教員の授業力向上に貢献した。</p> <p>③ 小学校の英語教育については、年間計画を作成すると共に、外国語指導助手（ALT）を活用した授業を後期研究会で公開し、新学習指導要領に入ってくる外国語活動についての方向性を示した。</p> <p>④ 新学習指導要領対応の年間カリキュラムを全教科分、年度内に作成した。</p> <p>(附属中学校)</p> <p>① 附属中学校の公開研究会（公開授業研究会）等の実施状況は、年度計画【196】の「計画の実施状況等」を参照。</p> <p>② 公立学校の教員の資質向上のために、公立学校からの要請を受け、研修会の講師を務めた。</p> <p>③ 授業づくり研究会で作成した新学習指導要領で付加された内容の指導参考資料を配付した。</p> <p>(附属特別支援学校)</p> <p>① 公開研究会（公開授業研究会）の実施 ・茨城県教育委員会・教育学部教員との連携による公開研究会（公開授業研究会）を平成21年7月に開催し、234名が参加した。この研究会は、茨城県内の特別支援学校で力を入れている「課題学習」における「一人一人の教育的ニーズに応じるための授業改善」に寄与できるように開催したもので、改善された授業を公開するとともに、授業改善のポイントを提案した。</p> <p>② 各部（小学部、中学部、高等部）ごとの公開研究会の実施 ・各部ごとに教育学部教員と連携し、各部の研究テーマに基づき、公開研究会を実施した。小学部では平成21年12月に「知的障害特別支援学校の自立活動」について、中学部では平成22年1月に「自閉症児のコミュニケーション」について、高等部では平成22年1月に「進路学習」について、研究成果を発表し、それぞれ20名、23名、24名が参加した。公開研究会（公開授業研究会）の内容をさらに充実するために任意の参加者アンケート（回収率：約34%）を実施したところ、約95%が「参考になった」「勉強になった」「実践してみたい」などの意見を記述しており、この分野の教育課題に対して十分な研究成果の公表ができたと考えている。</p> <p>茨城県教育委員会・教育学部教員との連携により、公立学校の課題である授業改善及び新学習指導要領の自立活動に加えられた「人間関係の形成」や高等部における「進路学習」に焦点をあて、公開研究会（公開授業研究会）を実施し、地域の教育力の向上に寄与することができた。</p>
<p>【202】 ⑦ 附属特別支援学校にあっては学部と連携し、多様なニーズをもつ子どもの教育内容・方法を追求し、特別支援教育の充実を目指す。</p>	<p>IV</p> <p>「平成20～21年度の実施予定概略」 イギリスの自閉症児学校の研究者と本校教員において実施した自閉症児の共同研究の成果を、公立学校の教員が参加しやすい夏期休業中に教育学部教員と連携して公開講座等を開催する。</p> <p>（平成20年度の実施状況概略） イギリスの自閉症学校と特別支援学校との共同研究の成果を公開セミナーで発表した。英国から6名のスタッフが来日し、日本側からは教育関係者、福祉関係者、保護者、学生等合わせて137名が参加した。また、本学部教員と特別支援学校教員が講師となり、特別支援教育の専門性向上のため公開講座を実施した。</p> <p>（平成21年度の実施状況） 【202】</p>	<p>○ 学部教員、附属特別支援学校教員が</p>

	<p>連携した研修会を開催する。</p>	<p>夏期休業中に、教育学部教員と連携して特別支援学校の教員が広く地域の特別支援関係者を対象に、「人間関係の形成」についての具体的活動、児童生徒のアセスメントに必要な検査法、教材・教具の3つの公開講座を実施し、特別支援教育の推進に努めた。 ①学部教員の指導を受け、「ムーブメント研修講座」を実施（参加者28名）。 ②学部教員と連携し、「検査法（田中ビネー）研修講座」を実施（参加者44名）。 ③学部教員と連携し、「教材・教具開発講座」を実施（参加者55名）。</p>	
		<p>ウェイト小計</p>	

[ウェイト付けの理由]

II 教育研究等の質の向上の状況に関する特記事項

○教育研究等の質の向上の状況

【教育方法の改善】

(1) 習熟度別クラス編成による初年次基礎教育の充実 (関連年度計画：57、66)

大学初年次の理系基礎科目(数学と物理)及び英語の授業クラスを習熟度別に編成し、大学入学時の異なる達成度に応じた授業の展開により高い教育成果をあげた。この取組は平成17年度特別教育研究経費「4年一貫カリキュラムの実質化と教育の「質保証」の確保」(平成17-19年度)と平成19年度特色GP経費「確かな学力の向上を目指す理系基礎教育」(平成19-21年度)の支援もあり、英語は全学生に、数学と物理は理工系学生に実施された。

(2) 専門の社会的課題の意識化による専門教育達成度の高度化 (関連年度計画：70)

文部科学省の平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム[テーマA]に採択された農学部の「初年次からの食のリスク管理教育プログラム」は、従来、各学科で取組まれてきた「食の安全にかかわる分野」の教育内容を最先端科学の研究成果を含めて再編し、全農学部生を対象として体系化したものである。平成22年4月から開講すべくカリキュラム等の準備を行うとともに、授業科目「食の安全生産販売実習(食品加工体験を含めた)」のための食品加工施設を整備した。

(3) 大学院共通カリキュラムによる広い視野をもった専門的職業人の育成 (関連年度計画：73)

多くの分野の教員が参加し多面的なサステナビリティ学の教育を実施してきた蓄積を下に、地球時代・国際化時代に必要とされる大学院教育として広い俯瞰的な視野を有する専門的職業人を育成するために、大学院共通カリキュラムを編成し、大学院共通科目(17科目)と研究科横断型教育プログラムを平成21年度から実施した。本事業は、文部科学省の特別教育研究経費(平成21-22年度)の支援を得て、国際連合食糧農業機関に所属する研究者を大学院教員として平成21年10月に採用し、国際社会の現実と課題を踏まえた授業により、大学院生の社会認識を深める教育成果をあげている。

(4) 大学院サステナビリティ学教育プログラムの設置と展開 (関連年度計画：73)

大学院教育に「社会の要請に応える新たな教育プログラムを積極的に構築する」計画を掲げ、3年間の準備を経て平成21年度から、4研究科全てに横断型のサステナビリティ学教育プログラムを設置した。この教育プログラムは、地球規模の諸問題の解決のために俯瞰的知識と問題解決の意欲、スキルをもった人材育成を目指すもので、茨城大学で初めて、講義・演習を全ての研究科をまたいで開講した。その結果、他研究科・異分野の学生が交流する機会を与えるなど魅力が高く、初年度にもかかわらず東京大学を幹事とするサステナビリティ学連携研究機構(IR3S)と共通科目の「サステナビリティ学最前線」は、36名の学生が履修し、履修学生との同窓会も生まれた。本プログラムは、東京大学IR3Sの教育プログラム(全て英語による講義)と連動しており、国内5大学の学生の間で討論する機会も生み出した。本教育プログラムの成果は、環境人材コンソーシアムの会議で注目され、環境人材育成の先進的プログラムと認識されている。

(5) フィールドスタディによる大学院教育の充実 (関連年度計画：97)

大学院生が茨城県の主要な「地域産業」等を「地域教育資源」として開発・加工する過程で、院生の課題解決力と企画交渉力および実践的な授業指導力、教科専門力を徹底して鍛錬することを狙って、教育学研究科では、「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」(大学院GP)を実施し、大学院生の地域産業とこれを担う人々への深い洞察力を涵養し、専門的な教育職業人の育成に成果を挙げている。農学研究科では、インドネシアの3大学と共同で熱帯農業を題材とした教育「地域サステナビリティの実践農学教育」(大学院GP)を実施し、地域サステナビリティに関連する分野の外部講師を交えた対話型講義や熱帯農業の海外実習などにより、農業への深い課題認識と多様な実践的観点を養い専門的な農学職業人の育成に成果をあげている。

(6) 大学連携による社会のニーズに応じた人材養成 (関連年度計画：190)

現在のIT技術革新が求める人材育成に応ずるため、4大学(茨城大学、宇都宮大学、群馬大学、埼玉大学)が連携して、情報工学、社会経済学、医学から編成される大学院教育プログラム「先端的ITスペシャリスト育成推進プログラム」を平成19年度に試行的に実施し、平成20年度からは同プログラムの発展型として「4大学院連携先進創生情報学教育研究プログラム」を開始した。このプログラムは開始初年度から文部科学省の特別教育研究経費(平成20-22年度)の支援を受け、平成21年度に初の修了者を出した。IT企業の積極的な協力もあり、長期インターンシップの教育効果も高く、現代のIT産業が求める多面的な視野を有する創造性豊かな人材育成の成果をあげている。

(7) 国際社会で活躍できる学生の育成を目指す国際学生会議の開催 (関連年度計画：104)

茨城大学全研究科の大学院生が主体となり主催する、第5回茨城大学国際学生会議(ISCIU5)を開催し、国際的な企画運営の実践を通して国際社会で活躍する能力と経験を積んだ。平成21年度のテーマを“Why should we learn English?”に設定し、英語による口頭発表(46名)及び海外招待者の講演により盛大な国際会議を成功させ、多くの大学院生に国際的な活動について大きな自信を持たせた。

(8) FDの充実・展開 (関連年度計画：65、72、88)

全学部・学科でFDが実施された。大学教育センターは、各学部のFDを支援・展開させる目的のFDを開催、農学部FDでは、授業改善のみならず、初年次教育・学生支援・卒業生の社会実践など6つの課題についてFD研修会等を5回開催し、教員同士の教育方法、実施体制、授業内容改善の方策等についての共通認識を形成、優れた教育改革を実施し、その成果はGP事業等の採択に繋がるものになってきた。

【学生支援の充実】

(1) 初年次からの学習支援体制の充実 (関連年度計画：89)

多様な学生の要請に対応し、学生に対する学習・生活・相談等の支援・サービス機能の向上と、指導体制の整備を図り、組織的・総合的な学生支援を行っている。初年次対象の少人数ゼミで、カリキュラムの履修コースツリーの理解と専門の学習に必要なスキルを修得させ、学年進行に伴い発生する学習意欲の喪失を

チェックする履修相談を各学期初めに実施している。農学部では、退職した教員OBにより、初年次学生全員に個人面談し、大学で学ぶ内容と目標、学習指針を伝え、同時に学生の悩み相談に応じている。また、初年次合宿セミナーで、学生間、学生と教員間の交流を図り、人的コミュニケーション・ネットワークの形成を期している。

(2) 学習と生活環境の充実及び経済的支援 (関連年度計画：43、137、149、139)

図書館(本館、工学部分館及び農学部分館)及びIT基盤センターの開館時間について、学生からの要望を踏まえ、開館時間の延長(11月から3館統一して、8時30分開館、21時45分閉館(平日)に延長)を試行し、平成22年4月から本格運用することとした。平成17年度より所蔵資料の遡及入力を進めており、平成21年度は、図書(本館所蔵：28,865冊)、製本雑誌(工学部分館所蔵：39,990冊)を入力した。これにより、本学が所蔵する図書や雑誌がオンラインで検索可能となり、教員と学生が研究、学習に必要な図書や論文コピーを迅速に入手することができるようになった。

農学部体育館・課外活動施設の新設、水戸地区学生寮耐震改修、水戸地区国際交流会館改修、水戸地区講堂整備、農学部国際交流会館新設着手などを実施した。平成20年度より茨城大学独自の奨学金制度により、家計急変により学業継続が困難となった学生に経済的支援を行っている。

(3) 就職支援の充実 (関連年度計画：144)

学生就職支援センターは、企業での人事担当経験者を就職相談員に加え、専門のキャリア・カウンセラーを配置し、学生の就職相談体制を整えた。就職先を新規開拓すると共に、各学部固有の就職先の人的・知的財産を活用した就職先の拡大を行った。多面的な就職支援(キャリア教育、就職ガイダンス、公務員就職ガイダンス、留学生就職ガイダンス、大学院生に特化した就職ガイダンス、職務適性テスト)を充実実施し、学生就職活動支援システム「茨ダイCareer Navi」の整備充実を図った。

【研究活動の推進】

(1) 気候変動の影響予測・適応策の研究と政策的貢献 (関連年度計画：150)

平成18年に設置した茨城大学地球変動適応科学研究機関(ICAS)を中心に、サステイナビリティ学研究の一環として、気候変動に関する研究を推進し、大きな成果をあげた。国際的には、温暖化問題に関する最も基本的文献であるIPCC第4次報告書において、ICAS機関長である本学教員が総括執筆者として報告書を執筆した。また、ベトナムとの共同研究(科学技術振興調整費)や南太平洋島嶼国の調査(JST-JICA地球規模課題研究費)に参加し、海面上昇のリスクを示した。国内的には、14研究機関が参加する環境省戦略研究プロジェクトの代表大学として日本への温暖化の影響を定量的に取りまとめ、学術雑誌「地球環境研究」の特集号を発行した。これらの成果は、政府の温暖化対策の資料となると同時に、気候変動への適応策という新しい政策分野を開拓するものであり、平成20年度、21年度においても、引きつづき広くマスコミで報道され、国内外で温暖化問題に対する認識を広めることに貢献した。このような活動を通じて、ICASは、気候変動の影響と適応に関するアジア・太平洋地域の中心的な研究機関の一つと認識されるようになっていく。

(2) フロンティア応用原子科学研究センターにおける研究推進 (関連年度計画：150)

平成20年に設置したフロンティア応用原子科学研究センターを拠点として、茨城県中性子ビーム実験装置を活用した研究(生体プロトン探索、環境材料の構造解析、生体分子変換、量子科学エネルギー材料)を推進し、有機結晶の中性子構造解析に成

功するなど重要な研究成果をあげている。本センターでは、茨城県及び日本原子力研究開発機構からの受託研究、高エネルギー加速器研究機構支援事業費、科学研究費補助金等の外部資金を積極的に獲得し、研究を推進した。

(3) 考古学・歴史研究の推進 (関連年度計画：157)

マヤ文明史を環太平洋の環境文明史の視点から研究するプロジェクト(科学研究費補助金・新学術領域研究：平成21-25年度)を領域代表の青山和夫教授(人文学部)が開始した。磯田道史准教授(人文学部)の歴史研究が「第15回NHK地域放送文化賞」を受賞、藤原貞朗准教授(人文学部)の美術史研究が第26回渋沢・クローデル賞本賞(2009年6月)と第31回サントリー学芸賞(2009年12月)を受賞し、高く評価された。

(4) バイオ燃料開発と環境保全研究の推進 (関連年度計画：156)

スイートソルガムを用いたバイオ燃料開発が、平成21年度環境省「地球環境研究総合推進費」に採択され、バイオ燃料(E10、E3)試走を実施するなど社会的にも注目される研究開発を推進した。文部科学省の特別教育研究経費支援(平成20-22年度)の下に「霞ヶ浦流域環境再生のための総合的な地域生態系機能改善の研究」を推進した。

(5) 宇宙科学研究推進の基盤整備 (関連年度計画：150、167)

KDDI(株)から移譲された大口径パラボラアンテナを用いた宇宙の教育研究を推進するため、平成21年5月に宇宙科学教育研究センターを設置した。国内外のVLBI天文学共同研究と茨城大学独自の2素子干渉計による活動天体研究を推進するため、本センターと理学部が中心となって国立天文台とVLBIグループ大学と共同しつつアンテナの望遠鏡への改造を進めている。また、本センターを活用した学部・大学院教育を実施すると共に、小学校教諭の理科研修や高校生対象の観測実習体験教室、親子科学実験体験教室などにより、科学教育の推進を図っている。さらに、市民対象のIEEE・Milestone受賞記念講演会を開催するなど地域市民への貢献活動を展開している。

(6) 研究推進体制の整備 (関連年度計画：150)

大学として育成すべき研究分野を開拓するために、「茨城大学推進研究プロジェクト認定制度実施要項」を制定し、研究活動の一層の活性化を図った。このプロジェクトには、37件の応募があり、29件を茨城大学推進研究プロジェクトとして認定した。また、先進的又は独創的な研究を実施している研究者の特筆すべき研究成果を称え、その研究成果と研究内容を学内外に広めることにより、教員の研究意欲の向上を図り、もって大学の研究の活性化と更なる発展を目指すことを目的とする「茨城大学学長学術表彰制度実施要項」を制定した。平成21年度は、4名の教員を認定し、学長学術表彰を授与した。

【社会連携・地域貢献・国際交流等の推進】

(1) 産学官連携イノベーション創成機構を設立 (関連年度計画：186、188)

産学連携を強化し、ベンチャービジネスの育成活動を強化するために、共同研究開発センターとベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)を統合して、産学官連携イノベーション創成機構を設立した。

(2) 茨城県北ジオパーク推進協議会の設立 (関連年度計画：181)

茨城県北7市町村が参加し、地質資源の研究成果を地域に還元し、茨城県北地域の振興を図るために、茨城大学が先頭に立って茨城県北ジオパーク推進協議会

を設立し、活動を開始した。

(3) 大学図書館による地域文化への貢献 (関連年度計画：185)

大学所有の各種文化資料及び文化財等を社会に有効に還元し、文化振興に貢献した。「マヤ文明」(青山和夫教授(人文学部))や「茨城の富士山信仰-永井路子の家伝書から」(永井路子)などの一般講演会を開催した。

図書館においては、大学所有の古文書資料を活用し、財団法人水府明徳会や水戸商工会議所等と連携し、地域の歴史を可視化する試みとして「水戸の城下町マップ」と「城下町マップ(幕末版)」を作成した。これらのマップは、市民や市内小中学校等へ約3千部を配布し、地域の教育と観光の現場で効果的に活用された。

(4) 国際交流協定の締結 (関連年度計画：193)

平成21年度に海外の6大学と大学間交流協定を締結した。そのうち、インドネシア3大学(ボゴール農科大学、ウダヤナ大学、ガジャマダ大学)とは、学部間交流協定から大学間交流協定(学術と学生交流)に発展したものであり、ベトナム国家大学(ハノイ)、静宜大学(台湾)及びペンシルバニア州立大学(アメリカ合衆国)とは、新たな締結である。

【その他(他大学等との連携・協力状況)】

(1) 北関東4大学の連携事業 (関連年度計画：190、179)

北関東4大学(茨城大学、宇都宮大学、群馬大学、埼玉大学)が連携し、連携大学院教育「4大学院連携先進創生情報学教育研究プログラム」と、産学官連携戦略展開事業を実施している。

(2) サステイナビリティ学連携研究機構(IR3S) (関連年度計画：73)

東京大学を幹事とするサステイナビリティ学連携研究機構(IR3S)(5大学連合)に参加し、研究及び連携した教育の両面で大きな成果をあげている。

(3) 茨城県立医療大学と東京医科大学との連携 (関連年度計画：154-2)

農学部は、近接する東京医科大学と茨城県立医療大学と連携する教育研究活動を行っている。

(4) 常磐大学との連携 (関連年度計画：126)

人文学部は、常磐大学と連携する教育研究活動を開始した。具体的には、双方の教員が講師となり、共同授業「観光学入門」を開講した。受講生は、平成20年度113名、平成21年度150名であった。

○附属学校について

(1) 学校教育について

○実験的、先導的な教育課題への取組状況

【平成16～20事業年度】

国際交流プロジェクト「日豪リアルタイムビデオ交流プロジェクトによる国際理解と語学修得促進」により、平成16年度に附属小学校が、17年度に附属中学校が、それぞれオーストラリア、メルボルンの学校およびタスマニア島のロゼッタハイスクールとのTV会議システムを使った日豪学校交流授業を行った。それぞれ、16回と5回実施した。

附属幼稚園では、平成17年度に「5歳児の協同的学びと対話的保育」活動のとりまとめを行い、出版した。

特別支援学校では、平成18年度にイギリスの自閉症学校校長と大学教員が講師となり、「イギリスにおける自閉症児への支援」をテーマに公開セミナーを開催した。近隣の教育委員会からの後援を受け、費用は社会連携事業会からの補助により実施した。平成19年度には、イギリスの自閉症学校と共同研究を行い、イギリスで実践しているムーブメントを本校教員及び学部学生が直接伝授してもらう貴重な機会となった。平成20年度には、英国の自閉症学校との共同研究の成果を公開セミナーで発表した。英国から6名を招聘し、日本側の関係者137名が参加して行われた。参加者から地域の特別支援教育のニーズに対応した取組みとして、高い評価を得た。

【平成21事業年度】

附属中学校において、教育学部教員主導で、新しい学習指導要領で加わった部分の教材の開発や「実践事例」を作成し、公開研究会で広く公立学校関係者に公開した。

附属小学校において、新学習指導要領対応の年間カリキュラムを全教科分、年度内に作成した。これは平成22年6月の公開研究会で公開し、公立学校のカリキュラム作成に寄与する予定である。

○地域における指導的あるいはモデル的学校となるような、教育課題の研究開発の成果公表等への取組状況

【平成16～20事業年度】

各附属学校園において公開研究会を毎年実施し、各附属学校園とも多数の参加者がある。法人化直後は、各附属学校園で年1回、公開研究会を実施していたが、教科ごとや全体会の開催に分けるなど、公立学校教員のニーズを汲み取りながら、複数回の開催へ移行しつつある。

- ・附属小学校においては公開授業研究会の際に、文部科学省の担当官や作家に講演を依頼しており、参加者に非常に好評である。
- ・附属小学校が独自に開発した英語教育プログラムは担当ALTが平成21年10月に米国・フィラデルフィア（テンブル大学）で開催された「異文化交流教育システム研究会」において『外国における英語教育』というタイトルで講演を行っており、

参加者からは、子どもの主体性を重視した英語活動である、という点で反響は大きく、附属小学校の取り組みが、国際的にみても一定水準の水準を確保したものであるといえる。

附属中学校では、平成18～20年度の文部科学大臣指定の研究開発学校として「社会をつくる意欲と力をはぐくむカリキュラムの開発」に取組み、毎年度報告書を作成するとともに、公開研究会を開催し、広く研究成果を公表した。また、平成20年度末には、教育学部教員と公立学校教員、附属学校教員とで恒常的に共同研究体制の構築を図りつつ、教育課題の解決を目指す「授業づくり研究会」を設置した。

【平成21事業年度】

全ての附属学校園で公開研究会（公開授業研究会）を開催し、茨城県内外の教育関係者1,677名が参加した。この公開研究会は、各附属学校園及び教育学部の教員との研究成果を地域の学校・幼稚園に普及・還元することを目的としている。また、公開研究会等は、茨城県教育委員会等の研修の場にも供している。

附属幼稚園では、平成22年2月に「遊びを見つめてー学びを探るー」をテーマに公開研究会を開催した。この研究会には、本園教員11名、茨城県内外の幼稚園教育関係者161名が参加し、公開保育・研究発表・講演会を実施した。参加者のアンケート結果（回収率63.4%）では、公開保育・研究発表について96.1%の参加者が「参考になった（勉強になった）」と回答しており、附属幼稚園の公開研究会が地域の教育力向上に十分貢献していると考えられる。

附属小学校では、平成21年度に2回の公開授業研究会を以下のとおり開催した。

- ・平成21年6月に「自分づくり」を支える教育活動の創造（1年次）ー他とのかかわり合いを通してー」をテーマに、教育学部教員4名が講師として参加し、授業公開や研究協議会・講演会を実施し、412名が参加した。新しい教育の方向を見定めた先進的な教育活動を公開することができた。
- ・平成22年1月に教育学部教員14名を研究アドバイザーとして、授業公開を中心に教科ごとに公開授業研究会を実施し、205名が参加した。
- ・参加者アンケートでは「授業展開が参考になった」「新教材が実践に生かせる」等の好意的な意見・感想が大半で、多くの参加者に何らかの成果を持って帰っていただけたと考えられる。

附属中学校では、平成21年5月と平成22年2月に公開授業研究会を開催し、教科ごとに公開授業及び分科会を実施し、合わせて598名が参加した。この際に、授業づくり研究会で作成した新学習指導要領で付加された内容の指導参考資料を配付した。公開研究会の改善を図る目的で参加者アンケートを行い、参加者の約1割の51名から回答を得た。感想欄には「参考になった/勉強になった/自校でも実践してみたい」などの意見を約96%の参加者が記述しており、地域の教育課題の解決に対して相当程度、貢献していることが伺える。

附属特別支援学校では、学校全体と各部（小学部、中学部、高等部）ごとの公開授業研究会を以下のとおり開催した。

- ・平成21年7月に茨城県教育委員会と教育学部教員との連携による公開研究会（公開授業研究会）を開催し、「課題学習」における授業改善について公開した。この研究会には、234名が参加した。

- ・各部署ごとに教育学部教員と連携し、小学部では平成21年12月に「知的障害特別支援学校の自立活動」について、中学部では平成22年1月に「自閉症児のコミュニケーション」について、高等部では平成22年1月に「進路学習」について、研究成果を発表し、それぞれ20名、23名、24名が参加した。
- ・公開研究会（公開授業研究会）の内容をさらに充実するために任意の参加者アンケート（回収率：約34%）を実施したところ、約95%が「参考になった」「勉強になった」「実践してみたい」などの意見を記述しており、この分野の教育課題に対して十分な研究成果の公表ができたと考えている。

- ・教育学部教員と附属学校教員との間で、33件の共同研究が行われた。内訳は、幼稚園3件、小学校10件、中学校14件、特別支援学校4件と小学校・中学校については、大学院GP関連で1件、「ことばの力」（学部授業）関連で1件である。

- ・茨城県及び各市町村の教育委員会、教育団体からの要請を受けて、研修会、研究会の講師を附属幼稚園教員延べ7名、附属小学校教員延べ21名、附属中学校教員延べ8名、附属特別支援学校教員延べ7名が務めた。

(2) 大学・学部との連携

○大学・学部の間における附属学校の運営等に関する協議機関等の設置状況

【平成16～20事業年度】

- ・平成15年度に「茨城大学教育学部附属学校委員会」を設置している。この委員会では、教育学部と各附属学校園の連携を推進するため、必要な事項を審議することを目的としている。この委員会の審議事項は、「茨城大学教育学部附属学校委員会規則」第3条に、将来構想に関する事項、教育実践に関する事項、共同研究に関する事項等と規定している。なお、重要案件は教育学部教授会の承認事項としている。

- ・教育学部に、平成20年4月から附属学校担当副学部長（附属学校長経験者）を置き、教育学部附属学校委員会の委員長とし、教育学部と附属学校園との連携を強化した。

- ・教育学部附属学校委員会の設置当初は、年2回の開催に止まっていたが、平成20年度には年4回（ほかにメール会議多数）と協議機関として十分な活動を行った。

- ・教育学部附属学校委員会の構成員は、附属学校担当の副学部長、附属学校の校長・園長及び副校長・副園長、教育学部将来計画委員会委員長、教育実習委員会委員長、附属教育実践総合センター長、教育学研究科専門委員会委員長及び事務長である。

- ・平成19年度からは、大学執行部と附属学校の校長・園長及び副校長・副園長、教育学部関係者との年度計画に関する意見交換会を行うようにし、大学と附属学校園の運営に関する協議も定期的に行う体制とした。

【平成21事業年度】

- ・教育学部附属学校委員会（学部－附属：平成21年度4回開催）や年度計画に関する意見交換会等（大学－附属）は適切に開催した。

- ・平成20年度からの学校評価の導入に伴い、附属学校担当副学部長と大学の評価室との間で協議を行うことが増加し、平成21年度は4回の協議を行った。

- ・教育研究高度化のための支援体制整備事業により、附属教育実践総合センターに非常勤職員を1名、各附属学校園に1名ずつの非常勤教員を配置し、教育学部と附属学校における研究活動を仲立ちする任務を果たした。

○大学・学部の教員が一定期間附属学校で授業を担当したり、行事に参加したりするようなシステムの構築状況

【平成16～20事業年度】

- ・附属中学校では、平成18年度から開始した「講座選択学習」枠で教育学部教員が講師を務めた。例えば、平成20年度は9名の学部教員が講師を担当した。また、平成20年度からは、授業づくり研究会がすべての教科で発足した。これは、教育学部教員と附属学校教員と公立学校教員とが集まり、授業改善や教材開発を協働で進めるものである。また、原則的に、各附属学校の授業実践研究では、学部教員が対応する教科の研究グループに参画している。

【平成21事業年度】

- ・附属中学校が主催する「授業づくり研究会」は、64回開催し、教育学部教員は29名が参加した。

- ・教育学部教員（障害児教育）が、附属幼稚園に、定期的に訪問し、問題行動のある幼児などへの対応について、助言を行っている。

- ・教育学部教員（理科）が、附属小学校及び中学校において、学習指導要領に定められた特定の単元の授業を担当している。また、別の教育学部教員（理科）が、チームティーチングで授業補助を行ったり、教育学部教員（国語）が書写の指導を担当するなど、多くの授業で学部教員が授業に参加した。

- ・大学院GPでは、受講生が附属小・中学校で実際に授業を行う課題があるが、その際にはGPを運営する教育学部教員と附属学校教員が協働で取り組んだ（合計8時間）。

○附属学校の大学・学部のFDの場としての活用状況

【平成16～20事業年度】

- ・各附属学校での公開研究会には、講師や助言者以外の大学教員も参加するようにしており、教員養成学部の教員としての資質向上を図ることとした。

【平成21事業年度】

- ・平成21年の6月～7月にかけて、教科あるいは領域別の教員交流会を実施した。教育学部・附属学校双方で80%以上の教員が参加し、交流を深め、相互理解を図るとともに、研究や教育実習における今後の在り方等について議論し、連携関係の改善を図った。この交流会は、目的の全てが教育学部と附属学校との連携関係強化のためのFDという位置づけだけではないものの、平成22年度以降も実施し、

定期的に大学学生への教育力向上、生徒児童等への教育力向上を図ることとした。

①大学・学部における研究への協力について

○大学・学部の教育に関する研究に組織的に協力する体制の確立及び協力の実践状況

【平成16～20事業年度】

・教育学部では、平成20年度に附属学校担当副学部長を置き、各附属学校園との連携を担当させた。

・附属学校の運営等の協議機関である上記「附属学校委員会」規則第3条において、「共同研究に関する事項」を審議事項としている。

・附属学校側でも、研究主任を長とする共同研修推進委員会あるいは研究推進委員会を設置し、共同研究のための調整を行っている（教員数が少なく委員会の設置が難しい幼稚園でも研究主任を中心に調整を行っている）。

【平成21事業年度】

・教育研究高度化のための支援体制整備事業により、附属教育実践総合センターに非常勤職員を1名、各附属学校園に1名ずつの非常勤教員を配置し、教育学部と附属学校園における研究活動を仲立ちする任務を果たした。

・このような共同研究の実質化を図るための環境作りを行いつつ、平成22年度からは附属小学校の前副校長（平成22年3月退職）を附属教育実践総合センターの客員教授に任命し、附属学校担当副学部長とともに、教育学部と附属学校園との組織的で密接な共同研究実施体制の構築を行うこととした。

○大学・学部と附属学校が連携して、附属学校を活用する具体的な研究計画の立案・実践状況

【平成16～20事業年度】

・研究を目的として附属学校園を活用する教育学部教員の数は年々増加し、平成20年度では附属学校園ごとに10名程度である。研究テーマは教科教育的なもの、学校運営に関わるもの等、多岐にわたる。

・実践の成果として、これまで多くの著書、論文を発表しているが、平成20年度においては、教育学部教員と附属特別支援学校教員の共著による書籍を2冊公刊した（『障害特性に応じた指導と自立活動（新学習指導要領の実践展開）』、『障害児の職業教育と作業学習（新学習指導要領の実践展開）』）。

【平成21事業年度】

・教育・研究に関する連携推進委員会（仮称）を平成22年度中に設置することとした。

②教育実習について

○大学・学部の教育実習計画における、附属学校の活用状況

【平成16～20事業年度】

・平成16～20年度の附属学校園における教育実習の受入人数

	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	合計
附属幼稚園	9	20	20	19	24	92
附属小学校	141(1)	142	149	159	154	745(1)
附属中学校	102(7)	98(5)	97(4)	107(8)	104(6)	508(30)
附属特別支援学校	53	65	53	59	53	283
合計	305(8)	325(5)	319(4)	344(8)	335(6)	1,628(31)

※受入人数は実学生数で、括弧書きは他大学の学生数で内数。
 ※附属幼稚園の受入人数は、2週間から3週間未満での受入数。
 ※附属小学校の受入人数は、2週間から3週間未満及び4週間から5週間未満での受入数の合計。
 ※附属中学校の受入人数は、2週間から3週間未満、3週間から4週間未満及び4週間から5週間未満での受入数の合計。
 ※附属特別支援学校の受入人数は、2週間から3週間未満での受入数。その他教育実習以外の受入として「体験実習」がある。

・教育実習を実施した学生数の内訳
平成16年度

	教育学部の学生	左記以外の学生	合計
附属学校園のみにおいて教育実習を実施した学生数	264		264
附属学校と公立学校等両方で教育実習を実施した自大学の学生数	33		33
公立学校等のみで教育実習を実施した自大学の学生数	357		357
合計	654		654

附属学校園で教育実習を実施した他大学の学生数		8	
------------------------	--	---	--

平成17年度

	教育学部の学生	左記以外の学生	合 計
附属学校園のみにおいて教育実習を実施した学生数	262		262
附属学校と公立学校等両方で教育実習を実施した自大学の学生数	58		58
公立学校等のみで教育実習を実施した自大学の学生数	379		379
合 計	699		699
附属学校園で教育実習を実施した他大学の学生数		5	

平成18年度

	教育学部の学生	左記以外の学生	合 計
附属学校園のみにおいて教育実習を実施した学生数	264		264
附属学校と公立学校等両方で教育実習を実施した自大学の学生数	51		51
公立学校等のみで教育実習を実施した自大学の学生数	346		346
合 計	661		661
附属学校園で教育実習を実施した他大学の学生数		4	

平成19年度

	教育学部の学生	左記以外の学生	合 計
附属学校園のみにおいて教育実習を実施した学生数	286		286
附属学校と公立学校等両方で教育実習を実施した自大学の学生数	50		50
公立学校等のみで教育実習を実施した自大学の学生数	378		378
合 計	714		714
附属学校園で教育実習を実施した他大学の学生数		8	

平成20年度

	教育学部の学生	左記以外の学生	合 計
附属学校園のみにおいて教育実習を実施した学生数	261		261
附属学校と公立学校等両方で教育実習を実施した自大学の学生数	68		68
公立学校等のみで教育実習を実施した自大学の学生数	423		423
合 計	752		752
附属学校園で教育実習を実施した他大学の学生数		6	

【平成21事業年度】

・平成21年度の各附属学校園における教育実習の受入人数

	21年度
附属幼稚園	17
附属小学校	155(2)
附属中学校	96(3)
附属特別支援学校	62
合 計	330(5)

※受入人数は実学生数。

※附属幼稚園の受入人数は、2週間から3週間未満での受入数。

※附属小学校の受入人数は、2週間から3週間未満及び4週間から5週間未満での受入数の合計。

※附属中学校の受入人数は、2週間から3週間未満、3週間から4週間未満及び4週間から5週間未満での受入数の合計。

※附属特別支援学校の受入人数は、2週間から3週間未満での受入数。その他教育実習以外の受入として「体験実習」がある。

・教育実習を実施した学生数の内訳
平成21年度

	教育学部の学生	左記以外の学生	合 計
附属学校園のみにおいて教育実習を実施した学生数	251		251
附属学校と公立学校等両方で教育実習を実施した自大学の学生数	74		74
公立学校等のみで教育実習を実施した自大学の学生数	410		410
合 計	735		735
附属学校園で教育実習を実施した他大学の学生数		5	

○大学・学部の教育実習の実施協力を行うための適切な組織体制の整備状況

【平成16～20事業年度】

・教育実習の企画・運営を行う組織として、「茨城大学教育学部教育実習委員会」を従前から設置し、教育実習の実施計画に関する事項等を審議している。この委員会には、各附属学校園からは校長及び園長並びに教員（教育実習主事若しくは教育実習主任）1名ずつが委員として参加している。

・教育実習の実施計画及びそれに伴う地域の教員養成に関する諸事項について協議する組織として、「茨城大学教育学部教育実習運営協議会」を従前から設置している。この協議会には、各附属学校園から校長及び園長が委員として参加している。また、「茨城大学教育学部教育実習規則」において実習校の行うべき業務が規定されている。

・附属学校側でも、教育実習主事を中心に教育実習委員会を設置し、教育学部の実施計画等に基づく具体的実習計画、評価基準の作成等を行っている（教員数が少なく委員会の設置が難しい幼稚園でも教育実習主任を中心に大学と調整しつつ実施している）。

【平成21事業年度】

・円滑な大学主導の教育実習を实行するために、茨城大学教育学部教育実習委員会や教育学部教育実習運営協議会等を定期的に開催した。

・別項でも記述したが、平成22年度から附属小学校前副校長（平成22年3月退職）が附属教育実践総合センターの客員教授として、教育学部と附属学校園とのコーディネート業務に当たることとしている。

○大学・学部と遠隔地にある附属学校においても支障が生じない教育実習の実施状況

【平成16～20事業年度】 （該当なし）

【平成21事業年度】 （該当なし）

(3) 附属学校の役割・機能の見直し

○附属学校の使命・役割を踏まえた附属学校の在り方に関する検討状況

【平成16～20事業年度】

・平成20年10月に附属学校の設置目的を見直し、各附属学校は、大学による各種教育の理論的、実践的研究に協力すること、学部学生の教育実習や授業研究等の教員養成に必要な実地教育を行うとともに、教職に関する教育に寄与すること、茨城県内外の教育機関に対して広く研究成果を還元するとともに、茨城県及び県内自治体との人事交流協定に基づいて教員の研修を行い、地域の教育力向上に寄与することや、学校教育法の定めるところにより、これらの目的に沿った保育あるいは教育を行うことを確認した。

【平成21事業年度】

・教育学部と附属学校園との組織的で密接な共同研究実施体制を整備するために、教育・研究に関する連携推進委員会（仮称）を平成22年度中に設置することとした。平成22年度から附属小学校前副校長（平成22年3月退職）を附属教育実践総合センターの客員教授に任命し、附属学校担当副学部長と共同して同委員会を運営することとした。

・教育学部附属学校委員会には、教育学部の将来計画委員会委員長が参画していることから、今後のカリキュラム改革に向けて、附属学校園の活用の仕方についても議論を行っている。

Ⅲ 予算（人件費見積もりを含む。）、収支計画及び資金計画

※ 財務諸表及び決算報告書を参照

Ⅳ 短期借入金の限度額

中期計画	年度計画	実績
1 短期借入金の限度額 20億円 2 想定される理由 運営費交付金の受入れ遅延及び事故の発生等により緊急に必要となる対策費として借り入れることも想定される。	1 短期借入金の限度額 19億円 2 想定される理由 運営費交付金の受入れ遅延及び事故の発生等により緊急に必要となる対策費として借り入れることも想定される。	該当なし

Ⅴ 重要財産を譲渡し、又は担保に供する計画

中期計画	年度計画	実績
○ 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画はない。	○ 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画 重要な財産を譲渡し、又は担保に供する計画はない。	該当なし

Ⅵ 剰余金の使途

中期計画	年度計画	実績
○ 決算において剰余金が発生した場合は、教育研究の質の向上及び組織運営の改善に充てる。	○ 決算において剰余金が発生した場合は、教育研究の質の向上及び組織運営の改善に充てる。	平成22年度に繰越

Ⅶ その他 1 施設・設備に関する計画

中期計画			年度計画			実績		
施設・設備の内容	予定額(百万円)	財源	施設・設備の内容	予定額(百万円)	財源	施設・設備の内容	予定額(百万円)	財源
<ul style="list-style-type: none"> ・(文京2)校舎 ・小規模改修 	総額 416	施設整備費補助金 (416)	<ul style="list-style-type: none"> ・文京2 学生寄宿舎改修 ・文京2 総合教育棟改修(教育系) ・中成沢 基礎研究棟改修(先端材料) ・中成沢 応用研究棟改修(先端材料) ・小規模改修 	総額 1,176	施設整備費補助金 (1,137) 国立大学財務・経営センター施設費補助金 (39)	<ul style="list-style-type: none"> ・文京2 学生寄宿舎改修 ・文京2 総合教育棟改修(教育系) ・中成沢 基礎研究棟改修(先端材料) ・中成沢 応用研究棟改修(先端材料) ・小規模改修 	総額 1,268	施設整備費補助金 (1,229) 国立大学財務・経営センター施設費補助金 (39)
(注1) 金額については見込みであり、中期目標を達成するために必要な業務の実施状況等を勘案した施設・設備の整備や老朽度合等を勘案した施設・設備の改修等が追加されることもある。 (注2) 小規模改修について17年度以降は16年度同額として試算している。 なお、各事業年度の施設整備費補助金については、事業の進展等により所要額の変動が予想されるため、具体的な額については、各事業年度の予算編成過程等において決定される。			注) 金額は見込みであり、上記のほか、業務の実施状況等を勘案した施設・設備の整備や、老朽度合い等を勘案した施設・設備の改修等が追加されることもあり得る。					

○ 計画の実施状況等

平成21年度国立大学法人施設整備補助金交付決定通知書20文科施第299号及び20文科振第796号、20文科施第458号により施設整備費補助金の繰越額1,120百万円及び21文科施第6095号により109百万円交付された。

Ⅶ その他 2 人事に関する計画

中期計画	年度計画	実績
<p>教育職員については、中期計画をとおして教員数の適切な配置を行う。毎年度一定数の流動定員を計画すること等によって、必要な教育研究事業に任期付き教員を配置する。教員採用は公募を原則とする。適正な教員人事を行うために、教育に対する貢献度を重視し、研究や社会貢献と同時に教育上の業績を含め総合的に評価する多面的な評価システムを構築する。また、教員の研鑽の機会を積極的に計画する。</p> <p>事務系職員については、平成15年度から実施している学内公募制度をより充実した制度とし、人事交流での関係機関への出向についても、この制度を利用し意欲を持って実力が発揮できる人材の活用を行う。又、学生への支援業務などのサービス部門における人事配置は、学生ニーズに適応できるよう、定期的な研修制度を実施する。</p> <p>職員採用は、関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験を基本とし、専門性の高いポストには、一般公募により年齢枠を撤廃した幅広い人材の採用を行う。</p> <p>職員の給与を含める処遇については、平成16年度から評価を適正に実施し決定する。</p> <p>職員数の管理は、運営費交付金の予算管理に対応する適切な管理を行う。</p> <p>(参考) 中期目標期間中の人件費総額見込み 55,918百万円(退職手当は除く)</p>	<p>教育職員については、中期計画をとおして約10%に相当する学長が管理する教員数を設定し、必要な教育研究事業に適切な教員配置を行うとともに、任期付き教員を配置する。教員採用は公募を原則とする。適正な教員人事を行うために、教育に対する貢献度を重視し、研究や社会貢献と同時に教育上の業績を含め総合的に評価する多面的な評価システムを構築する。また、教員の研鑽の機会を積極的に計画する。</p> <p>事務系職員については、平成15年度から実施している学内公募制度をより充実した制度とし、人事交流での関係機関への出向についても、この制度を利用し意欲を持って実力が発揮できる人材の活用を行う。また、学生への支援業務などのサービス部門における人事配置は、学生ニーズに適応できるよう、定期的な研修制度を実施する。</p> <p>職員採用は、関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験を基本とし、専門性の高いポストには、一般公募により年齢枠を撤廃した幅広い人材の採用の方策を検討する。</p> <p>職員の給与を含める処遇については、平成16年度から評価を適正に実施し決定する。</p> <p>職員数の管理は、運営費交付金の予算管理に対応する適切な管理を行う。</p> <p>(参考1) 21年度の常勤職員数 876人 また、任期付職員数の見込みを12人とする。</p> <p>(参考2) 21年度の人件費総額見込み 8,933百万円(退職手当は除く)</p>	<p>「(1)業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための措置 1運営体制の改善に関する目標 中期計画③」P.11～12参照</p> <p>「(1)業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための措置 3人事の適正化に関する目標 中期計画①、②、④、⑥、⑦」P.17～22参照</p>

○ 別表1 (学部の学科、研究科の専攻等の定員未充足の状況について)

学部の学科、研究科の専攻等名	収容定員	収容数	定員充足率
	(a)	(b)	(b)/(a)×100
人文学部 人文コミュニケーション学科	680(人)	746(人)	109.7(%)
社会科学科	900	1,011	112.3
人文学科	—	23	
コミュニケーション学科	—	12	
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(11)	
人文学部 計	1,580	1,792	113.4
教育学部 学校教育教員養成課程 (うち教員養成に係る分野860人)	860	978	113.7
養護教諭養成課程 (うち教員養成に係る分野140人)	140	156	111.4
情報文化課程	240	263	109.6
人間環境教育課程	160	168	105.0
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(16)	
教育学部 計	1,400	1,565	111.8
理学部 理学科	820	904	110.2
数理科学科	—	8	
自然機能科学科	—	10	
地球生命環境科学科	—	6	
(3年次編入学定員で外数)	20	内数(19)	
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(9)	
理学部 計	840	928	110.5
工学部 機械工学科	340	429	126.2
生体分子機能工学科	240	268	111.7
マテリアル工学科	140	190	135.7
電気電子工学科	300	352	117.3
メディア通信工学科	180	261	145.0
情報工学科	260	313	120.4
都市システム工学科	200	240	120.0
知能システム工学科	200	227	113.5
〃 (夜間主コース)	160	176	110.0
物質工学科	—	6	
システム工学科	—	6	
〃 (夜間主コース)	—	9	
(3年次編入学定員で外数)	90	内数(74)	
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(61)	
工学部 計	2,110	2,477	117.4
農学部 生物生産科学科	180	212	117.8
資源生物科学科	140	167	119.3
地域環境科学科	140	155	110.7
(3年次編入学定員で外数)	20	内数(22)	

学部の学科、研究科の専攻等名	収容定員	収容数	定員充足率
(収容数は、外国人留学生を含む：内数) 農学部 計	480	内数(3) 534	111.3
学士課程 小計 (3年次編入学定員で外数)	6,280	7,296	116.2
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)	130	内数(115)	
学士課程合計	6,410	7,296	113.8
人文科学研究科 文化科学専攻 (修士課程) 地域政策専攻	13 26	12 19	92.3 73.1
文化構造専攻	3	8	266.7
言語文化専攻	3	5	166.7
コミュニケーション学専攻	5	6	120.0
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(21)	
人文科学研究科 計	50	50	100.0
教育学研究科 学校教育専攻 (修士課程) 障害児教育専攻	10 6	13 4	130.0 66.7
教科教育専攻	64	66	103.1
養護教育専攻	6	4	66.7
学校臨床心理専攻	18	20	111.1
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(5)	
教育学研究科 計	104	107	102.9
理工学研究科 理学専攻 (博士前期課程) 数理科学専攻	90 28	70 26	77.8 92.9
自然機能科学専攻	31	35	112.9
地球生命環境科学専攻	31	35	112.9
機械工学専攻	66	78	118.2
物質工学専攻	60	66	110.0
電気電子工学専攻	45	49	108.9
メディア通信工学専攻	42	41	97.6
情報工学専攻	44	51	115.9
都市システム工学専攻	40	49	122.5
知能システム工学専攻	30	51	170.0
システム工学専攻	45	37	82.2
応用粒子線科学専攻	50	39	78.0
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(34)	
大学院(博士前期課程)小計	602	627	104.2
(博士後期課程) 物質科学専攻	15	9	60.0
生産科学専攻	21	12	57.1
情報・システム科学専攻	21	25	119.0
宇宙地球システム科学専攻	15	19	126.7
環境機能科学専攻	15	20	133.3
応用粒子線科学専攻	27	24	88.9
(収容数は、外国人留学生を含む：内数)		内数(22)	

学部の学科、研究科の専攻等名	収容定員	収容数	定員充足率
大学院（博士後期課程）小計 （収容数は、外国人留学生を含む：内数）	114	109	95.6
理工学研究科 計	716	736	102.8
農学研究科 生物生産科学専攻 （修士課程） 資源生物科学専攻 地域環境科学専攻 （収容数は、外国人留学生を含む：内数）	26 34 26	46 42 28	176.9 123.5 107.7
農学研究科 計	86	116	134.9
（収容数は、外国人留学生を含む：内数） 大学院（修士課程）（博士前期課程）中計	842	内数（71） 900	106.9
（収容数は、外国人留学生を含む：内数） 大学院（博士後期課程）中計	114	内数（22） 109	95.6
大学院 小計 （収容数は、外国人留学生を含む：内数）	956	1,009 内数（93）	105.5
大学院 合計	956	1,009	105.5
[東京農工大学大学院連合農学研究科：参加校] [生物生産学専攻（博士課程）] [生物工学専攻（博士課程）] [資源・環境学専攻（博士課程）] [生物生産科学専攻（博士課程）] [応用生命科学専攻（博士課程）] [環境資源共生科学専攻（博士課程）] [農業環境工学専攻（博士課程）] [農林共生社会科学専攻（博士課程）]	— — — 45 30 21 12 12		
[連合農学研究科：参加校] 合計	120	45	—

（注1）10月入学者数：理工学研究科（博士後期課程）「物質科学専攻3名」、「生産科学専攻2名」
：農学研究科（修士課程）「地域環境科学専攻1名」
（10月入学者数は上記収容数には算入していない。）

（注2）[連合農学研究科：参加校] 合計の収容数45名は本学において研究指導を受けている学生数を示す。

特別支援教育特別専攻科 知的障害教育専攻	30	27	90.0
-------------------------	----	----	------

学部の学科、研究科の専攻等名	収容定員	収容数	定員充足率
附属幼稚園 3年保育 学級数3 年少組 年中組 年長組	30 30 30	31 31 27	100.0 100.0 90.0
2年保育 学級数2 年中組 年長組	35 35	33 34	94.3 97.1
附属小学校 学級数19（1）	736	709	96.3
附属中学校 学級数12	480	473	98.5
附属特別支援学校 小学部 学級数3 中学部 学級数3 高等部 学級数3	18 18 24	21 18 21	116.7 100.0 87.5

（注）附属小学校 学級数(1)は複式学級を内数で示す。

○ 計画の実施状況等

定員充足率が90%未満の学部、大学院はない。

○ 別表2(学部、研究科等の定員超過の状況について)

(平成20年度)

学部・研究科等名	収容定員 (A)	収容数 (B)	左記の収容数のうち						超過率算定 の対象となる 在学者数 (J) 【(B)-(D,E,F,G,Iの合計)】	定員超過率 (K) (J) / (A) × 100	
			外国人 留学生数 (C)	左記の外国人留学生のうち			休学 者数 (G)	留年 者数 (H)			左記の留年者数の うち、修業年限を 超える在籍期間が 2年以内の者の数 (I)
				国費 留学生数 (D)	外国政府 派遣留学 生数(E)	大学間交流 協定等に基 づく留学生等 数(F)					
(学部等)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(%)	
人文学部	1,580	1,809	12	0	0	0	30	84	68	108.29	
教育学部	1,400	1,588	18	0	0	0	12	42	40	109.71	
理学部	840	911	8	0	0	0	12	41	32	103.21	
工学部	2,110	2,478	57	2	20	0	32	173	153	107.63	
農学部	480	565	2	0	0	0	6	12	11	114.17	
(研究科等)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(%)	
人文科学研究科	50	52	16	1	0	0	5	8	6	80.00	
教育学研究科	104	106	3	0	0	0	0	5	5	97.12	
理工学研究科	716	732	62	15	2	0	17	40	36	92.46	
農学研究科	86	116	11	2	0	0	1	6	6	124.42	

○計画の実施状況等

定員超過率(K)が130%以上の主な理由: 該当なし

○ 別表2(学部、研究科等の定員超過の状況について)

(平成21年度)

学部・研究科等名	収容定員 (A)	収容数 (B)	左記の収容数のうち						超過率算定 の対象となる 在学者数 (J) 【(B)-(D,E,F,G,Iの合計)】	定員超過率 (K) (J) / (A) × 100	
			外国人 留学生数 (C)	左記の外国人留学生のうち			休学 者数 (G)	留年 者数 (H)			左記の留年者数の うち、修業年限を 超える在籍期間が 2年以内の者の数 (I)
				国費 留学生数 (D)	外国政府 派遣留学 生数(E)	大学間交流 協定等に基 づく留学生等 数(F)					
(学部等)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(%)	
人文学部	1,580	1,792	11	0	0	0	22	91	76	1,694	107.22
教育学部	1,400	1,565	16	0	0	0	12	49	39	1,514	108.14
理学部	840	928	9	0	0	0	13	46	38	877	104.40
工学部	2,110	2,477	61	1	21	0	24	181	155	2,276	107.87
農学部	480	534	3	0	0	0	2	11	11	521	108.54
(研究科等)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(%)
人文科学研究科	50	50	21	2	0	0	4	9	9	35	70.00
教育学研究科	104	107	5	0	0	0	0	3	3	104	100.00
理工学研究科	716	736	56	12	2	0	16	34	29	677	94.55
農学研究科	86	116	11	0	0	0	2	2	2	112	130.23

○計画の実施状況等

定員超過率(K)が130%以上の主な理由:農学研究科

・農学研究科では修士課程への進学を奨励しており、成績優秀者を多く受け入れて、専門的人材の育成に努めている。平成20、21年度においては生物生産科学専攻への志願者が特に多く、かつ入学試験の成績も良好であり、指導予定教員からも指導に万全を期すとの確約を得ることができたことから、定員超過の入学者数となったのが主な理由である。